



令和元年度（2019年度）
1.17 防災未来賞

ほうさい甲子園

記録誌

阪神・淡路から25年。伝えよう記憶と教訓



- 主 催● 兵庫県、毎日新聞社、(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
(阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター)
- 事務局● (特非)さくらネット
- 協 賛● UR都市機構



目 次

■ 発刊にあたって(兵庫県知事あいさつ)	P 2
----------------------	-----

■ 令和元年度1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」表彰式・発表会	P 3
----------------------------------	-----

- ◎ 開会のことば〈人と防災未来センター長あいさつ〉
- ◎ 主催者あいさつ〈毎日新聞大阪本社編集局長あいさつ〉
- ◎ 選考委員長の講評
- ◎ 表彰式・発表会概要
- ◎ 表彰式・発表会 会場展示の様子

■ 受賞校・団体紹介	P 12
------------	------

◎ グランプリ・大賞	P 14
◎ 優秀賞	P 19
◎ 奨励賞	P 22
◎ 特別賞	P 25
・URレジリエンス賞	P 26
・はばタン賞	P 28
・だいじょうぶ賞	P 30
・津波ぼうさい賞	P 32
・教科アイデア賞	P 33
・フロンティア賞	P 34
・継続こそ力賞	P 36

■ 応募校・団体紹介	P 37
------------	------

◎ 小学生部門	P 40
◎ 中学生部門	P 46
◎ 高校生部門	P 52
◎ 大学生部門	P 61
◎ 特別支援学校・団体部門	P 63

■ 資料	P 68
------	------

- ◎ 毎日新聞掲載記事
- ◎ 実施要項・選考委員会

※ 学校・団体紹介については、令和元年9月末時点で、応募書類を基に作成しています。



兵庫県知事

井戸 敏三

本年1月17日で、阪神・淡路大震災から25年を迎えました。

創造的復興を遂げた今、被災地の街並みに震災の傷跡はほとんど見られなくなりました。一方で、四半世紀の歳月を経て、兵庫でも震災を経験していない県民が増えており、震災が忘れられつつあるのではないかと懸念しています。あの悲しみや苦しみを繰り返さないためにも、震災を決して風化させてはなりません。

風化させないための基本は「忘れない」ですが、それだけでなく、震災の経験と教訓を「伝える」、これからに「活かす」、そして、南海トラフ地震をはじめとするあらゆる災害に「備える」必要があります。

震災の経験と教訓を継承しようと始まった1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」も回を重ねて15回目。この事業を通じて、学校や地域の優れた取り組みが全国で数多く共有され、我が国の地域防災・防災教育の向上に大きく寄与してきました。

今回も、全国から118にも及ぶ取り組みが寄せられました。地域に密着した防災減災活動や、一人も取り残さないことを目指した津波避難訓練、お年寄り等災害時要援護者への支援など、いずれも意欲と熱意にあふれた素晴らしい取り組みばかりです。まさに、日頃から防災について考え、行動する「災害文化」が確立されつつあるものと心強く感じています。

兵庫県では、震災25年の節目を機に原点に立ち返り、「あの震災が何であったのか」を改めて考え、今後に備えるための様々な取り組みを県民とともに実施しています。ぼうさい甲子園に挑戦してくれたみなさんには、これからも意欲的な活動を展開され、安全安心な社会づくりを先導いただくことを期待します。

「震災から25年 原点から 災害文化の 確立めざさん」

誰もが安全安心で元気に暮らせる社会に向けて、ともに歩んでいきましょう。



公益財団法人ひょうご震災記念 21世紀研究機構
阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター長

河田 恵昭

1. 17 防災未来賞「ぼうさい甲子園」を開催するにあたりまして、全国からたくさんの方にご参集いただきまして、ありがとうございます。

今回は、令和最初の「ぼうさい甲子園」になります。

元号が変わったからといって、災害が起こらなくなるわけでもなく、時代が令和となった5月以降も、6月の山形県沖地震から、9月の台風15号、10月の台風19号と立て続けに災害が起こり、大きな被害が出ました。

ところで、今年度のぼうさい甲子園は、青森県から沖縄県までの33都府県から、昨年を超える118校・団体の応募がありました。このことは、事業の全国的な広がりを感じるところですが、その一方で、防災教育は改めて学校だけの問題ではなく、家庭や地域と共にどう取り組むかという課題があると考えています。

例えば、2018年の西日本豪雨では、避難指示・勧告で実際に避難された方が、0.4%、すなわち住民1,000人中4人に過ぎなかったというデータがあります。あるいは、児童・生徒が学校で教わったように避難しようと言っても、親が動かなかったという話もよく耳にします。防災教育は、在学中というよりは、その教育を受けた子供達が親となったときに価値が高くなると考えています。ぼうさい甲子園は今回15回目を迎えるわけですが、今後も継続して行っていくことが重要であると考えています。

さて、ぼうさい甲子園の応募数は、毎年百数十件で推移する中で、特別支援学校の参加も増え、また、児童・生徒・学生が横断的に活動される団体からはどの部門で応募すれば良いかという悩みがあると聞いておりました。そこで、この度、多様な年齢層で構成される特別支援学校と団体を一つの部門として、新設いたしました。

また、これまでから協賛をいただいていたUR都市機構様から、より積極的にこのぼうさい甲子園に参画したいとのご提案を受け、被害を減らすと同時に復旧までの時間を短くすることにより、社会に及ぼす影響を減らす「レジリエンス」即ち「縮災」という考え方につながる取り組みに贈る「URレジリエンス賞」を新設いたしました。

社会や環境が変わりゆく中、災害やその被害も時代と共に変わっていきます。ぼうさい甲子園も少しずつ時代に合わせて変化しながら、さらに20年、30年と継続していきたいと考えています。今日の表彰式や発表会を通じて、皆さま方に、この「ぼうさい甲子園」という活動を十分、ご理解いただきまして、この活動がさらに広がって欲しいという私の願いをお伝えしまして、私の開会の挨拶とさせていただきます。



毎日新聞大阪本社編集局長

島田 智

本日はこの表彰式にたくさんの方にご出席いただき、誠にありがとうございます。今年も、ぼうさい甲子園には、日本全国から数多くの応募がありました。私も選考委員を務めさせていただきましたが、応募校それぞれに、独自の工夫がうかがわれ、またその発想の豊かさに驚かされました。

ぼうさい「甲子園」、つまりコンテストですから、順位をつけなければならないわけですが、なかなか甲乙つけがたく、難しい選考でした。きょうは表彰式とともに発表会もあります。みなさん全力でプレゼンをしていただくとともに、他校の発表を聞き、「あ、これはいいな」と思った点はどんどん取り入れてもらったら、と思います。

阪神大震災からまもなく25年です。私も、当時神戸市灘区の六甲道駅近くに住んでおり、震度7の揺れを体験しました。あの揺れの強烈さ、それを的確に表現できる言葉を、今でも見つけることができずにいます。幸いにも、私の住んでいたマンションは辛うじて倒壊を免れましたが、近くのアパートに住んでいた、当時毎日新聞でアルバイトをしていた学生さんは命を落としました。あの寒い朝、生と死を分けたものは何だったのか、彼の顔を思い浮かべながら、今でも考えることがあります。

災害は、常に我々の予測を超えてやってきます。阪神大震災、東日本大震災はもとより、近年の台風、豪雨災害を見るにつけ、その思いを深くします。みなさんの最終的な目標は、このぼうさい甲子園で賞を取ることはありません。いつか来るその日に、皆さんの日頃の活動のおかげで、どれだけの人を救うことができるか。それが大事なのであり、それができてこそ、この甲子園の価値があるのだと思います。これをぜひ忘れないでいただきたいと思います。

それでは皆さんの発表を楽しみにしています。皆さんも、ぜひ何かを得て帰ってください。

選考委員長 公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構
阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター長

河田 恵昭

第15回となる令和元年度の1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」ですが、回を重ねるにつれて、子どもたちや学生たちによる防災教育や防災活動の取り組みが着実に広がり、定着してきていることを主催者として喜ばしく思います。

審査にあたりましては、「地域性」や「独創性」、「自主性」、「継続性」といった4つの観点を選考基準に、選考委員会で審査し、決定しました。応募があった防災教育や防災活動の取り組みはどれも素晴らしいものばかりでしたが、これらの中で特に優れた39団体を表彰することとなりました。

「グランプリ」には、「大学生の部」の「関西大学社会安全学部近藤研究室」が選ばれました。この近藤研究室は、日本でも珍しい「災害ジャーナリズム論」のゼミで、このプロジェクトとともにゼミの開講をきっかけにスタートしました。テレビやラジオ、インターネットなどあらゆるメディアを駆使し、各地の防災活動や防災学習を支援しています。このぼうさい甲子園には、平成27年度から継続して応募され、教科アイデア賞、優秀賞、ぼうさい大賞と着実にステップアップし、今回は見事グランプリに輝きました。

ぼうさい大賞「小学生の部」は、徳島県「阿南市立津乃峰小学校」です。平成26年度から活動されており、その中で、このぼうさい甲子園を始め、様々な表彰を受けたり、報道されたりすることで、児童たちには自尊感情が高まり、地域の防災リーダーとしての自覚をもって主体的に学習に取り組むなど、質の高い活動を継続して行っており、昨年度に引き続きぼうさい大賞に選ばれました。

ぼうさい大賞「中学生の部」は、高知県「黒潮町立佐賀中学校」です。この中学校は、南海トラフ巨大地震により日本一の津波高の津波襲来予想がされている地域にあり、中学生が地域の牽引役として「犠牲者0」の防災活動を目指しています。マンネリ化を防ぐため、メキシコとの交流を行うなどの工夫もあり、ぼうさい大賞に選ばれました。

ぼうさい大賞「高校生の部」は、「兵庫県立山崎高等学校」です。この学校は「山崎断層」と呼ばれる活断層の上に位置し、いつ大地震に襲われてもおかしくない状況にあることから、平成24年度に生徒主体の防災体験活動としてスタートしました。継続して、学科の専門性を活かした活動を行い、今年度は様々な非常食について研究を行うなど、3年連続で「ぼうさい大賞」受賞となりました。

ぼうさい大賞「特別支援学校・団体の部」は、「埼玉県立日高特別支援学校」です。東日本大震災をきっかけに訓練等を積み重ね、5年前から行っている「かわせみ防災タイム」などこれまでの活動を検証し、今年度は新たな実践活動、「忍者のポーズ」を開発したことなどにより、これまでの他部門での優秀賞・奨励賞の受賞に引き続き、今回新たに設けられた本部門での「ぼうさい大賞」を受賞しました。優秀賞や奨励賞の受賞校につきましては、地域との連携やマンネリ化を防ぎつつ継続した活動などが高く評価されています。

今年度新たに設けられた「URレジリエンス賞」では、事前復興まちづくり計画や地域の防災文化の創出など、縮災・減災につながる活動が高く評価されています。被災の経験と教訓をもとに生まれた活動に対してエールを贈る「はばタン賞」については、創作劇、紙芝居、歌といったパフォーマンスなどを活用した伝承活動に取り組んでいる学校等に授与しました。このほか、安全・安心なまちづくりを目指す取り組みを対象とした「だいじょうぶ賞」や、津波避難訓練などの津波対策に関する優れた活動を対象とした「津波ぼうさい賞」、過去数年にわたり継続的に優れた防災活動を対象とする「継続こそ力賞」など、多様な観点から特別賞を授与しました。

また、防災力強化県民運動ポスターコンクールにつきましては、兵庫県内の小、中、高校生から、751点ものご応募をいただきました。応募作品は、水害の多発を反映してか、全体的に台風や大雨時の避難を訴えるものが多かったと感じました。受賞作品の多くは「避難」の重要性を啓発したものが多く、災害時のボランティアの大切さを訴えるものも評価されました。地震のみならず、台風や大雨等様々な自然災害に対して備えを訴える作品が多いということで、災害の多様性についても、次世代を担う若い世代に浸透してきており、今後とも、安全で安心な社会づくりを進めるため、「防災力強化県民運動」が引き続き、若い世代を含め県民一人ひとりに広がっていった欲しいと願うところです。

開会のあいさつでも申し上げましたが、今回が、令和最初のぼうさい甲子園となります。元号は変わりましたが、災害列島日本には節目がなく、今後とも大災害の発生が懸念されます。この機会に、私たちが、より一層、災害に立ち向かう決心をしていかなければなりません。本日、受賞校の皆様、優れた防災教育・防災活動について発表いただき、これをさらに参考にしながら、今後とも、安全で安心な社会づくりに向けた更なる取組を継続されることを、主催者として期待しております。

令和元年度 1.17 防災未来賞「ぼうさい甲子園」

表彰式・発表会 概要



趣 旨

阪神・淡路大震災の経験を通して学んだ自然の驚異や生命の尊さ、ともに生きることの大切さを考える『ぼうさい教育』を推進し、未来に向け安全で安心な社会をつくる一助とします。児童・生徒・学生が学校や地域において主体的に取り組む、『ぼうさい教育』に関する先進的な活動を顕彰します。

プログラム

13:00 開 会

13:05 開会のことば
主催者あいさつ

- 河田恵昭 (公財) ひょうご震災記念 21 世紀研究機構
阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター長
- 井戸敏三 兵庫県知事
- 島田 智 毎日新聞大阪本社編集局長

13:20 表彰式

- 1.17 防災未来賞「ぼうさい甲子園」表彰
(グランプリ・ぼうさい大賞、優秀賞、奨励賞、UR レジリエンス賞、
はばタン賞、だいじょうぶ賞、津波ぼうさい賞、教科アイデア賞、
フロンティア賞、継続こそ力賞)
- 防災力強化県民運動ポスターコンクール表彰
(ひょうご安全の日推進県民会議会長賞、人と防災未来センター長賞)

14:15 発表会

- 1.17 防災未来賞「ぼうさい甲子園」受賞団体による活動発表
司会：神戸市立神港橋高等学校 放送部

15:55 講 評

- 河田恵昭 (公財) ひょうご震災記念 21 世紀研究機構
阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター長

16:00 閉 会

全国各地から約 400 名の方が
ご来場くださいました



受賞校・団体に
盛大な拍手が
送られました

表彰式・発表会の様子



神戸市立神港橋高等学校
放送部の生徒が
司会を務めました

司会



〈グランプリ〉
関西大学社会安全学部
近藤研究室

〈高校生部門 ぼうさい大賞〉
兵庫県立山崎高等学校



〈小学生部門 ぼうさい大賞〉
阿南市立津乃峰小学校



〈中学生部門 ぼうさい大賞〉
黒潮町立佐賀中学校



〈特別支援学校・団体部門 ぼうさい大賞〉
埼玉県立日高特別支援学校



〈小学生部門 優秀賞〉
四万十町立興津小学校



〈中学生部門 優秀賞〉
徳島市津田中学校
防災学習倶楽部



〈高校生部門 優秀賞〉
和歌山県立熊野高等学校
Kumano サポーターズリーダー部



〈大学生部門 優秀賞〉
静岡大学教育学部
藤井基貴研究室



〈特別支援学校・団体部門 優秀賞〉
千葉県立東金特別支援学校

今年度は受賞39校・団体の中から、33校・団体のみなさんが、式典にご参加くださいました。ありがとうございました。

【奨励賞】

●石巻市立広瀬小学校(宮城県) ●岡崎市立常盤東小学校(愛知県) ●印南町立印南中学校(和歌山県) ●気仙沼市立階上中学校(宮城県) ●兵庫県立尼崎小田高等学校普通科看護医療・健康類型(兵庫県) ●岩手県立大槌高等学校復興研究会(岩手県) ●愛知工科大学板宮研究室(愛知県) ●宮城県立支援学校女川高等学園(宮城県)

【URレジリエンス賞】

●美波町立由岐小学校(徳島県) ●四万十町立興津中学校(高知県) ●和歌山県立日高高等学校(和歌山県) ●静岡県立御殿場特別支援学校(静岡県)

【はばタン賞】

●呉市立広南中学校(広島県) ●きずなFプロジェクト(宮城県) ●女川1000年後のいのちを守る会(宮城県) ●子どもに音楽を贈る会『福島しあわせ運べるように合唱団』(福島県)

【だいじょうぶ賞】

●新宮町立新宮東中学校(福岡県) ●大阪市立白鷺中学校(大阪府) ●神戸市立神鋼橋高等学校 DiReSt67(兵庫県) ●中央大学ボランティアセンター公認学生団体 チーム防災(東京都)

【津波ぼうさい賞】

●釜石市立鶴住居小学校(岩手県) ●千葉県立長生特別支援学校(千葉県)

【教科アイデア賞】

●兵庫県立松陽高等学校(兵庫県)

【フロンティア賞】

●福山市立鞆の浦学園(広島県) ●足立区立西新井小学校(東京都) ●岡山市立上道中学校(岡山県) ●横須賀市立浦賀中学校(神奈川県)

【継続こそ力賞】

●上富田ふれあいルーム(和歌山県) ●名古屋高等学校減災チーム(愛知県)

故郷を思う気持ちが、地域防災活動のエネルギーとなり、1つ1つの活動の積み重ねが防災力の底上げにつながる事が発信されました。

令和元年度 1.17 防災未来賞「ぼうさい甲子園」
表彰式・発表会 会場展示の様子をご紹介します！

グランプリ

大阪府
関西大学
社会安全学部
近藤研究室



小学生の部
ぼうさい大賞

徳島県
阿南市立津乃峰小学校



高校生の部
ぼうさい大賞

兵庫県立山崎高等学校



中学生の部
ぼうさい大賞

高知県
黒潮町立佐賀中学校



特別支援学校・団体の部
ぼうさい大賞

埼玉県立日高特別支援学校



小学生の部
優秀賞

高知県
四万十町立興津小学校



中学生の部
優秀賞

徳島市津田中学校
防災学習倶楽部



高校生の部
優秀賞

和歌山県立熊野高等学校
Kumano サポーターズリーダー部



大学生の部
優秀賞

静岡大学教育学部
藤井基貴研究室



特別支援学校・団体の部
優秀賞

千葉県立東金特別支援学校



小学生の部
奨励賞

愛知県
岡崎市立常磐東小学校



中学生の部
奨励賞

和歌山県
印南町立印南中学校



大学生の部
奨励賞

愛知工科大学 板宮研究室



URレジリエンス賞

高知県
四万十町立興津中学校



URレジリエンス賞

和歌山県立日高高等学校



URレジリエンス賞

静岡県立御殿場
特別支援学校



はばタン賞

広島県
呉市立広南中学校



はばタン賞

子どもに音楽を贈る会
『福島しあわせ運べるように合唱団』



だいじょうぶ賞

兵庫県
神戸市立神港橋高等学校 DiReSt67



だいじょうぶ賞

大阪市立白鷺中学校



津波ぼうさい賞

岩手県
釜石市立鶴住居小学校



津波ぼうさい賞

千葉県立長生特別支援学校



教科アイデア賞

兵庫県立松陽高等学校



フロンティア賞

広島県
福山市立鞆の浦学園



フロンティア賞

神奈川県
横須賀市立浦賀中学校



継続こそ力賞

和歌山県
上富田ふれあいルーム



継続こそ力賞

愛知県
名古屋高等学校
減災チーム



特別展示



絵画教室
アトリエ太陽の子

展示にご協力いただいた
学校・団体のみなさま、
ありがとうございました！

令和元年度 1.17 防災未来賞「ぼうさい甲子園」

受賞校・団体のご紹介

今年度は、39 校・団体が受賞いたしました。

来年度も、更にレベルアップした取り組みのご応募、お待ちしております。



賞	部 門	都道府県	学校・団体名	ページ
グランプリ	大学生部門	大阪府	関西大学社会安全学部近藤研究室	P.14
大 賞	小学生部門	徳島県	徳島県阿南市立津乃峰小学校	P.15
	中学生部門	高知県	高知県幡多郡黒潮町立佐賀中学校	P.16
	高校生部門	兵庫県	兵庫県立山崎高等学校	P.17
	特別支援学校・団体部門	埼玉県	埼玉県立日高特別支援学校	P.18
優秀賞	小学生部門	高知県	四万十町立興津小学校	P.19
	中学生部門	徳島県	徳島市津田中学校 防災学習倶楽部	P.20
	高校生部門	和歌山県	和歌山県立熊野高等学校 Kumano サポーターズリーダー部	P.20
	大学生部門	静岡県	静岡大学教育学部藤井基貴研究室	P.21
	特別支援学校・団体部門	千葉県	千葉県立東金特別支援学校	P.21
奨励賞	小学生部門	宮城県	石巻市立広瀬小学校	P.22
	小学生部門	愛知県	岡崎市立常磐東小学校	P.22
	中学生部門	和歌山県	印南町立印南中学校	P.23
	中学生部門	宮城県	気仙沼市立階上中学校	P.23
	高校生部門	岩手県	岩手県立大槌高等学校復興研究会	P.23
	高校生部門	兵庫県	兵庫県立尼崎小田高等学校普通科看護医療・健康類型	P.24
	大学生部門	愛知県	愛知工科大学板宮研究室	P.24
	特別支援学校・団体部門	宮城県	宮城県立支援学校女川高等学園	P.24

◎特別賞 (P.25)

賞	部 門	都道府県	学校・団体名	ページ
URLゼリエンス賞	小学生部門	徳島県	美波町立由岐小学校	P.26
	中学生部門	高知県	四万十町立興津中学校	P.26
	高校生部門	和歌山県	和歌山県立日高高等学校	P.27
	特別支援学校・団体部門	静岡県	静岡県立御殿場特別支援学校	P.27
はばタン賞	中学生部門	広島県	呉市立広南中学校	P.28
	高校生部門	宮城県	きずなFプロジェクト	P.28
	大学生部門	宮城県	女川 1000 年後のいのちを守る会	P.29
	特別支援学校・団体部門	福島県	子どもに音楽を贈る会『福島しあわせ運べるように合唱団』	P.29
だいじょうぶ賞	中学生部門	福岡県	新宮町立新宮東中学校	P.30
	中学生部門	大阪府	大阪市立白鷺中学校	P.30
	高校生部門	兵庫県	神戸市立神港橋高等学校 DiReSt 67	P.31
	大学生部門	東京都	中央大学ボランティアセンター公認学生団体 チーム防災	P.31
津波ぼうさい賞	小学生部門	岩手県	釜石市立鶴住居小学校	P.32
	特別支援学校・団体部門	千葉県	千葉県立長生特別支援学校	P.32
教科アイデア賞	高校生部門	兵庫県	兵庫県立松陽高等学校	P.33
フロンティア賞	小学生部門	広島県	福山市立鞆の浦学園	P.34
	小学生部門	東京都	足立区立西新井小学校	P.34
	中学生部門	岡山県	岡山市立上道中学校	P.35
	中学生部門	神奈川県	横須賀市立浦賀中学校	P.35
継続こそ力賞	小学生部門	和歌山県	上富田ふれあいルーム	P.36
	高校生部門	愛知県	名古屋高等学校減災チーム	P.36

大阪府

みんなのぼうさい～地域メディアを活用した防災プロジェクト～

関西大学社会安全学部 近藤研究室

小学生約500人 中学生約50人
高校生約50人 大学生約100人
教職員約100人 大人約2200人
障がい者・難病患者さんなど

地震

津波

火災

雷

台風

大雨・洪水

竜巻

大雪

防災・防火・防犯・暮らしの安全一般

all phase, all hazard



目的・きっかけ

- ・ 多様なメディアを駆使して「みんなのぼうさい」を実現することを目指す。
- ・ より多くの支援が必要な人に手を差し伸べられるように、プロジェクトを持続的に展開し、内容を深化させる。

活動内容

- ・ ケーブルテレビ、コミュニティFMなどの地域メディアを活用して、地域防災・防災学習の充実を図る。
- ・ 校内放送、音声告知放送、カレンダー、写真集など、地域メディアを発掘し、あらたな活用法を考案する。
- ・ 難病患者、障害児者、外国人など、多様な人たちを対象として、きめこまかい防災支援をおこなう。
- ・ 限界集落における防災支援から、あらたなライフスタイルの模索をおこなう。

成果

- ・ フィールドで多様な人たちとつながることによって、「みんなのぼうさい」を活性化することが出来ている。
- ・ 大学を卒業したメンバーともつながり、大学の枠を超えて社会に貢献することができている。

工夫・ポイント

- 様々なメディアをクロスさせることによって、多角的・重層的・持続的に情報発信することができている。
- 「本当に力になる、本当の力にする」ために、理論と実践をリンクさせ、実証的な事業評価をおこなっている。



小学生部門 ぼうさい大賞

徳島県

持続可能な日常としての防災教育
～地域と共に 命を守るために～

阿南市立津乃峰小学校

小学生268人 中学生20人 大学生8人
教職員91人 大人530人 その他104人

地震

津波

火災

台風

大雨・洪水

目的・きっかけ

- ・ 「自分の命は、自分で守る。みんなの命は みんなで守る。」
- ・ 将来、自分が住む地域の率先避難者となる児童を育てたい。



活動内容

- ・ スモールステップでの実践的な避難訓練
- ・ 毎朝歌い、町内どこでも避難できる 「避難所巡り数え歌」
- ・ 自分の防災力が分かる 「つのみね 防災マイスター」認定制度
- ・ 様々な教科で、防災の視点を取り入れた活動
- ・ 地域と共にすすめる 「防災フェスタ」&「親子避難所宿泊体験学習」

成果

- ・ 日常化された避難訓練で、機敏な対応・落ち着いた行動が取れるようになった。
- ・ 毎朝流れる「避難所巡り数え歌」で子どもも町民も、いつの間にか避難所を覚え、いつでも挑戦できる「防災マイスター」問題で自分の防災知識力を確認でき、意識の向上に繋がった。
- ・ 日々の学習活動の中から、生まれた児童手作りの「防災カルタ」「防災新聞」「防災パンフレット」は、全校児童が楽しみながら学び、また、町内や中学校区への発信で、地域の防災啓発となった。
- ・ 地域の人材を生かし、地域が主体となる防災活動への第1歩が図られた。

工夫・ポイント

- ・ 持続可能な防災教育として、日常的で、常に進化していく防災をすすめている。

高知県

かかりがましい防災～日本一の防災を目指して～

幡多郡黒潮町立佐賀中学校

小学生158人 中学生915人 高校生33人
大学生3人 教職員221人 大人330人
その他123人

地震

津波

台風

大雨・洪水

土砂災害

目的・きっかけ

- ・ 本校のある黒潮町佐賀地域に、南海トラフ巨大地震で日本最大級の津波が襲来するという内閣府の想定をきっかけに、本校では本格的に防災活動を取り組み始めた。災害の「犠牲者0」を目指すことを目的に、本校の中学生が地域防災の牽引役として、地域住民や小学校、他国の中学校と連携した防災実践に取り組んだ。



活動内容

- ・ 地域の要配慮者を対象に戸別的に防災意識調査を行い、調査結果に基づき中学生が訓練参加の呼びかけやサポートを行った。
- ・ 沿岸部や中山間部での屋内避難訓練や、メキシコ合衆国の中学校との合同津波避難訓練、臨時情報についての解説ビデオの制作などをはじめとした生徒主体で地域と連携した防災活動の実施。

成果

- ・ 訓練参加率が飛躍的に向上した。
- ・ 本校生徒のみならず、地域住民やメキシコの中学生にも好影響を与えた。

工夫・ポイント

- ・ “つながりの強い”ことを意味する「かかりがましい」という佐賀地域の方言を用いた「かかりがましい防災」を合言葉に、学校・地域・行政・大学が連携した新規性の高い防災活動を実践した。
- ・ 本校の伝統的な地域実践を基盤として、継続的な防災活動を実現した。

兵庫県

地域とともに歩む防災・減災プロジェクト

兵庫県立山崎高等学校

高校生663人 教職員55人 大人17人

地震

大雨・洪水

目的・きっかけ

- 生徒達の手で企画・運営することで、主体的に地域防災に取り組む姿勢を身につける。



活動内容

- 【生徒企画の防災体験活動】
ポリ袋調理を生徒がレクチャーし全員で体験。非常食についてのプレゼン、クイズ大会、市販の非常食の試食。プログラム立案から、準備、進行、まとめまで生徒が行う。生徒会は千人鍋で豚汁炊き出し。森林環境科学科は木造仮設住宅の設置。その他、土嚢作り体験、煙体験、搬送・救急処置訓練。
- 【非常食ガイドの作成・配布】
実践的に研究した成果をまとめる。地域や関係諸機関へ配布。
- 【商業施設での防災ワークショップ開催】
地域の防災意識向上に貢献。

成果

- 生徒主体の学習により学校や地域の防災意識を高めることができた。
- 学校行事として明確に位置づけられ、一層充実した活動となった。
- 生徒は、自分たちが地域を守るという姿勢を身につけ、主体的に行動する力を身につけた。

工夫・ポイント

- 生徒組織を作ることによって各自が自らの役割を認識し、高い意識と責任感で活動を作り上げている。
- 教師の指示を待つのではなく、生徒が自分の課題として考えて動く。それが、生徒の誇りにもなっている。

特別支援学校・団体部門 ぼうさい大賞

埼玉県

私たちの命を守るために考え、行動しよう！
かわせみ防災タイム

埼玉県立日高特別支援学校

小学生64人 中学生34人 高校生33人
大学生15人 教職員124人
大人170人 その他 15人

地震

火災

台風

大雨・洪水

目的・きっかけ

- ・ 今年度は「ダンゴムシのポーズ」では身を守ることが難しいのではないか？という疑問をきっかけに、これまでの学習を見直した。障害のある子どもたちが危険や安全を判断できるような学習を積み重ね、自分又は教員と一緒に行動できるような、新しい「かわせみ防災タイム」を作り上げる。



活動内容

- ・ 防災委員会による命を守る場所に「みんなの命を守るゾウ」の表示。また、毎月11日を「ゾウの日」として啓発。
- ・ 重複学級では自分で命を守るために忍者のポーズの動きを確認。一般学級ではARの活用、マイタイムライン作成「いのちを守る物語」等で災害をわがこととしてイメージし、命を守るための行動を具体化する。

成果

- ・ 特別支援教育では、分かりやすい動きや言葉かけが大切である。パッと動く俊敏さ、安全なものに背を預けて周囲の危険な状況をしっかり確認する動きが忍者に似ていた。忍者に扮した教員の動きにより、新しい行動についても抵抗なく、少しずつ受け入れている様子である。あたりまえ防災体操も歌詞を変えることで新しい学びを支えようとしている。

工夫・ポイント

- ・ 誰でも支援を受けながら自分の命を守るためにどのように行動するか？「忍者のポーズ」では、全ての児童生徒が周囲の状況を確認すること、どのように行動するか判断したり、教員と一緒に行動したりすることができると考えている
- ・ 災害をわがこと化するため、疑似体験や物語づくりを行った。友達と意見を出し合う中で学びを深めることができた。

優 秀 賞

高知県

遊んでつながる、新しい防災マップ

四万十町立興津小学校

小学生30人 教職員14人 その他8人

地震

津波

土砂災害

〈目的・きっかけ〉

- ・ 南海トラフ地震から、「全員助かる」を目標に、地域と学校が一体となっていく防災。
- ・ 長年の防災マップを踏襲することで、主体性を持ち、地域防災貢献の姿勢を身につける。
- ・ 新たな視点を取り入れた「防災すごろく」で、地域と触れ合う。

〈活動内容〉

- ・ 「地域と繋がり、何度でも遊んで学べる」新しい形の防災マップ「防災すごろく」作り。
- ・ 4年間の防災マップのデータをデジタル化、発信。

〈活動の成果〉

- ・ 防災や安全の視点で見える目が培われた。
- ・ 相手意識を持ち、分かりやすく伝える工夫を考え、表現できた。
- ・ 地域の良さを再発見し、郷土愛を育む機会となった。
- ・ 地域の方と防災すごろくを行い、情報を伝えるだけでなく、新しい情報やアドバイスを得、次への足掛かりとできた。
- ・ 地域の方の反応を肌で感じ、地域貢献の意欲が高まった。

〈活動の工夫・ポイント〉

- ・ 防災マップにすごろくの要素を取り入れることで、マンネリ化を打破。
- ・ マス目にストーリー性を持たせることで地域を散策している感覚を味わえ、ゲーム性を持たせることで、何度でも遊び、学べるマップにできた。



徳島県

絆を深め、地域と共に歩む防災教育

徳島市津田中学校防災学習倶楽部

中学生45人 高校生23人 大学生20人
教職員24人 町内協力者約30人 その他17人

地震

津波

大雨・洪水

〈目的・きっかけ〉

- ・ 地域を知り、地域の将来を考え、地域を好きな生徒を育てる。
- ・ 地域のリーダーとして防災・減災に取り組む姿勢を育む。

〈活動内容〉

- ・ フィールドワークや座談会などの活動を行い、地域との交流を深める。
- ・ 防災学習を通して知識を深め、出前授業などで啓発活動を行う。

〈活動の成果〉

- ・ 地域のことを知ることができ、地域への愛着が深まった。
- ・ さまざまな経験から、何事にも積極的に活動に取り組むことができ、コミュニケーション能力が向上した。

〈活動の特徴〉

- ・ 学校外の諸団体や大学と交流を深め、多様な学習を行っている。
- ・ 継続して学習を行い、現在は社会人から中学生までが協力して、学習に取り組んでいる。



優 秀 賞

和歌山県

すべての命を救う ～AEDマップと心肺蘇生ダンス啓発活動～

和歌山県立熊野高等学校 Kumanoサポーターズリーダー部

小学生114人 中学生22人 高校生647人
教職員75人 大人89人 高齢者・支援学校生徒など332人

地震

津波

台風

大雨・洪水

〈目的・きっかけ〉

- 平成23年台風12号紀伊半島大水害で、当時3年生の仲間が亡くなった。災害の教訓を生かそうと、「地域に根差し貢献する高校生リーダーを目指して」をモットーに、Kumanoサポーターズリーダーが活動を始めた。部員たちが地域社会の諸課題を解決するため学習を行い、ボランティア等の社会的活動に生かすことを通して、市民的责任や社会的役割を育むことが目的である。

〈活動内容〉

- 災害時要援護者を認識するため、積極的にボランティア活動を行う(年間130回H25より継続)高齢者安否確認ハートフルチェックは、火曜の放課後行っており、登録者数は300軒を越え、エコノミクス症候群予防体操(H28)に続き、心肺蘇生ダンスを開発(H30)、今年度はAEDマップ作成と、AED使用時のプライバシー保護「ハートフルシート」の開発に取り組む。毎年上富田町と合同で防災訓練を行っている(参加者数約1,000人)。

〈活動の成果〉

- 地域との絆が深まり、町が活気に満ちあふれている。5つの絆作りボランティアが、認知症予防や子どもの学力・体力の向上など、課題解決にも繋がっている。

〈活動の工夫・ポイント〉

- 高校生が発信する世代間交流を通じて、町全体がWin-Winの関係になっていることがポイントである。



静岡県

静岡大学発「地域連携防災教育プログラム」の実践・普及

静岡大学教育学部藤井基貴研究室

小学生6320人 中学生3320人 高校生1120人
大学生2870人 教職員5520人 大人810人
幼児2920人、特支2480人

地震

津波

火災

雷

台風

大雨・洪水

竜巻

その他

〈目的・きっかけ〉

- 教職を目指す学生たちが主体となって防災教材の開発・実践・普及を図っている。
- 学校・地域・家庭を通して取り組める教育プログラムと「災害時要援護者」への対応を推進する教材開発を進めることで、「トータル」(総合的)かつ「インクルーシブ」(包摂的)な教育実践の普及を目指している。

〈活動内容〉

- 「防災道德」授業を考案し、現職教員と協働して「考える防災」をテーマとした授業改善・普及
- イラスト教材、防災紙芝居、防災絵本などを開発し、授業パッケージを現場に提供
- 教育・行政機関や団体組織と連携及び協働し、防災ネットワークの構築

〈活動の成果〉

- 活動への参加者は25,000名を超え、国内外で教材やプログラムが活用されている。
- 幅広い防災教育を推進する教師や指導者の養成に貢献している。

〈活動の特徴〉

- 持続可能な防災教育をテーマに連携を広げ、誰もが使いやすく、使ってみたくなる教材作りを心がけている。
- 学生の主体的な活動を通して防災教育を推進し、それらの経験から教師としての力量形成を図っている。
- 研究室の活動に留まらず、新たに学生団体を立ち上げて、活動の裾野を広げている。



優 秀 賞

千葉県

「あたりまえ防災」で災害に強いまちづくり

千葉県立東金特別支援学校

小学生100人 中学生30人 高校生80人
大学生20人 教職員120人 大人1200人

地震

津波

火災

雷

台風

大雨・洪水

竜巻

大雪

〈目的・きっかけ〉

- ・平成23年の防災教育チャレンジプランをきっかけとした防災活動を継続させてきた。
- ・本校の取り組みを知ってもらい、地域と共に活動を行うことで、地域の防災力を高める。
- ・「あたりまえ防災」で災害に強いまちづくり

〈活動内容〉

- ・児童生徒による「あたりまえ防災隊」を中心として、自発的に防災活動に取り組む。
- ・東金市「青少年まちづくり活動」に参加し、地域の防災意識を高める活動にも参加
- ・「防災ウォークラリー」を児童生徒主体に行い、地域、行政、近隣の学校と共に運営
- ・「あたりまえ防災Ⅱ～ぼくらの合い言葉～」の映像化。防災教育動画の配信

〈活動の成果〉

- ・これまで積み重ねてきた防災活動を、地域の人に広く知ってもらえるようになった。
- ・地域の様々な機関の理解・協力を得て、一緒に防災活動を実施することができた。
- ・メディアでの紹介、取材が増え、活動を知ってもらう一助になった。
- ・地域からの要請を受けて、校外で防災活動を行うことが増えた。

〈活動の工夫・ポイント〉

- ・地域、関係機関との連携。同世代との連携の強化
- ・児童生徒主体の防災活動を進める。



奨励賞

宮城県

未来へつなごう！私たちの町・広瀨

地震

台風

大雨・洪水

その他

石巻市立広瀨小学校

小学生182人 教職員17人

〈目的・きっかけ〉

- 東日本大震災の教訓から、普段から学校と地域が連携することの大切さ、つまり自助だけでなく共助・公助の取組も重要であることを痛感した。そのため、学校と地域が協力しあえる体制作りを行うことが活動の目的となった。

〈活動内容〉

- 毎年行われる学校地域合同防災訓練と、その実施に向けた年に3～4回行われる広瀨地区学校地域防災連絡会
- セーフティープロモーションスクール認証

〈活動の成果〉

- 本校を卒業した中学生も自主的に学校地域合同防災訓練に参加し、受付や炊き出しの配膳を行っていた。これまで学校と地域で連携して行ってきた取組により児童に共助の意識が生まれ、実を結びつつある。地域の方々から生まれた自主防災組織の「自分たちが地域を守る」という意識が様々な活動を通して児童にも受け継がれている。

〈活動の工夫・ポイント〉

- 保護者から地域の方々、石巻市内、仙台管区气象台、県内と防災講演会の内容を少しずつ広げていくことで、防災意識も広がっていくように計画的・発展的に進めている。



愛知県

地域・学校・関係諸機関が連携した防災活動

地震

火災

台風

大雨・洪水

土砂崩れ等の土砂災害

岡崎市立常磐東小学校

小学生89人 大学生5人 教職員14人 大人32人

〈目的・きっかけ〉

- 地域の防災・減災のリーダーとして、児童が自分で判断し、自らの身の安全を確保できるようにする。
- 地域と協力して、学区の防災活動を推進することを通して、地域の一員としての自覚を培う。
- 防災を通して多くの人とかかわり、思考力・判断力・表現力を培い、児童の自主性や達成感を育む。

〈活動内容〉

- 児童が、地域・大学と共同で学区の危険箇所を調査し、防災電子マップで地域に発信する。
- 県外の小学生とテレビ防災会議で互いの取り組みについて意見交換をして改善を図る。
- 児童が、地域で「土砂災害マイタイムライン」を実施したり、非常食や飲料水を独自販売したりする。

〈活動の成果〉

- 課題を見つけ、他と連携しながらゴールにたどりつく。それが自信につながり、「自分が地域の人の役に立っている」という自存感情が、さらに学ぶことの楽しさにつながっている。
- 児童の熱心な取り組みに影響され、地域の人々の防災意識の向上が見られる。

〈活動の工夫・ポイント〉

- 全国初「土砂災害マイタイムライン」(防災会議で制作)「降雨災害カードゲーム」(児童が授業で作成)
- 「防災会議」(学校・大学・地域・保護者・NPO・行政の代表の20名で構成し、年6回開催)



和歌山県

犠牲者0を目指す。
災害時要援護者の避難と避難後の生活への備え

地震

津波

大雨・洪水

印南町立印南中学校

小学生70人 中学生27人 教職員10人 大人80人

〈目的・きっかけ〉

- 現在の取り組みのきっかけは、2017年度の県立博物館主催の防災ワークショップで避難をあきらめた人々が多数いることを知ったことから始まっている。災害時要援護者になったつもりで避難訓練をしてみても避難路の問題点や犠牲者0を目指すための条件を探った。それをどう地域に活かすか考える。併せて災害後の生活を少しでも快適にするための食やエネルギーについて具体的な事例を積み上げる。

〈活動内容〉

- 地震津波災害と気象災害についての学習、避難所運営実習、車椅子避難実習、太陽傘の作製、防災食の作り方習得、災害記録をよりわかりやすい形に翻案、世界津波の日啓発活動、小学校でのおすそ分け講座等々

〈活動の成果〉

- 災害や防災について実習を通じて学んでいるので、被災を我がこととして考える生徒が増えてきた。学んだことを地域のために役立てようとする生徒が出てきた。

〈活動の工夫・ポイント〉

- 生徒は、災害や防災については知識やスキルが乏しいので、それぞれのテーマについて教員がつき、学習過程に従って、アドバイスをしたり、問題点を整理しながら提示することで、生徒の問題意識や自主性を引き出すようにしている。



奨励賞

宮城県

東日本大震災を負の遺産から正の財産へ転化する防災学習

地震

津波

気仙沼市立階上中学校

中学生112人 教職員16人

〈目的・きっかけ〉

- ・ 東日本大震災に関する地域住民へのアンケート調査やインタビューを通して、そこから得た考察や教訓等を発信・伝承することで、震災の風化や意識の低下を防ぐとともに、「自助」「互助・共助」「自助・公助」を考え続ける。
- ・ 調査や聞き取りからまとめ、発信、伝承の学習活動を通して、生徒の自己肯定感の向上を図る。

〈活動内容〉

- ・ 東日本大震災に関する地域住民へのアンケート調査やインタビュー、その結果を考察し、発信、伝承
- ・ 気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館と連携した、新たな防災学習

〈活動の成果〉

- ・ 考察や教訓等を発信・伝承する活動を通して、震災の風化や意識の低下を防ぐとともに、自分たちが行っている防災学習の価値に気づくことができた。

〈活動の工夫・ポイント〉

- ・ 地域住民の防災意識を高めるための積極的な連携 ・ 気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館との連携による新たな防災学習の開発



岩手県

復興の記録と震災の伝承による防災活動と
新たに始めた防災紙芝居

地震

津波

岩手県立大槌高等学校復興研究会

高校生114人 教職員36人

〈目的・きっかけ〉

- ・ 東日本大震災当時、避難所運営に尽力した先輩方の意志を受け継ぎ、地域の復興に貢献したいという思いから、大槌高校復興研究会を立ち上げた。その中で今年度、ぼうさい甲子園に参加した生徒が、他校の発表からヒントを得て防災紙芝居をつくることを提案。防災町づくり班の活動として、文章作成、作画も自分たちで行い、完成させた。

〈活動内容〉

- ・ 現在、5班で活動。 ・ 定点観測班：大槌町内180カ所を写真で記録。
- ・ 他校交流班：本校を訪れる高校等との交流。
- ・ キッズステーション班：町内の児童施設でのボランティア。そこで防災紙芝居の読み聞かせ。
- ・ 防災町づくり班：町づくりへの提言。防災活動。今年度防災紙芝居を作成。
- ・ 広報班：各活動を「復興研究会報告」にまとめる。

〈活動の成果〉

- ・ 定点観測は今年9月までに20回を数える。撮り続けることで町の復興の記録となっている。他校交流では復興への思いを他校生などへ伝えている。また、防災町づくり班では防災紙芝居をつくり、キッズステーション班の児童施設での活動で子どもが防災を考えるツールとなる。

〈活動の工夫・ポイント〉

- ・ 生徒主体で、できることを無理なく行う、を基本理念としている。



兵庫県

減災・縮災
学校が地域の「ハブ」になる 高校生にできること

地震

津波

大雨・洪水

兵庫県立尼崎小田高等学校
普通科 看護医療・健康類型

小学生100人 中学生40人 高校生1130人
大学生30人 教職員60人 大人 180人

〈目的・きっかけ〉

- ・ きっかけは本校の卒業生が宮城県を訪問し、その年の4月に熊本地震が起こったこと。
- ・ 目的は本校の防災教育の見直しと本校が地域のハブとして地域社会を災害に強いまちにしていこうと。

〈活動内容〉

- ・ 災害に関する研究活動・学習（特に災害時要援護者の支援について、高校生に何ができるのかについて）
- ・ 災害に関するイベントの企画立案・運営、地域社会への啓発活動

〈活動の成果〉

- ・ 本校生徒・教職員、地域社会が減災・縮災の意識を持ち始めたこと。行政が本校生徒と共に動き、援助のために尽力しているところ。尼小田の看護と言え、防災・減災という声が地域に定着してきたこと。防災での地域コミュニティづくりが、在宅療養・看取り、子ども支援、商店街の活性化に広がってきていること。

〈活動の工夫・ポイント〉

- ・ 防災だけではなく、平時からの地域住民同士と高校生と地域のつながりをつけるために「在宅療養」と「商店街の活性化と子どもの支援」のプロジェクトも立ち上げ、地域で劇の上演やイベントを実施していること。
- ・ 生徒自らが企画立案し、運営を行い、災害時に力を発揮することができる高校生（若者）がこの事業を行っていること。



奨励賞

愛知県

AR/VR災害疑似体験アプリの開発と防災教育における実用

地震

津波

火災

台風

大雨・洪水

愛知工科大学 板宮研究室

小学生5686人 中学生1653人 高校生1113人
大学生1565人 教職員538人 大人 10053人

〈目的・きっかけ〉

- ・ 日頃から災害想定を「自分のこと」として強くイメージして対策を行い、自律的に行動できるようにする。
- ・ 身近になったAR(拡張現実)やVR(人工現実感)を防災教育に活用する。
- ・ 避難し遅れによる犠牲者をゼロにする。

〈活動内容〉

- ・ AR/VR災害疑似体験アプリの研究開発を行い、防災訓練等で実用している。
- ・ 既存の教材と組み合わせた新たな防災教育手法の効果を検証している。

〈活動の成果〉

- ・ 昨年10月からの1年間で32回の体験展示を行い、今までに約2万人が体験した。
- ・ 小中高・特別支援学校19校で実用を行い、高い教育効果を得られた。毎年実施する学校が6校ある。
- ・ IEEEなど著名な国際会議や国連の防災世界会議における展示に採択され、国際的にも評価されている。

〈活動の工夫・ポイント〉

- ・ スマホを活用し教室や職場などいつもいる場所でリアルな災害疑似体験ができるため、大変説得力があり教育効果が高い。
- ・ リアルな浸水体験がiPhoneで可能になるアプリを開発するなど、一般普及に向けて努力している。
- ・ 工学部の学生が防災教育を行うことにより、現場のニーズに応じた新たなアプリを自分たちで開発し実用化できる。



宮城県

地域防災を支える生徒の育成 ～女川高等学園インクルーシブ防災

地震

津波

発災後の
避難所運営など

宮城県立支援学校女川高等学園

高校生69人 教職員57人
近隣地区住民10人 学識者、施設職員3人

〈目的・きっかけ〉

- ・ 卒業後の社会参加を目指す特別支援学校の生徒が、将来の共助に直結する防災活動を学ぶことを目的として実施した。
- ・ 軽度の知的障害のある生徒が、卒業後も自分の居住地域で主体的に地域防災に参加できる防災活動、防災教育の必要性を感じた。

〈活動内容〉

- ・ 地域の町内会を見本にした自主防災組織を編成し、日常的に防災に関する役割を果たす。
- ・ 自治活動の中で「総合防災訓練」を企画運営し、主体的な学びを促進する。
- ・ 総合防災訓練において、帰宅困難な状況を再現した中で生活する。
- ・ 総合防災訓練において、「被災者」「支援者」を交互に演じ、共助のあり方を体験する。

〈活動の成果〉

- ・ 縦割り活動を基本とする日常の防災活動の中で、上級生を中心とした連携の輪が広がった。
- ・ 約20時間に渡る総合防災訓練において、個々の役割が明確であり、責任感を維持した活動ができた。

〈活動の工夫・ポイント〉

- ・ 日常の係活動や役割分担などで生徒同士が話し合いを重ね、自分たちで答えを見出す機会を作った。
- ・ 総合防災訓練の中に「対話」と「感情」を導入し、訓練内容をより複雑で実際に近いものにした。



特 別 賞

URレジリエンス賞とは？

被害を減らすと同時に、復旧までの時間を短くすることにより、
社会に及ぼす影響を減らす“レジリエンス（縮災）”という考え方に繋がる取り組みに贈られます

はばタン賞とは？

阪神・淡路大震災以降に被災した地域に エールを送るため、
これら地域を対象に被災の経験と教訓から生まれた優れた活動に贈られます



だいじょうぶ賞とは？

安心・安全なまちづくりを目指す「だいじょうぶ」キャンペーン実行委員会にちなんだ賞
防犯や街の身近な安全、安心・安全なまちづくりを目指す優れた活動に贈られます



津波ぼうさい賞とは？

津波避難訓練や津波対策に対する優れた取り組みに贈られる賞です

今年度
「テーマ賞」

教科アイデア賞とは？

教科教育において取り組まれた優れた防災教育活動に贈られる賞です

フロンティア賞とは？

防災教育活動の広がりを促進するための賞
過去に受賞がなかった地域・分野での先導的な取組または初応募の優れた取り組みに贈られる賞です

継続こそ力賞とは？

過去数年に渡り継続的に実施された優れた取り組みに贈られる賞です

URレジリエンス賞

徳島県

先人の教えを後世につなぎ 自分たちで考える事前復興町づくり計画

地震

津波

火災

美波町立由岐小学校

小学生60人 中学生18人 教職員31人 大人50人

〈目的・きっかけ〉

- ・ 地域に遺る震災碑を3Dプリンターでミニチュア石碑として制作し、防災学習に活用した。また、地域の自主防災組織は防災・減災活動に主体的に取り組んでおり、学校防災教育に協力的である。そこで地域の教材を生かし、体験学習を通して地域から学び、地域の将来を考える防災学習に取り組むことにした。

〈活動内容〉

- ・ 6年生児童が地域に遺る震災碑の碑文から地震・津波の教訓について学び、後世に教訓や町の良さを伝えるため「まちのよいところDVD」と「事前復興町づくり計画ジオラマ」を卒業制作として残した。
- ・ 5・6年生児童が西の地自主防災会とともに、近隣の町の自主防災会の方と連携し、避難所を利用した防災デイクャンプを実施した。

〈活動の成果〉

- ・ 地域の教材を生かすこと、地域の協力者を得ることで子供たちは、自分のまちのすばらしさにたくさん気づくことができた。自分たちが大事にされているという実感は、自分自身や周りの人たちを大事にしていきたいという感謝の気持ちや積極的な行動に変わっていった。地域の一員として、お互いがつながり合い、その絆を大切にしていこうとする一体感が生まれている。



高知県

全校4名 宿命（津波）に挑戦！ ～正しく、冷静に恐れようⅡ～

地震

津波

四万十町立興津中学校

中学生4人 大学生3人 教職員6人 大人10人

〈目的・きっかけ〉

- ・ 土佐湾に面する本校校区にとって、南海トラフ地震発生後の津波襲来は宿命である。
- ・ 本年度は津波到達時間表示板を媒介とした防災意識のさらなる向上を目的とする。
- ・ 防災活動の合言葉は、「興津全員逃げ切るぞ!」である。

〈活動内容〉

- ・ 地震・津波を「正しく、冷静に恐れる」ために知識と理解を深める。
- ・ 津波到達時間表示活動を継続し、広報・啓発に努める。（発表会開催、防災だよりの連載）
- ・ 家具固定の啓発、避難路清掃、防災炊き出し訓練、校区小学校との合同津波避難訓練等の実施

〈活動の成果〉

- ・ 小学校の段階から防災学習に取り組んでおり、学年を経ることに防災意識が高まっている。
- ・ 地域や行政等から活動を高く評価していただいたことで、地域の防災活動の一役を担う充実感と自信を得た。

〈活動の工夫・ポイント〉

- ・ 全校生徒は県下最少の4名。少人数であるが、地域・行政・大学・学校が一体となって地域ぐるみの防災活動を推進している。
- ・ 本年度は、津波到達時間表示板の広報・啓発に力点を置いている。



和歌山県

地域の避難所である高校として、 地域に防災文化を創出する

地震

津波

台風

大雨・洪水

和歌山県立日高高等学校

小学生335人 中学生119人 高校生701人 教職員61人 大人20人
園児214人 海外生徒130人 海外関係者20人

〈目的・きっかけ〉

- ・ 地域の避難場所に指定されている高校として、求められる役割を踏まえた避難訓練を実施する必要を感じた。
- ・ 率先避難者、避難場所での活躍主体として期待される高校生が、自らの役割を主体的に考え行動する仕組みを取り入れることを目指した。

〈活動内容〉

- ・ 「地域合同避難訓練・防災スクール」を年1回実施し、本校に避難してくる区域の住民、園児、小学生、また今回は海外生徒および関係者約150人とも連携した約1,600人規模の訓練を実施した。
- ・ 授業に「地域防災」を取り入れることで、地域への啓発活動や教材開発等、高校生による主体的な探究活動を促している。

〈活動の成果〉

- ・ 混雑する避難経路でどう動くか、歩幅の小さい園児たちにどう対応するか等、「共助」の概念がより具体的かつ現実的になった。
- ・ 授業での取組が、地域での調査や提案という形で、地域と連携を密にする活動に繋がっている。

〈活動の工夫・ポイント〉

- ・ 訓練実施後には事後検討会を開き、次年度に向けた改善を図っている。
- ・ 生徒主体の授業「総合的な学習の時間」に「地域防災」を設定することで、「訓練の日」だけに留まらない防災学習を実現できている。



URレジリエンス賞

静岡県

楽しく学び、考え行動する 「御特まなぼうさい」

地震

火災

雷

台風

大雨・洪水

大雪

富士山噴火

静岡県立御殿場特別支援学校

小学生94人 中学生55人 高校生72人 大学生3人 教職員133人

〈目的・きっかけ〉

- 防災学習を「楽しく学び、考え行動する学習」とし、御特まなぼうさいを実践することで児童生徒が主体的に考え行動する力を育成する。地域とのつながりを活用し、地域で生きる児童生徒の育成を目的とする。

〈活動内容〉

- 大学と連携した「楽しく学ぶ御特まなぼうさい」の授業実践
- 教材や内容を工夫した学習「ぼうさいすごろく」「富士山噴火だいじょうぶ隊ダンス」
- ICT機器を活用した学習「アプリを活用したグループワーク」「AR災害疑似体験」
- PTA合同防災演習、防災学習発表会、富士山噴火勉強会

〈活動の成果〉

- 「今日はまなぼうさい!」と楽しみにする児童の様子がみられ、体験的な学習を通し、児童生徒が日常生活の中で考え、行動する姿が増えている。
- 中、高等部の生徒には、避難所運営で役に立ちたいという意識が芽生えている。防災学習を通して、「地域で生きる力」が育成されている。

〈活動の工夫・ポイント〉

- 防災学習を教育課程に位置付けることで、教師も児童生徒も主体的に学ぶ学習へと意識が変わった。地域との深いつながりを活用した学習や情報発信により、頼りになる子供たち、学校と見ていただけるようになってきた。



はばタン賞

広島県

地域と創作劇に挑戦 ～未来へ伝えたい! 広南避難プログラム～

地震 津波 台風 大雨・洪水

呉市立広南中学校

中学生57人 教職員12人 大人10人

〈目的・きっかけ〉

- ・ 西日本豪雨災害や地域の土砂災害の歴史を学ぶ中で、生徒の「二度と災害で亡くなる人を出したくない!」という強い思いから取組が始まった。
- ・ 創作劇「誓い ～広南避難プログラムを創る～」の作成を通して、地域とともに災害への備え、災害時の対応の仕方など、災害に強いまちづくりを継続的に進めていく。
- ・ 活動を通して、地域へ感謝の気持ちを伝え地域貢献を行う。

〈活動内容〉

- ・ 防災の創作劇の作成、生徒・地域・行政が一体となった避難方法と避難所運営を示した「広南避難プログラム」の作成、誓いの碑の建立と「7.9広南防災の日」の実施

〈活動の成果〉

- ・ 生徒は、地域の方と協働し広南避難プログラムを作成することで感謝の気持ちが生まれ、地域貢献を行い、地域に育てられている自分を実感できた。
- ・ 地域は、学校へ貢献することで元気をもらい、夢や志を学校と地域で叶えようとする価値を実感することができた。
- ・ 自分の命を大切にしたい、他者の命を大切にしたいという気持ちが高まった。

〈活動の工夫・ポイント〉

- ・ 「創作劇」を創るという挑戦問題に向けて、生徒・地域・行政が各強みを生かして三位一体となって取組を行う。



宮城県

小さな子どもたちに紙芝居を通して震災と命の尊さを伝えていく

地震 津波

きずなFプロジェクト

高校生15人

〈目的・きっかけ〉

- ・ 震災を風化させないために、震災を知らない子どもたちに東日本大震災のことや命の大切さを伝えていく。
- ・ 向洋中学校卒業生有志が「きずなFプロジェクト」を立ち上げた。あるメンバーが「震災を小さい子に伝えるため、同級生の体験をもとにした紙芝居をつくらない?」と提案し、作成が始まった。

〈活動の成果〉

- ・ 平成30年8月～10月 シナリオ作り
- ・ 平成30年10月～令和元年6月 紙芝居下絵作り、色塗り
- ・ 令和元年7月 2日 町内松ヶ浜小学校で上演(対象は2年生)8名参加
- ・ 令和元年7月17日 町内汐見小学校で上演(対象は2年生と5年生)7名参加

〈活動の成果〉

- ・ 小学生が、真剣に紙芝居を見てくれ、「家族を大切にしたい」「震災を忘れないようにしたい」などと語ってくれたので、目的が達成されたと感じる。

〈活動の工夫・ポイント〉

- ・ 小さな子に抵抗なく震災を理解してもらうために、リアルな写真や映像ではなく、紙芝居を通して震災を伝えようと考えた。
- ・ 親を亡くしたメンバーの語り部原稿をもとに、自分たちでストーリーを考えた。
- ・ 絵の得意なメンバーを中心に自主的に集まって色塗り作業をした。・小学校2校への上演依頼(電話がけと訪問)をすべて高校生自身が行った。



宮城県

1000年後の命を守るため、 「防災を空気」とする社会を実現する。

地震 津波 火災 雷 台風
大雨・洪水 竜巻 大雪

女川1000年後のいのちを守る会

大学生11人 教職員2人 その他3人

〈目的・きっかけ〉

- ・ 東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県女川町。4月に中学校に入学した生徒たちは自分達が経験した辛く、悲しい出来事を再び繰り返したくないとの一心で、社会科の授業をきっかけに「1000年後の命を守る」を合言葉に活動を始めた。
- ・ 津波の被害を最小限にする対策案として考えた①絆を深める、②高台へ避難できる町、③記録に残すの実現のため、町内の全ての浜に津波到達点より高い所に「女川いのちの石碑」を建てるため募金活動を実施した(詳細はinotinossekihi.com参照)。その後も多くのご支援をいただいた日本各地、自然災害の犠牲者が多いアジア各地にも伝えるため、自分たちの経験や体験、学んだことをまとめた「女川いのちの教科書」(中学生版)を編集し、全国各地で「1000年後のいのちを守る女川の子どもたちを伝える会」を継続して実施している。

〈活動内容〉

- ・ 3つの津波対策案の実現 ・ 1000年後のいのちを守る活動

〈活動の成果〉

- ・ 「女川いのちの石碑」の建立
- ・ 「女川いのちの教科書」や「女川いのちの石碑マップ」の自費出版 など

〈活動の工夫・ポイント〉

- ・ 全ての活動は、被災当時小学6年生だった女川の子どもたちの発想である。・ 1000年後のいのちを守るための活動は、後991年続く。



はばタン賞

福島県

復興曲を中核に「出会い感じ探り歌い」 福島の未来を創る人間育成

地震

津波

原発事故

子どもに音楽を贈る会 『福島しあわせ運べるように合唱団』

小学生15人 中学生21人 高校生4人
大学生1人 大人8人

〈目的・きっかけ〉

- ・ 未曾有の東日本大震災に際し苦しむ中出会った神戸の復興曲を中核に仮設を訪問した折、歌の力によって前に進む力を得ようとする方々に接した。福島に生きる子供の担うべき役割を強く感じたことがその後の考え方も変えた。

〈活動内容〉

- ・ 復興曲を被災地で歌い多くの方に出会いながらそこで感じ学んだことを中核に自分たちのなすべき役割を手探りしながら深く考え語り合ってきた。自分たちの力で発信できる術を精選し、劇・学習会・学習旅行を作り上げ続けた。

〈活動の成果〉

- ・ 復興曲の歌詞の意味を考えることを中核に、歌を生んだ神戸を訪問し更に他の被災地を巡り地区の方々に会うことで、自分たちのなすべき役割を具体的に自覚しふるさとを愛し人を信じ自分を大切にしようとする心が生まれた。

〈活動の工夫・ポイント〉

- ・ 被災地訪問の際未成年で被災した方々のお話を伺う事で現在置かれている自分たちの心をそれと重ねあわせて次の活動に発展させることを話し合った。活動の結論を始めから決定せずに反面ぶれずに表現の形を発展させている。



だいじょうぶ賞

福岡県

自他の命・自分の町を守る生徒を育む 地域協働の防災教育

新宮町立新宮東中学校

地震

津波

火災

台風

大雨・洪水

中学生154人 教職員36人 大人30人

〈目的・きっかけ〉

- ・ 目的は、「自分の命を自分で守る、他者の命を自分が守る、自分の町を自分で守る」生徒を育成することである。
- ・ きっかけは、新設中学校設立のコンセプトが、町の「安全・安心の拠点」となることであり、平常時は生涯学習・生涯スポーツの拠点、非常時は防災活動・減災活動の拠点となる学校経営が求められていることである。

〈活動内容〉

- ・ 学校経営における防災教育を中核に据えた、文部科学省学校安全総合支援事業（生活安全（防犯）・交通安全）との一体的取組
- ・ 第1学年総合的な学習の時間における、ハザードマップ活用、避難所運営、救急救命、災害図上訓練、危険箇所調査等の学習

〈活動の成果〉

- ・ 教職員と地域が一体となり、生徒の協働性と課題対応能力を育てる教育活動を創造することができた。
- ・ 生徒の課題対応（問題発見・問題解決）能力と自助・共助の精神を育成することができた。

〈活動の工夫・ポイント〉

- ・ 学校運営協議会を学校安全実践委員会と兼ねることで、地域人財の活用、校内教職員の人材育成を一体的に推進したことである。
- ・ 第1学年総合的な学習の時間と中学校区における学校安全総合支援事業とを関連させて取組んだことである。



大阪府

地域を担う「防災リーダー」の育成

大阪市立白鷺中学校

地震

津波

大雨・洪水

小学生120人 中学生582人
大学生1人 教職員50人 大人60人

〈目的・きっかけ〉

- ・ 防災教育を通じて「自分たちにできること」を考え行動することで「いのち」や「生き方」を見つめ直す。
- ・ 子どもの防災リーダーを育成し、学校・地域の防災意識の向上を目指す。

〈活動内容〉

- ・ 学校全体一防災講話・防災啓発活動。各学年の防災授業。
- ・ 子どもの防災リーダーによる校区小学校へ出前授業。他校と合同防災研修会の実施。
- ・ 防災・減災啓発活動、防災学習会、地域行事への参加。等

〈活動の成果〉

- ・ 子どもの防災リーダーが防災について学び、体験したことを「発信」することで「自分は役に立つ人間なのだ」ということを実感し、自己有用感が高まり学校生活の様々な場面で力を発揮することにつながっている。
- ・ 子どもの防災活動、啓発により、保護者・地域の方々とのつながりが深まっている。

〈活動の工夫・ポイント〉

- ・ 防災教育「心技体」を育む活動を実施。重点指導項目1年時『心』:いのちの教育、思いやりの心を持ち違いを認め合える人権教育としての「心の教育」、2年時『技』:災害時に身を守る実動訓練、減災教育としての「技の教育」、3年時『体』:人と人とのつながり、生き方を学び体現していくキャリア教育としての「体の教育」



兵庫県

継続支援・語り継ぎでの 防災意識啓発&子供達へのアプローチ

神戸市立神港橘高等学校 DiReSt67

地震

津波

火災

台風

大雨・洪水

熱中症

インフル

高校生約1050人 教職員約190人

〈目的・きっかけ〉

- ・ 東日本大震災の支援活動からスタート。被災地域の様子や人々の想いを語り継ぎたいと考えるようになり、今後の災害に備える社会を願う。また阪神・淡路大震災経験地域としての想いを擦り合せ、防災意識の啓発と子供達に防災を考えるきっかけ作りをしている。

〈活動内容〉

- ・ 東日本大震災以降、毎年ひとつ防災や支援に関わるグッズを製作し販売（売上利益全額を東北や熊本に渡す）。商品を手にとって頂くことで語り継ぎができて、防災意識の喚起を願う。
- ・ 子供達向けに、防災エプロンシアター（地震、火災、水害、熱中症、インフルエンザ、歴史と継承）を上演。身近なことから興味を持てるようにと願う。
- ・ キャンドル、ソーラークッカー、建物補強などのワークショップを実施。楽しくものづくりをしながら、様々な角度から防災を考えて欲しいと願う。

〈活動の成果〉

- ・ 地域の方との交流が増え、活動への理解と応援を頂き、活動が活性化している。
- ・ 防災・減災の学習も深く取り組むようになった。

〈活動の工夫・ポイント〉

- ・ 防災以外のイベントにも参加することで、視野が広がり工夫し活動を広げている。 ・ 継続することでしっかりした活動基盤が形成される。



だいじょうぶ賞

東京都

防災活動を通して、学びあい、
活かしあい自助共助の力を高めよう

地震

火災

大雨・洪水

中央大学ボランティアセンター公認学生団体 チーム防災

大学生26人

〈目的・きっかけ〉

- ・ 東日本大震災の被災地でのボランティア活動等をきっかけに、大学周辺地域で防災に関する活動をしたいという思いから団体を立ち上げた。
- ・ 地域防災を活性化させることと地域（自治会や学校、大学）の中の架橋になることで自助・共助の力を高める。

〈活動内容〉

- ・ 東京都日野市の自治会や学校での防災ゲームの実施やカエルキャラバンの運営のサポート、防災活動への参加
- ・ オリジナル防災ゲームやワークを用いた、学内や外部での防災自主企画や防災授業の実施

〈活動の成果〉

- ・ オリジナルの防災ゲームである「防災百人一首」が様々なメディアから取り上げられ防災を楽しく学べるということを多くの人に認知してもらえた。
- ・ ひのっちという日野市で活動している方々と協力して自主防災企画を行った。

〈活動の工夫・ポイント〉

- ・ 防災ゲームを用いることで参加者に一方的に教えるのではなく、主体的に防災について学んでもらい、また、主催側と参加者が共にゲームを楽しめるようにしている。
- ・ 被災地支援に関わったメンバーの経験を活動の中で話すことで、防災意識の向上と、災害時のイメージの具体化を図る。



津波ぼうさい賞

岩手県

児童生徒が主体的に学び行動する 防災学習のあり方

地震

津波

台風

大雨・洪水

釜石市立鵜住居小学校

小学生155人 教職員23人

〈目的・きっかけ〉

- ・平成30年度から釜石市教育委員会の2か年の指定を受け、これまでの取り組みを整理し見直し、小中連携及び地域連携による防災教育のあり方を探り、防災について主体的に学び行動できる児童生徒の育成を図るための研究を行っている。

〈活動内容〉

- ・小中9年間の防災学習の系統に沿った各学年の実践 ・ 年4回の小中合同の避難訓練の実施
- ・毎月11日を「命を大切にする日」とし、「防災だより」を発行

〈活動の成果〉

- ・年間指導計画、9年間の系統を作成することにより、系統立てた指導ができるようになった。大事なことは繰り返し指導し、学年に応じ必要な事柄を知識として身につけさせることができている。
- ・継続的な学習を積み重ね、防災に対する意識が高まり、また必要な知識を身につけている。

〈活動の工夫・ポイント〉

- ・小中9年間の防災学習の系統表作成
- ・児童に「主体性」をもたせる授業づくり
- ・「防災だより」の発行等、地域との連携



千葉県

「ラップ♪防災」と防災学習 ～備えあれば憂いなし～

地震

津波

火災

雷

台風

大雨・洪水

竜巻

千葉県立長生特別支援学校

〈目的・きっかけ〉

- ・海岸より400mという立地のため、開校以来、津波想定避難訓練を実施・継続している。東日本大震災をきっかけに、防災対策及び防災教育の推進を学校経営の重点の一つに加えて取り組んでいる。

〈活動内容〉

- ・年10回の避難訓練を中心にし、防災の意識化・日常化を図っている。また、中学部の防災学習を中心に、全校を通じた命を大切に学習を教育課程に位置付けている。昨年度から始めた「ラップ♪防災」を継続して取り組み、全国発信に向けて取り組んでいる。

〈活動の成果〉

- ・訓練の積み重ねによって、身を守ること等は、子供たちの心と体に染みついている。「ラップ♪防災」に楽しく主体的に取り組んでいる姿が、保護者や学校、地域の防災意識を高めている。

〈活動の工夫・ポイント〉

- ・津波や天然ガス対策等、立地のハンディを意識の高さと判断・行動力に結び付けている。新しい学習指導要領に示されている「カリキュラム・マネジメント」の視点で防災教育を発展させている。



教科アイデア賞

兵庫県

被災者の方々の心の声を 形にするための災害食の商品開発

兵庫県立松陽高等学校

地震

津波

台風

大雨・洪水

災害食の商品開発

小学生120人 中学生10人 高校生600人
大学生20人 教職員60人 大人500人

〈目的・きっかけ〉

- 西日本豪雨災害でボランティア活動を実施した時に、被災者の方から「新鮮な野菜や果物が食べたい。」という「生の声」を聞いて、「高校生である私たちにできることは何かあるのか」を考え、災害食の商品開発を行ったことがきっかけである。

〈活動内容〉

- 野菜や果物を使った商品開発で地域を活性化し、多くの被災者の方々の体調不良やストレスの改善を支援していきたい。しかし、「災害食はあまり美味しくない」というイメージが消費者の方々に浸透してしまっている。そこで、私たちの災害食の商品開発でそのイメージを払拭し、「災害食は我慢して食べるものではない。こんなに美味しいのか!!!」と思っただけのような商品開発をし、災害に備えることが減災・防災に繋げることができるということを伝えていく。

〈活動の成果〉

- 2年の歳月を掛けて賞味期限37か月の災害食が商品化し、西日本豪雨災害発災からちょうど1年が経った時期と重なったこともあり、神戸新聞以外にもYAHOO!JAPANニュース等、計8社に報道をしていただいた。また、松の陽だまりパンのネットワークが広がったこともあり、約200社の地元企業の方々から備蓄食として注文をいただいた。



フロンティア賞

広島県

鞆町のBOSAIリーダーになる

地震

津波

台風

大雨・洪水

土砂災害

福山市立鞆の浦学園

小学生19人

〈目的・きっかけ〉

- ・資料館の館長さんの「防災に強い町にしよう!」という話を聞いたこと、昨年度の豪雨災害の際に学校の裏の斜面が崩れたことがきっかけ。
- ・TOMO BOSAI リーダーとして、防災に関する正しい知識を身に付けて、鞆の人達に教え、大人の意識を変え、防災に強い町にすることが目的

〈活動内容〉

- ・福山防災リーダー、鞆で幅広く活動されている横浜国立大学細田教授、ガス会社サンモルト社長など地域に関わりのある専門家から正しい知識を教わった。
- ・防災に関する教わった知識を「TOMO BOSAI BOOK」や「BOSAIカレンダー」にまとめ、地域に啓発した

〈活動の成果〉

- ・災害の恐ろしさや備えの大切さを知り、非常用持ち出し袋を各家庭で話し合っ用意したことで、家庭を巻き込んだ学習になったこと。
- ・大人の意識が低いことを知り、その改善に向けて子ども達なりにできることを考え、活動したこと。「TOMO BOSAI BOOK」や「BOSAIカレンダー」という形で広く地域に啓発したこと。

〈活動の工夫・ポイント〉

- ・子ども達の発想から「TOMO BOSAI BOOK」や「BOSAIカレンダー」という形で学習を整理・発信したこと。
- ・アンケート結果などから大人の意識を変え、防災に強い町にしようと活動したこと。



東京都

「自分事」と考え、地域で行動する子 ～ICTを活用した防災教育

地震

火災

台風

大雨・洪水

足立区立西新井小学校

小学生570人 教職員30人 大人30人 その他10人

〈目的・きっかけ〉

- ・災害発生時に、自分で考え、判断し、自らの命を守ることができる児童を育てること。
- ・防災学習を通し、地域とつながることで、地域に誇りと愛着をもち、地域のために行動できる児童を育てること。

〈活動内容〉

- ・災害時の様子をイメージし、自分が主人公となった物語を書く活動「防災巻」を通して、災害から命や家庭、地域を守るために必要な方策を考える。
- ・ICTやプログラミング教育と関連付け、防災上の視点から、地域の中で課題を見出し、解決策などを考え、提言や実践をする。

〈活動の成果〉

- ・家庭における防災への意識が高まったこと。「防災巻」を家庭に持ち帰り、家族で読むことで、保護者と児童が共に防災について考え、実践をするようになった。
- ・地域の学校や児童に対する防災上のニーズが高まり、避難所運営訓練に児童も参加するようになった。
- ・ICT機器を活用することで、学習活動に対する児童の意欲、主体性が向上した。また、ロボットやセンサー教材を使用して、防災に役立つアイデアのモデルを制作することで、児童の達成感や自己有用感が高まった。



岡山県

命の危険や災害時の不安に備え、 PTAと学校がつくる災害対策

地震

津波

台風

大雨・洪水

岡山市立上道中学校

中学生404人 教職員37人 大人440人

〈目的・きっかけ〉

- ・平成30年7月に西日本豪雨災害で学区内での浸水を経験し、防災への意識向上と防災体制の見直しをする必要性を生徒・PTAともに感じた。

〈活動内容〉

- ・実際に避難できる区域への道筋には地域住民にはどのような課題があるのかを生徒が歩いて情報を集め、防災マップにまとめて、地域に公開する。
- ・PTAと生徒会が警報が出た場合の家族同士の連絡方法や身近にあるAED設置場所の確認。
- ・PTAで備えておくべき災害用グッズの検討。

〈活動の成果〉

- ・生徒や保護者がいざという時の危険を想定して、家族で話し合う家庭が増えた。
- ・自宅付近の水害の危険を想定し、具体的な対策を考えるようになった。

〈活動の工夫・ポイント〉

- ・避難できる場所までの道を実際に生徒が歩き、階段・傾斜・道幅・浸水の水深・障害物の観点から情報を地図にまとめ地域に公開した。
- ・学校から帰宅した後、保護者と生徒が連絡をとりやすくするための防災・減災カードをPTAと生徒会で作成した。



フロンティア賞

神奈川県

自助・教育の意識を高める減災教育

地震

津波

台風

大雨・洪水

横須賀市立浦賀中学校

小学生413人 中学生748人 教職員55人

〈目的・きっかけ〉

- 東日本大震災の甚大な被害を知り、減災教育が必要であるから。いずれ起こる災害に対して、正しい知識をもった上で備えるための実践力を身につけるため

〈活動内容〉

- 1年生:防災クイズで防災に関する知識を高めた。
避難所運営されるときに地域の力になるための実践力を身につけた。
- 2年生:首都直下地震が起きたときに行動の仕方をして、自分ごととして捉えた。
- 3年生:被災地の復興現場を見て、「当たり前」と思っていたことが実は「当たり前でなく特別なこと」だと気づいていた。民泊体験の中で津波をはじめとする震災についてのお話をいただいた。

〈活動の成果〉

- 生徒の防災意識の向上
3年生感想より「修学旅行で陸前高田に行ったことによって、色んな知識も増えたとし、行く前よりも防災の意識が変わった。前は津波がきたときの恐ろしさなどそんなに分かっていなかったけれど、気仙中の近くの防潮堤に行ったことで、『もし津波がきたら、どこまで来るのだろう?』と考えるようになった。」という感想にあるように、災害を自分ごととして捉えることができるようになった。



継続こそ力賞

和歌山県

完成版！上富田ふれあいルーム 防災年間計画！

地震

津波

火災

雷

台風

大雨・洪水

上富田ふれあいルーム

〈目的・きっかけ〉

- ・神戸市東灘区の病院で阪神・淡路大震災を経験し、結婚後和歌山に移住。「上富田ふれあいルーム」の講師として防災士、看護師、地球温暖化防止活動推進員の知識を生かし、エコと防災に関連した活動に取り組んでいる。
- ・災害時に「衣・食・住を自分でなんとかでき、要配慮者へ声をかけることができる小学生」を目指す。

〈活動内容〉

- ・季節の行事に、防災に必要な知識と体験を取り入れ、自然に楽しく、防災を学ぶ。
- ・1月には今までの約160種の活動のうち100種をマニュアル化した。

〈活動の成果〉

- 1.遊びの中に防災を取り入れる事で、「防災は特別な物ではなく、当たり前の物」となる。
- 2.他人を思いやることができる。
- 3.小学生に出来る事がわかる。
- 4.マニュアル製作により、当団体の防災教育内容を提案できる。
- 5.困難なことがあっても、一度遊びとして体験していれば「大丈夫」と思うことができる。

〈活動の工夫・ポイント〉

- ・季節の行事だけでなく、地域の歴史、発明品、産物、偉人などにも目を向けることで、地元愛を育て、それらを「防災」に生かすことができている。
- ・大人に「大丈夫だよ」と言えるようなたくましい子ども達を育てていきたい。

小学生4～20人 高校生数人
教職員数人 大人4～5人
見学者、保護者等数人



愛知県

「助かる人」から「助ける人へ」

地震

火災

台風

大雨・洪水

名古屋高等学校 減災チーム

中学生804人 高校生1446人
大学生51人 教職員161人 大人32人

〈目的・きっかけ〉

- ・東海地区は大規模災害に遭遇するという前提に、中高生が「助かる人から助ける人」となることを目標にしている。
- ・NPOあいち防災リーダー育成ネットの方の呼びかけと、愛知県教育委員会・名古屋大学主催の「防災フォーラム」活動認定校(2年間)となったことがきっかけである。

〈活動内容〉

- ・避難所宿泊訓練の企画運営、学校の防災訓練の協力と改善提案の実践、全校防災アンケートと分析・提案。
- ・断層や災害現場の巡検、災害碑文を読解、地域・子ども・外国人への減災の啓発活動

〈活動の成果〉

- ・8回目を迎えた避難所宿泊訓練は、地域・区・NPO・社会福祉協議会・病院・大学と、多岐にわたる連携を有するとともに、毎年異なるテーマで実施している。様々な立場の人との交流を経て、参加者のモチベーションや自主性も上がった。

〈活動の工夫・ポイント〉

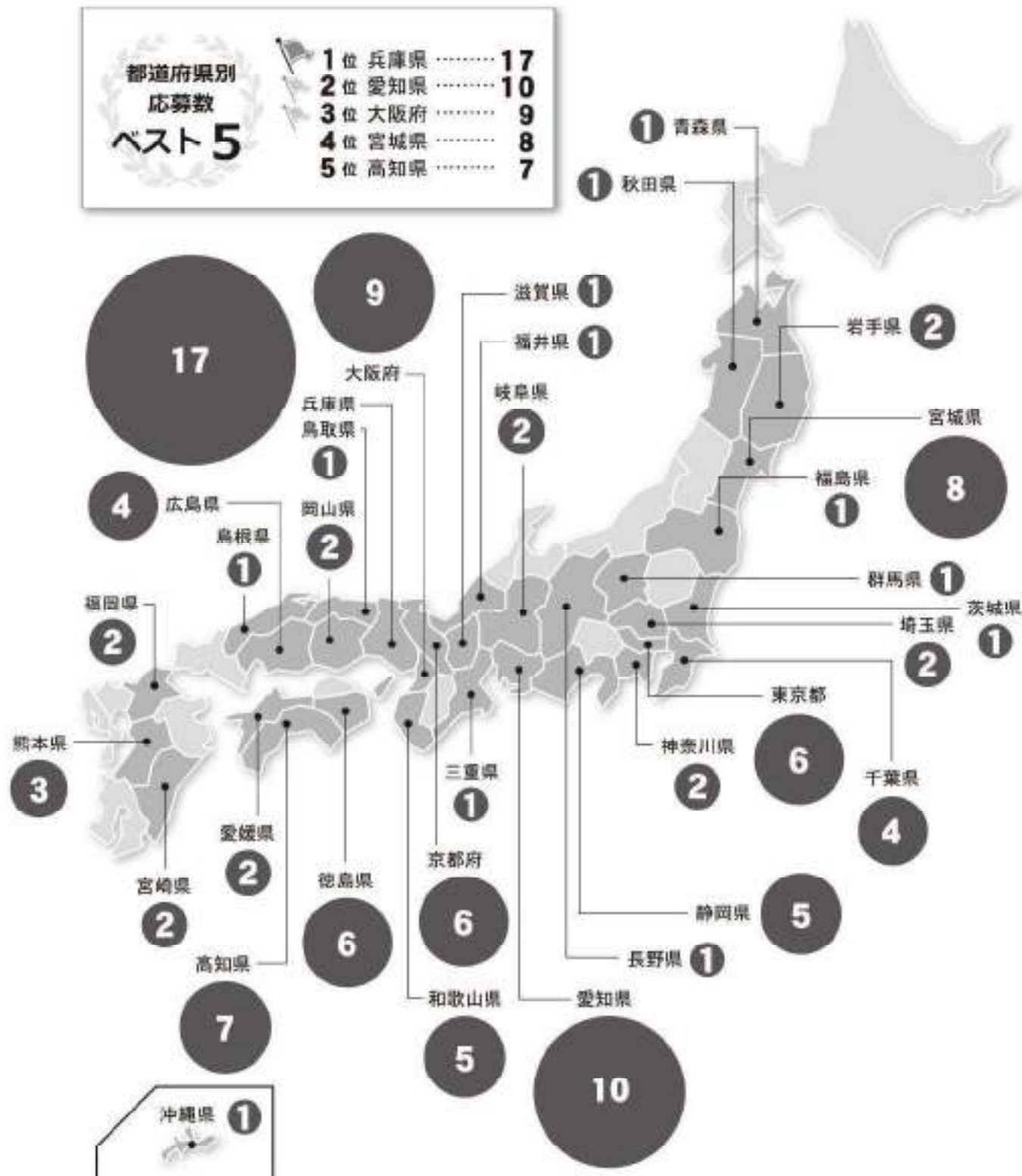
- ・「知る・伝えつながら・体験する」を3本柱にして、多年に渡り減災活動に取り組んできた。教員主導ではなく、生徒が主体的に活動をした。
- ・常に新たな課題にチャレンジするように心がけている。今年のテーマは「古地図から読み解く防災のための地理研究」。今後の防災で大切な視点といえよう。



今年度のぼうさい甲子園は、北は青森県、南は沖縄県まで、
全国各地から 118 校・団体のご応募をいただきました。
★ たくさんのご応募、ありがとうございました!! ★

都道府県別
応募数
ベスト 5

1 位	兵庫県	17
2 位	愛知県	10
3 位	大阪府	9
4 位	宮城県	8
5 位	高知県	7



応募校・団体のご紹介

たくさんのご応募、ありがとうございます！

令和元年度、惜しくも受賞を逃した 79 校・団体の取り組みをご紹介します。

来年度、ぼうさい甲子園への再チャレンジ、お待ちしております！

部門	都道府県	学校・団体名	ページ
小学生部門	宮城県	白石市立深谷小学校	P.40,41
	埼玉県	幸手市立吉田小学校	
	千葉県	習志野市立実籾小学校	
	東京都	品川区立戸越小学校 PTA	
	東京都	狛江市立和泉小学校	
	長野県	阿南町立富草小学校	
	静岡県	静岡大学教育学部附属浜松小学校	P.42,43
	静岡県	田方郡函南町立東小学校	
	愛知県	岡崎市立上地小学校おやじの会	
	愛知県	西尾市立白浜小学校	
	愛知県	西尾市立一色中部小学校	
	三重県	四日市市楠地区子ども会育成者連絡協議会	
	大阪府	枚方市香里校区こども会	P.44,45
	大阪府	富田林市立東条小学校	
	兵庫県	稲美町立天満東小学校	
	兵庫県	神戸市立真陽小学校 SKH 放送委員会	
	熊本県	益城町立津森小学校	
	熊本県	山都町立潤徳小学校 4 年生	
中学生部門	青森県	青森市立東中学校	P.46,47
	宮城県	白石市立福岡中学校	
	東京都	北区立神谷中学校	
	東京都	葛飾区立上平井中学校地域防災ボランティア部	
	愛知県	愛西市立立田中学校防災リーダー会	
	愛知県	幸田町立幸田中学校	
	京都府	宇治市立槇島中学校	P.48,49
	大阪府	堺市立金岡南中学校	
	兵庫県	神戸市立魚崎中学校魚崎ジュニア防災チーム	
	兵庫県	丹波市立氷上中学校	
	島根県	吉賀町立柿木中学校	
	岡山県	岡山市立足守中学校	
	広島県	三原市立第二中学校	P.50,51
	徳島県	美波町立由岐中学校伊座利分校	
	愛媛県	松山市立拓南中学校	
	宮崎県	五ヶ瀬町立五ヶ瀬中学校	

部門	都道府県	学校・団体名	ページ
高校生部門	宮城県	宮城県名取北高等学校奉仕活動部	P.52,53
	秋田県	秋田県立横手高等学校定時制課程	
	群馬県	群馬県立渋川工業高等学校 JRC 部	
	福井県	福井県立鯖江高等学校 JRC 部	
	岐阜県	岐阜県立飛騨高山高等学校環境科学科	
	岐阜県	岐阜県立可児工業高等学校	
	滋賀県	八日市南高等学校地域支援活動同好会	P.54,55
	京都府	京都府立東稜高等学校 ライフマネジメントクラス	
	京都府	京都府立峰山高等学校弥栄分校家政科いざめしチーム	
	京都府	京都府立鴨沂高等学校	
	京都府	京都府立宮津高等学校建築科	
	大阪府	大阪府立堺工科高等学校定時制の課程	
	大阪府	大阪府立貝塚高等学校	P.56,57
	大阪府	関西創価高等学校	
	兵庫県	兵庫県立明石南高等学校めいなん防災ジュニアリーダー MRDP	
	兵庫県	兵庫県立東灘高等学校	
	兵庫県	兵庫県立龍野北高等学校	
	兵庫県	クラーク記念国際高等学校芦屋キャンパス	
	鳥取県	鳥取県立鳥取西高等学校	P.58,59
	広島県	広島県立熊野高等学校	
	徳島県	徳島県立那賀高等学校	
	高知県	高知県立高知工業高等学校	
	高知県	高知県立大方高等学校	
	高知県	太平洋学園コミュニティ協力隊	
	福岡県	明治学園高等学校「自然災害と防災・減災」チーム	P.60
	熊本県	熊本県立八代工業高等学校	
	宮崎県	宮崎県立佐土原高等学校 情報技術部	
大学生部門	静岡県	静岡県立大学防災ボランティアクラブ 防‘z	P.61
	大阪府	摂南大学薬学部薬学教育学研究室	
	兵庫県	神戸国際大学防災救命クラブ（DPLS クラブ）	
	愛媛県	愛媛大学学生ボランティア・サポートセンター（通称「SVSS」）	P.62
特別支援学校・団体部門	茨城県	常総市教育委員会	P.63
	千葉県	千葉県立市原特別支援学校	
	神奈川県	学びーば	
	愛知県	豊橋障害者（児）団体連合協議会	P.64,65
	愛知県	愛知県立一宮東特別支援学校	
	京都府	京都市立修学院中学校 1・2・3 年 9 組	
	兵庫県	兵庫県立阪神昆陽特別支援学校	
	兵庫県	兵庫県出石特別支援学校	
	兵庫県	D-PRO135°（明石高専防災団）	
	兵庫県	117KOBÉ ぼうさいマスター育成会議	P.66,67
	和歌山県	和歌山県立みくまの支援学校	
	徳島県	こどもプロジェクト 1・2・3	
	高知県	大方児童館（NPO 童夢）	
	沖縄県	八重山特別支援学校	

宮城県

命を守る訓練の充実と顔の見える関係をもとにした地域防災の推進

白石市立深谷小学校

地震 津波 火災 雷 台風
大雨・洪水 竜巻 原子力事故 高速道路化学薬品搭載車事故

小学生42人 中学生3人 教職員12人
大人102人 その他54名

<目的・きっかけ>

・白石市総合防災訓練に全児童が参加することで、防災教育の見直しを図り、その後の教育活動に生かしていくとともに、地区のみなさんとの「顔の見える関係づくり」を推進し、日常における「安心・安全」の環境づくりと災害等発生時に児童も主体的に参画し、機能する地域防災組織づくりの一助となることを目的とする。

<活動内容>

・「自助」の力を育成するための、考えられるすべての災害に対応する「命を守る訓練」を計画的に実施している。
・主体的に地域防災に関わり、「共助」の力を育成するために地域総合防災訓練に全校児童・職員が参加する。

<活動の成果>

・「自分の命は自分で守ること」を意識し、考えて行動する力が少しずつ確実に育まれてきている。
・地域の方と「顔の見える関係づくり」が進み、日頃からの防災・防犯に強い地区づくりの一助となっている。

<活動の工夫・ポイント>

・「命を守る訓練」は、発生時間、災害内容を事前に知らせない訓練も取り入れていること。
・自主防災組織の立ち上げについて、地域の方と一緒に学んだこと。津波の学習を毎年組み入れていること。



埼玉県

学校・地域・PTAと連携した「防災サバイバルキャンプ」

大雨・洪水

幸手市立吉田小学校

小学生54人 中学生13人 教職員9人 大人55人

<目的・きっかけ>

・災害時に地域の担い手として、主体的に行動することができる児童を育成する。
・避難所生活に必要なマナーや技術を習得する。
・地域住民とのコミュニケーションを図り、絆を強める。

<活動内容>

・学校において、1泊2日の避難所体験をする。
・ガス、電気が使えないという想定での食事の用意や風呂、宿泊をする。
・風水害を実際に体験した方から講話をしてもらう。
・水難学会の指導者による「ういてまて教室」を実施する。

<活動の成果>

・子供たちに「地域の一員」「地域の担い手」としてこの地で活躍しようという素地を育むことができた。
・学校が地域のコミュニティの中核となり、地域住民の共同体意識を高め、人と人との繋がり「絆」の大切さを参加者全てが実感できた。
・防災についての知識・技能が身に付くとともに、「自助」から「共助」の心が育っている。

<活動の工夫・ポイント>

・児童が主体的に行動できるように、教職員・保護者・地域の方々は、あえて手を出さず見守り、必要に応じて指導、助言をする。
・年度毎に、火災・風水害・震災等、のテーマを設定し、その災害に対応した取組を行うようにしている。



千葉県

大地震の際の自助・共助

地震 火災

大雨・洪水

習志野市立実籾小学校

小学生154人 教職員3人

<目的・きっかけ>

・児童の防災意識、防災力の向上。自分の命は自分で守れる児童にする。高学年は、地域や家族の一員として自分にできることを考え実践できる児童を育てる。
・本校はかけ崩れの警戒地域であるとともに、内水氾濫の危険性も高い。近年起きている自然災害も人ごとでなく今なにをしたらよいのか、命を守るためにどのような行動をとったらよいのか考える機会としたいと考えた。

<活動内容>

・DVD「釜石の奇跡」視聴、阪神・淡路大震災体験談、防災探検、防災マップ作り、防災体験学習、DIG、HUG
・「自分の命を守るためにできること（自助）」「みんなの命を守るためにできること（共助）」調べ学習、まとめ、地域での防災学習発表会

<活動の成果>

・防災訓練等では、教師の指示がなくとも身を守るようになり、訓練に取り組む姿勢も変化が見られた。
・児童、保護者の防災意識の向上。命の大切さや人の気持ちを考えることができるようになった。

<活動の工夫・ポイント>

・防災の体験学習を様々な視点から行い、事前事後指導を十分に行うことで防災意識、防災力の向上につながっている。
・防災士や関係機関、地域の方と連携することでより確かな防災力が身についている。



東京都

都会の中心で暮らすことのリスクを知り、正しい災害知識を学ぶ

地震

台風

品川区立戸越小学校PTA

小学生143人 大学生5人 教職員1人 大人51人

<目的・きっかけ>

- ・近隣校である三木小学校で「防災体験お泊まり会」を見学したことである。
- ・近隣校からノウハウの提供、民間企業、ボランティア団体等の協力が得られたことによるものである。

<活動内容>

- ・体育館での就寝はもとより、保護者向け備蓄講座、保護者向け乳児液体ミルク講座、防災VR体験、最近考案されたペットボトル心肺蘇生法講座を保育科の学生指導により行うとともに、ヘルメットの強度を学ぶために、昨年はスイカを使用した、今年度はキャベツもしくはレタスにヘルメットを被せて重量物を落とす「キャベツヘルメット」などを行う予定である。

<活動の工夫・ポイント>

- ・地域やボランティア団体、専門学校、消防署等との交流により、保護者と児童が防災意識を高めるだけでなく、「自助」「共助」「公助」を学ぶとともに、団体等協力により、PTAだけではできない継続的な「防災教育」が可能となることである。



東京都

持続可能な地域連携防災訓練

地震

火災

台風

大雨・洪水

狛江市立和泉小学校

小学生580人 中学生20人 教職員30人
大人250人 その他30人

<目的・きっかけ>

- ・きっかけ：学校が地域の避難所運営連絡会と保護者・児童とのパイプ役になりたいと考えた。
- ・目的：地域連携型の防災訓練を行い、いざという時の共助について児童に理解させる。

<活動内容>

- ・和泉防災の日を設定し、午前中は避難所体験、午後はおやじの会・PTAが中心になって行う宿泊訓練を行った。
- ・避難所体験、人命救助体験等の学習

<活動の成果>

- ・保護者と避難所運営連絡会との橋渡しができた。
- ・児童と保護者が防災についての情報を共有することにより意識が高まった。

<活動の工夫・ポイント>

- ・避難所運営連絡会・健全育成委員会・PTA・おやじの会との連携
- ・児童・保護者・地域が防災について様々な面から考える1日になった。



長野県

自分で考え行動できる子どもを育てる防災教育

地震

大雨・洪水

阿南町立富草小学校

小学生56人 教職員15人 大人40人 その他40人

<目的・きっかけ>

- ・阿南町は東海地震の地震防災対策強化地域に指定されています。
- 学校で行う避難訓練では児童は落ち着いて安全に避難することができます。しかし、実際に災害があった際、児童だけで安全に避難することができるのか不安です。そこで、実際に災害があったらどうするかを考える防災ミニキャンプを考えました。

<活動内容>

- ・当日、地震を想定した避難訓練をし、自分で避難ルートを考え避難しました。その後、かまどベンチを使って非常食を作る練習をしました。また、消防団の皆さんも参加し、児童に操作法訓練、煙体験、緊急車両乗車体験、防災クイズなどを実施いただきました。

<活動の成果>

- ・縦割り班で行う活動を通して、上級生としての立場や頼られている自分に対する自己有用感の高まりがみられました。また、下級生と接していく中で自分よりも体力のない園児、高齢者の皆さんのことを心配する声があがってきました。この気持ちが今年度の地域に住む方にも参加を呼びかけて行う富草防災フェス2019となりました。



地震

津波

火災

台風

大雨・洪水

静岡県

外国人と共に考える小学校英語の防災活動

静岡大学教育学部附属浜松小学校

小学生140人 大学生11人 教職員20人
大人70人 外国人15人

<目的・きっかけ>

- ・地震がほとんどない国から来た外国人が日本で大地震に遭遇したときに、自分たちにできることはないのだろうかと考えた。
- ・地域の外国人と危険予知や危険回避の方法について英語で話し合ったり、防災劇を披露したりすることで、英語表現を身に付けながら、防災に関する知識、理解を深める。

<活動内容>

- ・留学生交流会で防災対策について話し合ったり、防災劇を披露したりすることで外国人への防災意識の啓発
- ・防災教育と小学校英語を統合した「防災英語」の授業開発と現場教員への普及と啓発

<活動の成果>

- ・交流会に参加した留学生の防災に関する知識、理解の深まり
- ・言葉が通じない外国人に防災について教えることで、相手意識をもって課題に取り組んだことでより深く学べた。
- ・英語表現の定着と防災に関する知識、理解の深まり

<活動の工夫・ポイント>

- ・小学校英語で使う汎用的な英語表現を防災の教材の中に取り入れた統合学習をすることで学びの相乗効果を生み出すような単元デザインを心掛けている。
- ・専門家の出前授業や防災センターへの見学を通して、多面的に学ぶデザインにした。



地震

火災

台風

静岡県

地域社会と関わりながら 防災実践力を高める子どもの育成

田方郡函南町立東小学校

小学生705人 教職員60人 大人800人

<目的・きっかけ>

- ・「自分の命は自分で守る」、「周りの人と協働しながら、公共について考える」指導を防災でも行う。
 - ①いつ、どこで起きるか分からない災害に対して子どもたちが考え、調べ備える力を付けること。
 - ②指導要領で示されている学力の三要素を防災、減災教育を通して養う。

<活動内容>

- ・全校への避難訓練の実施、事後指導の実施。
- ・防災キャンプ、語り部さんの講話、専門家からの助言・指導の実施。

<活動の成果>

- ・子ども達に期待する成果
 - ①「もしも」に備える姿勢を育む。
 - ②子どもが主体的に対話的で深い学びを作り出し、活動できる。
- ・地域や外部団体等との関係性・体制
 - ①学校の教育活動を地域に開き、関係づくり、体制づくりの礎とする（本年度初年度のため）。
 - ②活動について、専門的知見から指導・助言を得る。

<活動の工夫・ポイント>

- ・本校の活動は、学習活動として教育課程に位置付け、防災、減災学習を展開している点。
- ・特別支援学級に在籍する子ども達も通常学級に在籍する子ども達と共に訓練や防災キャンプ、講話等の行事に積極的に参加し、皆で関わり合いながら行事が形成されている点。・積極的な子どもの活動を支える地域行政の体制。



地震

火災

台風

大雨・洪水

愛知県

子供が主役！ 小学校にあるもので作る上地式防災仮設風呂

岡崎市立上地小学校 おやじの会

小学生54人 中学生5人 教職員2人 大人38人

<目的・きっかけ>

- ・東日本大震災をきっかけに、いすれくると言われている南海トラフ地震への対応を、上地小おやじの会で何かできないかと考え、防災訓練を始めた。
- ・大地震発生や豪雨等の災害時に児童が「慌てず落ち着いて、自らが考動できる」「生きる力を身につける」事を目的に活動を行っている。

<活動内容>

- ・避難所になると想定される小学校に子供達と一緒に宿泊し防災訓練を体験する。
- ・上地式防災仮設風呂の製作：学校にあるものだけで作る仮設風呂
- ・寝床作り：段ボールを活用し寝床を作製、実際にそこで宿泊する。

<活動の成果>

- ・参加した児童の防災意識の向上・小学校を避難場所として想定した活動し、市の防災課、消防署、総代会との連携を図り、実際の災害時の事前訓練になっている。
- ・宿泊活動を通し、おやじ・保護者達の結束力が強くなった。
- ・他団体や報道機関から注目され、活動の参考として見学や問い合わせあり。

<活動の成果・ポイント>

- ・上地式防災風呂：災害発生時、行政の支援が間に合わないことを想定し、学校にあるものだけで製作
⇒長机を四方を囲むようにねかせ、PTAテントをその上にかぶせ、中に水をはり、学校にある大鍋で沸かした湯を入れてお風呂にする。



愛知県

いのち輝く白浜っ子の育成
～地域とともに歩む防災教育の継続～

地震

津波

西尾市立白浜小学校

小学生131人 教職員21人

<目的・きっかけ>

- ・平成23年3月11日に発生した東日本大震災
- ・東日本大震災の教訓を本校（本校区）にも生かす。

<活動内容>

- ・防災活動（年11回の地震・津波避難訓練、年2回の防災集会）
- ・防災学習（6か年を見通した防災学習のカリキュラム）

<活動の成果>

- ・子どもたちの「自分の命は自分で守る、自分たちの命は、自分たちでつなぐ」意識が高まってきた。
- ・本校の防災教育（防災活動、防災学習）に対して、PTA、おやじの会、地域、関係機関との協力が確立しつつある。

<活動の工夫・ポイント>

- ・子どもの自主性、主体性を培う防災活動、防災学習を展開する。キーワード・・・体験、本物、本当に近い
- ・PTA、おやじの会、地域、関係機関と連携して防災活動を進める。キーワード・・・子どもが中心



愛知県

自他を思いやり、人とのつながりを求め、築く子どもの育成

地震

津波

西尾市立一色中部小学校

小学生484人 教職員25人

<目的・きっかけ>

- ・一色町で唯一の西尾市の避難所に指定されている。
- ・防災を人とつながる窓として、本校の仲間、家庭、地域と手を携え、被災で追い詰められた状況でも思いやりの心を失わない子どもを育てる必要性を強く感じた。
- ・防災学習に取り組む中で、地域の方に肩たたきやマッサージをすすんで行うような子どもたちの姿が見られ、子どもたちは人とのつながりの大切さに気づき始めている。

<活動内容>

- ・人とのつながりを広げ、人とのつながりを深める活動

<活動の成果>

- ・一色中部小学校区の防災リーダーとしての自覚が育ち、思いやりの心が子どもたちの中に根づいてきている。
- ・本校の防災学習・活動に対して、校内、家庭、地域、自治体などの関係機関との協力体制が確立でき、6年生が主体となって行った避難所運営訓練に多くの地域の方が参加した。

<活動の工夫・ポイント>

- ・6か年を見通した系統性のある、積み上げ、継続できる防災学習
- ・校内、家庭、地域、関係機関の協力を得ることで、防災意識を高め、形にする防災学習・活動



三重県

地域との連携・地域の先輩から学ぶ「防災教室」

地震

津波

台風

大雨・洪水

四日市市楠地区子ども会育成者連絡協議会

小学生700人 中学生5人 教職員20人 大人50人

<目的・きっかけ>

- ・地域出身の先輩方が先生となり色々な知識を学びたい。
- ・自分の身は自分で守るという個々の地域に合致した防災力を勉強
- ・安否のアピール方法を勉強及び色々なメニューの炊き出しを勉強し避難所生活でも笑顔でいたい。

<活動内容>

- ・小学生を対象にした地域企画の土曜授業を20教科実施、生徒は1限・2限選択出来それぞれ異なる授業を受講
- ・防災教室では、消防団の一日入団として4ブースを勉強し大規模停電に対応できる発電機の重要性を習得・避難所生活と在宅避難を想定した生き延びる力を親子で勉強

<活動の成果>

- ・楽しみながら防災の勉強が出来、災害の時に役に立つ知識を沢山習得できた。
- ・地域団体との連携行事をできた事が絆として今後の防災活動で有効となる。

<活動の工夫・ポイント>

- ・率先避難、逃げる！をしつこく指導、「一日先生」ではスポーツ教室も含んでおり体力強化へも繋げた。
- ・飽きない炊き出しを、笑顔になるメニューを考案し次期へ継承すべく育成会独自でレシピを作成継承している。



大阪府

防災を楽しみながら体験する。
わくわくドキドキ「防災お泊り会」

地震
台風

小学生108人 中学生24人 教職員2人
大人84人 その他9人

枚方市香里校区こども会

<目的・きっかけ>

・過去に実施した「防災キャンプ」を通じて、子どもたちが楽しみながら防災のことを体験できる方法がないかを地域団体や保護者と一緒に考えた。こどもが喜ぶイベントを組み込むのが有効と考えた。

<活動内容>

・防災に関するゲームや避難所の体験、非常食としてのアルファ化米の炊き起こし、カレー作り

・こどもが喜ぶ遊びの要素として、学校探検（クイズラリー、肝試し）、体育館でのゲーム、お泊り（高学年のみ）

<活動の成果>

・こども（特に高学年や卒業生）が主体的に運営をサポートしてくれて、非常に大きな発見と驚きであった。

<活動の工夫・ポイント>

・こどもたちが進んで防災イベントに参加できるように、防災体験だけではなく、遊びの要素（お泊り、学校探検など）を取り入れた。また、主催者の運営負担を極力抑制できるように、外部の協力者の力を借りて防災イベントを実施した。



大阪府

縦割り活動を生かした防災教育

地震
火災
大雨・洪水

小学生94人 教職員12人

富田林市立東条小学校

<目的・きっかけ>

・毎年、防災に取り組むことで、6年間の積み上げの学習になり、防災意識を高めていくことができる。縦割りで活動することにより、高学年は説明し教えることができ、より主体的に取り組むことができ、理解も深まる。このような点から、縦割り活動を利用し、特別活動の中で防災教育に取り組み、一人ひとりに、生きる力となりえる防災教育を行っていくことを目的とする。

・学校が土砂災害の恐れがあり、避難場所にも指定されていない。毎年避難訓練は行っているものの、自分事として身近にある危険を考えさせたいと思ったことがきっかけである。

<活動内容>

・毎年 全校でいちごの日（防災の日）を体験学習と全体会という形で実施。それに先立ち高学年はテーマに沿った事前学習を行う。高学年が学習したことを分かりやすく4年生以下に伝える。

<活動の成果>

・いちごの日の取り組みを始めることで、自分たちの地域にある自然災害への危機感を持つことができた。

<活動の工夫・ポイント>

・ふりかえり活動を行い自分の言葉で学びをまとめている。

また、児童一人ひとりがそのワークシートを6年間つづり一冊の防災ファイルを作成している。



兵庫県

緊急時におけるスムーズで
適切な児童の安全確保

地震
火災
雷
台風
大雨・洪水
竜巻

小学生333人 教職員24人 大人278人

稲美町立天満東小学校

<目的・きっかけ>

・緊急時における安全かつ迅速な児童の引き渡しを目的とする。

・近年、自然災害が増え、引き渡しを実施する機会が増えた。学校の授業日に災害が起こった場合、より安全で確実かつ迅速に保護者への引き渡しができる方法はないかと考えた。

<活動内容>

・引き渡し訓練の方法についての動画制作

<活動の成果>

・災害時の引き渡しの手順や方法について、児童や保護者への理解を深めることができた。

<活動の工夫・ポイント>

・PTA本部の方たちと教員で協力して、動画の内容を考え、作成できた。

・年度初めのPTA総会で動画の上映会を行うことで、早い時期にほぼ保護者全員に引き渡しの方法を周知することができた。



兵庫県

校内放送を活用した持続的な
防災学習プロジェクト

地震 津波 火災 雷 台風 大雨・洪水
竜巻 防犯・不審者対策 自転車事故 熱中症 インフルエンザ

神戸市立真陽小学校 SKH放送委員会

小学生約350人 大学生約80人 教職員約20人 大人約10人

<目的・きっかけ>

- ・阪神・淡路大震災の経験や教訓を伝承するための「回路」を学校内外に設ける。
- ・全学年が一斉に防災・減災を学ぶ機会を、通年で、毎年度実現する。

<活動内容>

- ・お昼休みの校内放送を活用した防災学習。
- ・校内防災放送の知見を各家庭に届ける防災版学校だよりの作成・配布。

<活動の成果>

- ・6年度に渡る持続的な活動の結果、毎週1回は必ず防災学習をおこなう習慣が定着した。
- ・取り組みの効果を測定した結果、防災意識の向上、知識の増強、そして防災行動の喚起につながった。

<活動の工夫・ポイント>

- ・無理なく楽しく、学び合いの機会を継続していること。
- ・大学の研究室とコラボすることで、取り組みの効果を客観的に測定し、改善につなげることができている。



熊本県

命を守る・思いをつなぐ
～日奈久沖遭難事故と熊本地震から～

地震 津波 火災
大雨・洪水 水難事故

益城町立津森小学校

小学生97人 教職員19人 水泳指導員3人

<目的・きっかけ>

- ・昭和24年(1949年)修学旅行で遊覧船に乗船した際、突風と高波をうけ船が転覆し、6年児童22名、教諭1名、校医1名の尊い命が失われた。
- ・平成28年4月の熊本地震。益城町は、2度の震度7を経験し、甚大な被害を受けた。今もなお、その爪痕は大きく、心のケアを必要としている児童がいる。

<活動内容>

- ・いのちの日学校集会の実施。・「日奈久遭難慰霊塔」「津森小学校遭難の碑」の参拝。
- ・防災集会、地震・火災避難訓練、「こころタイム」の実施。
- ・水泳教室、保護者対象心肺蘇生法講習会の実施。

<活動の成果>

- ・自助と共助・自然災害に対する考え方・備え方・技能・判断力・実践力等の防災意識が高まってきた。
- ・日奈久沖遭難事故と熊本地震を共に乗り越えていく中で、津森地区の歴史とそれぞれの思いを共有することができた。
- ・自他の命の大切さを実感し、日常生活にその思いを活かしていこうとする態度が育ってきている。

<活動の工夫・ポイント>

- ・地域の方々と連携しながら、教育課程年間計画に位置づける。
- ・日奈久沖遭難事故から70年。今もなお津森小学校で語り継がれている「命を大切にする思い」のすばらしさ。



熊本県

守れ!潤徳!!
～熊本地震の経験から、通潤橋とともに～

地震 火災
大雨・洪水

山都町立潤徳小学校4年生

小学生8人 教職員1人

<目的・きっかけ>

- ・熊本地震の記憶を風化させないため。
- ・熊本地震による、地元にある通潤橋の被災・復旧からの学び
- ・子どもたちから、「防災について勉強したい」と意見が出たことがきっかけとなった。

<活動内容>

- ・火災避難訓練、シェイクアウト(地震避難)防災訓練及び「命と防災」の日の実施
- ・山都消防署・山都警察署・広域熊本市広域防災センター見学
- ・防災新聞、ハザードマップ作成、学習発表会にて防災新聞の発表・配布
- ・被災した通潤橋の見学・熊本地震関連教材「つなぐ」を使用しての、道徳の授業実施

<活動の成果>

- ・家庭で、災害時の避難場所、集合場所など、災害の備えについて話題にした家庭が多くあった。
- ・避難レベル5段階についての、子どもたちや家族の周知徹底

<活動の工夫・ポイント>

- ・国語、社会と総合を連動させた、子どもが主体の学習
- ・地元の消防署・警察署の熊本地震の際の活動状況や災害時の対応についての聞き取り、町の対応等をまとめた記録誌「明日への道標」の読み取り、地域の農家へのアンケート、地域の災害についての聞き取り等、地域に密着した学習



皆の命を守るための行動と備え 「現実起こりうる問題を考える」

青森市立東中学校

中学生294人 教職員28人 大人70人 その他5人

地震

津波

台風

大雨・洪水

大雪

<目的・きっかけ>

- ・平成17年から始まる小学校防災キャンプが、中学校学区内3小学校の輪番制による防災キャンプへ形を変え現在に至る。
- ・平成25年青森県総合防災訓練において東中学校と学区内3小学校合同防災訓練を実施、防災、減災教育とともに、翌年より避難所運営訓練が始まる。

<活動内容>

- ・地域に住む防災士、消防士、消防団、警察官、赤十字救急法指導員、小中おやじの会、PTA、民生委員などが学校と連携し、運営委員会を組織。
- ・中学生防災教育プログラム、要配慮者対応、福祉避難所移送手続き作成、避難所設営非常食体験、ドローン飛行、映像放映。

<活動の成果>

- ・中学生は避難所運営訓練により、役割と責任を持つ事で、自信と自己肯定感につながった。
- ・地域の交流を深め互いに助け合う事の大切さを学び、次世代へ受け継ぐ責任と覚悟を持った。

<活動の工夫・ポイント>

- ・男女共同参画の視点。女性リーダーの育成。
- ・地域が持つ人材資源を活用し、異世代に渡る地域コミュニティを作る。
- ・中学生には負担の少ないタイムスケジュールと自ら考える事を中心としたプログラムにした。
- ・運営訓練における課題や疑問・要望をまとめ次年度に生かして行く。



いつでも、どこでも、 誰にでもできる防災教育

白石市立福岡中学校

中学生135人

地震

火災

雷

台風

大雨・洪水

竜巻

大雪

<目的・きっかけ>

- ・地域の実状を踏まえ、災害から生徒たちの命を守るためには、地域との協力体制が不可欠であるため、災害は、いつ、どこでも発生しうることと捉え、生徒自身が自らの命を守ることができることを踏まえ、共助・公助の活動につなげたい。

<活動内容>

- ・校内避難訓練、市総合防災訓練、救急救命法について講習会（総合的な学習）、地区消防団秋の演習参加、「未来への絆」みやぎ防災教育副読本を活用した授業（各教科）、スクールバス避難引き渡し訓練、避難所における生徒の係わり方について（保健体育）、防災講演会の実施

<活動の成果>

- ・生徒たちは、自助の気持ちは高まっている。今後は、自分で正しく判断し、共助・公助の活動ができるよう活動を続ける必要がある。
- ・生徒の様子を地域に周知することができ、地域の方々との情報交換の機会が増え、連携が深まった。

<活動の工夫・ポイント>

- ・時として我々の力の及ばないほどの猛威を振るう自然に対して、安全を確立し、身を守るために備える行動、そして地域の連携の大切さを確認する。
- ・自分が住んでいる地域の防災活動に参加することで地域の方々が協力し、活動している姿を見ることで、地域の連携の大切さを理解することができた。今後も計画的、有効的に実践できるようPDCAサイクルのもと協力体制の構築を目指したい。



地域住民と地域にある小・中学校が、 ともに考える合同総合防災訓練

北区立神谷中学校

小学生665人 中学生144人 大学生50人
教職員50人 大人391人 その他30人

地震

火災

大雨・洪水

<目的・きっかけ>

- ・震災から身を守るための自助、共助、公助の教育をしていくためには、地域と一体となった訓練が必要。
- ・自ら考え、適切な判断のもと、迅速な行動を取れる児童・生徒の育成を強化。
- ・地域の一員として、地域の人々のために貢献するという意識。

<活動の内容>

- ・関係諸機関に協力要請し、小学校児童、中学校生徒が、地域住民とともに、災害について考える。
- ・様々な防火。防災体験をすることで、命の尊さを学ぶ。

<活動の成果>

- ・地域の年長者、児童、幼少児への声かけ、気配りができるようになった。
- ・その学校が存在する地域と学校が結びつきを強固なものにすることができた。

<活動の工夫・ポイント>

- ・地域合同総合防災訓練を開催するまでに、実行委員会を計画的に実施。
- ・関係諸機関とも連携、調整し決定することが、活動を継続、深化させることにつながっている。



東京都

「もしも」は、いつかやってくる 海拔ゼロm地帯を生き抜く力

地震

津波

台風

大雨・洪水

葛飾区立上平井中学校 地域防災ボランティア部

中学生9人 高校生1人 教職員2人 大人1人

<目的・きっかけ>

- ・校区は東京のゼロメートル市街地にあり、河川の氾濫による浸水が想定される。
- ・防災を未来に継承するため、部活として研究や取り組みがスタートした。
- ・中学生も地域の一翼を担えるよう、地域と一緒に考え、研究し発信する。

<活動内容>

- ・校区の地盤沈下の歴史を伝える文化財「古井戸」説明書を部員が作成し、復元現場に掲示する。
- ・地域と連携し、中学生の役割を明記した避難所運営マニュアルを作成（日本語・英語）活用する。
- ・校内に洪水時の浸水想定を掲示し、全校生徒の主体的なリスク管理を促す。
- ・地域の多様な人々が集う「輪中会議」や学内学芸発表会で成果発表し、活動の持続性をはかる。

<活動の成果>

- ・全校生徒や教職員に、地域のもつ危険性を周知することができた。
- ・「輪中会議」の発表は、地域から高い評価を得て行事に誘っていただくことも増え活動に元気がでた。
- ・卒業後に消防団に加入したり、防災関係の企業に就職が決まったOB・OGもいる。

<活動の工夫・ポイント>

- ・町会やNPO、大学等と連携することで、地域社会の一員として実践的な活動を行っている。
- ・定期的に発表の場を設け、情報交流し、研究のポイントを探究している。



愛知県

地域防災の担い手の育成をめざして

地震

津波

火災

大雨・洪水

愛西市立立田中学校防災リーダー会

中学生15人 教職員1人

<目的・きっかけ>

- ・東日本大震災の被災地、女川町の視察に参加した生徒数名が、防災に強い思いをもち、中学校での避難訓練の振り返りにその思いをつづった。避難訓練の計画から実施を彼らに任せてみようということになり、学校全体からもボランティアを募って、平成30年1月に防災リーダー会を立ち上げる。その後も「中学生として防災のために何ができるか?」という思いを元に、避難訓練や防災集会の企画立案、実行。防災知識を広めるための、通信やポスターの作成、校内放送などの活動に取り組む。

<活動内容>

- ・避難訓練や防災集会の企画立案、実行。
- ・防災通信やポスターの発行、校内放送などの啓蒙活動。

<活動の成果>

- ・多くの生徒の防災に関する興味が深まり、意識が高まった。
- ・防災について、生徒自身が自分事として真剣に考え、いざというときに自分たちが行動しようとするようになった。
- ・避難訓練がより質の高いものになった。
- ・教師にとっても防災に関する多くの学びと反省を得ることができている。

<活動の工夫・ポイント>

- ・生徒同士で意見を交換し合い、また活動後には反省点や改善点を話し合い、次につながる活動になるよう、互いに協力して活動している。



愛知県

守られる人から守る人へ

地震

火災

幸田町立幸田中学校

中学生596人 教職員42人

<目的・きっかけ>

- ・生徒一人ひとりが、防災について知識を深め、思考力・判断力を高めることにより、自己及び仲間の安全管理に努めて、安全な生活を築く習慣や態度を育成したいと考えた。
- ・被害の軽減や災害後の生活を考え、災害対策や備えを工夫したり、ボランティア活動や地域の安全に貢献したりできるようにしたいと考えた。

<活動内容>

- ・復興支援ソング「ライジングサン」の全校ダンスの展開 ・「釜石の奇跡に学ぶ」プロジェクト
- ・様々な状況設定での避難訓練 ・地域の諸団体と連携、協力をした防災学習

<活動の成果>

- ・「ライジングサン」の全校ダンスの展開、「釜石の奇跡に学ぶ」プロジェクトを中心とした防災教育の推進により、安全・防災に対する意識が確実に高まった。
- ・様々な状況設定で避難訓練に取り組んだことにより、「守られる人から守る人へ」という安全な生活を築く習慣や態度が育ってきた。

<活動の工夫・ポイント>

- ・「ライジングサン」を先輩から後輩へとつなげ、踊り続けていくことにより、震災を風化させず、防災に対する生徒一人一人の意識を継続させる。
- ・様々な活動の中で、生徒たちが「自分で考え、判断し、行動する」場面を設定する。



<目的・きっかけ>

- ・いつどこで災害に遭うかわからない中で、主体的に考え行動できる子どもたちを育成することが目的である。
- ・宇治市では総合的な学習の時間を「宇治学」として、副読本を作成して学習に臨んでいる。その副読本を作成する際に、本校がモデル校として避難所体験学習を行ったことがきっかけである。

<活動内容>

- ・運搬作業も含んだ非常食体験
- ・避難所運営ゲーム(HUG)を通しての図上訓練
- ・事前に災害からの避難時に必要なものを考える非常持ち出し袋運用ゲーム(MUG)
- ・ビニールシートと養生テープ、パーティションを活用した避難所設営体験
- ・協力企業による災害時の様子や活動の講演・避難所での就寝体験

<活動の成果>

- ・避難者としての視点から考えることができるようになった。
- ・自分で考え行動する素地を育むことができた。
- ・地域の防災訓練にも中学生が参加するようになった。

<活動の工夫・ポイント>

- ・今年度から5月に実施することにし、年間を通して防災学習に取り組むことができるようにした。
- ・地域の企業や大学、地元の防災会とも連携している。



<目的・きっかけ>

- ・災害が多かった昨年度、理科部の一員だった1年生3人で学んだことを活かして、誰かの役に立ちたいと思い「防災研究班」を立ち上げた。
- ・活動の主な目的は被災地へのボランティアなどの直接支援と、募金などの間接支援、また啓発活動を行うことを目的としている。

<活動内容>

- ・昨年度地震で被害のあった高槻市へ訪れ、お困り後の確認などのボランティアをした。
- ・募金やイベントなどの売上金を北海道地震をはじめ、被災地へ送った。
- ・地域の催しに出展し防災グッズの販売や、エコキャンドルのワークショップ、小学校へのお出前授業などを行った。

<活動の成果>

- ・正直にいうと、学校内では「部活動を頑張っているね。」という反応ぐらいしか、今はない。しかし、地域の催しなどに出席すると小さな子どもが一生懸命ワークショップに参加してくれたり、保護者の方が「ありがとう」と言ってくださったり、また地域の大人の方に「中学生でこんなに頑張ってるすごいね。」や「次の催しにもぜひ来てよ。」と声をかけていただけるのは、うれしい反応だと思っている。そして、これらの反応は私たちの活動の結果なので、活動の成果の一つだと考えている。



<目的・きっかけ>

- ・成人後は地域での活動リーダーを育成しなければならない。
(今、地域で活躍されて方々の高齢化もあり、将来を託せる人材の育成)
- ・防災に関しては、釜石東中学校が東日本大震災で犠牲者を出さずに、地域住民や小学生の命を救った行動を見習い実践できること。

<活動内容>

- ・魚崎町防災福祉コミュニティが企画する防災訓練に取り組む。
- ・東灘区の防災・減災活動には参加する。
- ・中学生のオリジナルである、保育所・こども園の幼児と避難訓練を行う。

<活動の成果>

- ・命の大切さを解かる行動ができる人間に育っている。・自分の命は自分で守る行動。
- ・地域コミュニティを大切に積極的に取り組む。

<活動の工夫・ポイント>

- ・魚崎町防災福祉コミュニティと魚崎中学校とがしっかりと話し合い進める。
- ・魚崎中学校の魚崎ジュニア防災チームの活躍を地域に広げる。・マンネリ化させないため生徒たちと話し合うこと。



<目的・きっかけ>

・阪神・淡路大震災以降、防災教育に取り組んできたが、平成26年8月に発生した丹波市豪雨災害から、防災教育の重要性を再認識した。そこで、地域とともに命を守り、「自助」「共助」の観点を意識した実践的な防災教育を実施することを目的として取り組んだ。

<活動内容>

- ・「全校生避難訓練」の実施(年3回)、市や校区自治会と連携した「地域合同避難訓練」の実施
- ・地域教材を活用した防災教育(1年生 丹波市防災教育教材「心つなぐ」を活用した防災授業)の実施
- ・市の関係機関と連携し、全校生を対象とした総合的な学習の時間(1年生 防災授業 2年生 防災体験活動 3年生 防災講演会)の実施
- ・生徒会が企画運営する「阪神・淡路大震災追悼セレモニー」「東日本大震災追悼セレモニー」の実施

<活動の成果>

・自助、共助の観点から防災教育を進めることで、災害を「他人事」ではなく「自分事」として捉え、防災、減災意識を高めることができた。

<活動の工夫・ポイント>

- ・オープンスクールのプログラムの一部とすることで、毎年実施し、継続した取組になるようにしている。
- ・体験的な学習を多く取り入れたり、地域と学校で連携したりした取組を行っている。



<目的・きっかけ>

・小中学校長の「ロケットストーブ(移動式簡易コンロ)の活用」「東日本大震災学習」の実践経験を踏まえ、連携して防災を視点とした体験活動を構築し、地域防災の担い手となる中学生を育成しようと考えた。

<活動内容>

- ・町内全中学生在「救命資格取得」・小中学生一緒に「安全マップづくり」「引き渡し訓練」
- ・ロケットストーブを活用した炊き出し訓練など
- ・小中保護者で「合同地区懇談会」、地域と一緒に「多様性理解研修」「防災教室」

<活動の成果>

・生徒自己評価「ボランティア活動に対する意欲」「学びを自分の将来と結びつける」の肯定的評価が20%向上した。

・保護者アンケート「学校は生徒の主体性を育成している」の肯定的評価が30%以上向上し、「分からない・無回答」も激減した。

<活動の工夫・ポイント>

- ・地域の大人も多様性への理解を深め、地域防災の中心的役割を担う中学生の背中を押してもらう。
- ・豊かな自然に囲まれた本地域ならではのロケットストーブ活用であり、「ふるさととどう関わって生きるか」を考える機会としている。
- ・小中連携を通して自己有用感と責任感を高め、主体的に判断・行動できる中学生を育成している。



<目的・きっかけ>

・昨年度から3年生の地域学習を防災学習に変更し、文化祭で発表することになった。今年度はどんな視点で活動に取り組むかを考えた際、自分達の住んでいる地域の方に協力を求め、その中で一緒に考えていくことで理解を深めることができると考えたからである。

<活動内容>

- ・今までなかなか考えることのなかった避難を想定し、実際に自分たちの地域で災害が発生した時にどうするかをイメージする防災作文を書いたことである。
- ・地域の方の協力を得ながら、地域への取材を行い、文化祭で防災ブース発表を行ったことである。

<活動の成果>

・防災・減災についての生徒達の知識と理解が深まったことである。

・地域の中学生としてできることは何かを考え、一人一人が自覚をもって活動に参加する姿が見られたことである。

・普段から災害に備えて準備をすること、家族と話し合う機会をもつことの重要性を感じることができたことである。



広島県

小中連携防災プレゼンテーション ～地域を守る生徒の育成～

地震

津波

台風

大雨・洪水

三原市立第二中学校

小学生126人 中学生105人 教職員6人 大人2人

<目的・きっかけ>

- ・防災に関して1・2年次で学習してきたことを基に、地域に根差した新たな課題発見・解決の調査等を行い、それらの取組の中で、情報を適切に整理・分析してまとめ、相手に応じた方法でプレゼンテーションする力を身につけさせる。また、異学年交流により、豊かな社会性、地域の一員としての自覚を高める一助とする。

<活動内容>

- ・防災マップを作成し、地域の小学校で防災プレゼンテーションを実施する。
- ・地域の防災士による防災教育（1年：自助、2年：共助、3年：公助）の実施。

<活動の成果>

- ・自分の住む地域について調査し、それらを自分たちよりも下の異学年児童にプレゼンテーションすることで、地域の一員としての自覚を高め、地域のために活躍したいという意識をもった。
- ・自主的、協働的に活動する姿が様々な場面で見られた。

<活動の工夫・ポイント>

- ・地域の「防災会」の指導・協力を得て、より精度の高い防災マップ作成・プレゼンテーション実施につなげた。
- ・3年間の学習内容を適切に取り入れ、小学生を意識したプレゼンテーションを考えさせた。



徳島県

「伊座利を守ろう」を合言葉に中学生が地域防災リーダーとなる。

地震

津波

美波町立由岐中学校伊座利分校

小学生9人 中学生3人 教職員12人

<目的・きっかけ>

- ・海辺の学校として、南海トラフ巨大地震を迎え撃つため地域とともに防災まちづくりに取り組むこととした。
- ・地域の一員として、主体的に地域防災を考え行動する地域防災リーダーとしての自覚を育てる。

<活動内容>

- ・防災スタンプラリー、小・中・地域合同避難訓練・消火訓練、「空き家調べ」地域発表会、「伊座利を守ろう!」地域発表会、避難場所マップ配布、避難経路清掃、東日本大震災被災地訪問、被災地訪問報告会、「防災と人権」講演会、研究大会にて防災人権授業

<活動の成果>

- ・地域の防災について学習を進めたり、被災地の現状視察から学んだりすることにより、地域の未来を担う地域防災リーダーとしての自覚を強くした。
- ・地域を教材化して学んだことを地域に向けて発表会をすることで、学校と地域が連携協働する防災教育を推進できた。

<活動の工夫・ポイント>

- ・コミュニティスクールとして、地域と連携協働した防災教育を推進している。
- ・防災を人権の視点から学習し、その取り組みを海部郡の他校に啓発する。
- ・主体的に、地域に足を運び、防災まちづくりの視点から課題を見出し、地域防災リーダーとして行動できることを考え、実践する。



愛媛県

自分の命、地域の命を守るためにできること ～自助・公助・共助～

地震

大雨・洪水

松山市立拓南中学校

小学生70人 中学生382人 教職員29人
大人400人 その他15人

<目的・きっかけ>

- ・東日本大震災を契機として、防災学習を総合的な学習の時間のテーマとした。
- ・甚大な被害を受けた被災地の様子や復興の状況を映像や手記などを通して学び、「防災」の重要性について実感させる。防災を自らの課題とする態度を育成するとともに、地域の一員としての行動についても考えさせる。

<活動内容>

- ・総合的な学習の時間において、1年生「自助」、2年生「公助」、3年生「共助」をテーマとして、ゲストティーチャーを活用しながら系統的・計画的に学習を進める。
- ・3年生時に地区連合防災訓練に「自主防災会中学生部」の一員として参加する。

<活動の成果>

- ・生徒の防災意識だけでなく、地域の一員としての自覚が高まった。
- ・地域住民が、災害時の中学生の役割を再認識した。

<活動の工夫・ポイント>

- ・地域の自主防災会と連携して学習や活動を進めており、地域の防災士が中学生とともに学んでいる。



<目的・きっかけ>

- ・災害時における、必要な知識や考え方等について学ぶ。
 - ・食事作りを体験し、知識や技能を身につける。
 - ・集団行動の大切さや思いやりの心、感謝の心を育む。
 - ・主体的、対話的で深い学びとなる活動を通して「気づき、動き、」今後を「変える」ことができるようにさせる。
 - ・「公助」に頼らず、「自助」「共助」で被災初期段階を乗り切る術を身につけさせる。
- 本校の3年生は卒業後、ほとんどの生徒が地元を離れて生活をする。そこで、どこかで出くわすであろう災害時の備えとして、学校での避難所炊き出し体験を実施することにした。

<活動内容>

- ・防災士による講話、ハイゼックス袋を活用した食事作り、振り返りの学習等

<活動の成果>

- ・活動を通して、はじめは「指示待ち」だった生徒たちが、だんだんと主体的に活動していく様子が見えてきた。

- ・知識や技能が身についただけでなく、避難所生活を行う際の考え方や行動、配慮する点などに気づき、学習が深まった。

<活動の工夫・ポイント>

- ・班編制やリーダー決め、時間設定などを意図的に行わず、大人たちができるだけ手を貸さないようにし、生徒の主体的な行動を見守った。



なとり令和『夢』かるた ～地域の魅力と防災豆知識を発信!～

地震 津波 火災 雷
台風 大雨・洪水 竜巻 大雪

宮城県名取北高等学校 奉仕活動部

高校生25人 教職員2人

<目的・きっかけ>

・災害によってかけがえのない命が奪われることを防ぎたいという思いから、「なとり令和『夢』かるた」の製作・配付を行う。名取市の魅力を再発見するとともに、防災意識の向上を図ることを目的とする。

<活動内容>

・かるたの読み札に「名取市の魅力」を、取り札の表面には読み札に合った実際の写真画像を、取り札の裏面には「防災豆知識」を掲載する。製作したかるたは名取市内の学校や福祉施設等に寄贈する。

<活動の成果>

・子どもからお年寄りまで、かるた遊びを通じて「名取市の魅力」を再発見するとともに、防災意識の向上を図ることができる。また「あいいうえお」が読めれば、日本語が苦手な外国人の方とも交流できる。

<活動の工夫・ポイント>

・地域の魅力を伝える読み札の文は、全て私たちが考えた。「なとり令和『夢』かるた」を通じて、「地域」と「防災」の一体化の重要性を伝えたい。



生徒が主体的に運営する「おらほの避難所」 ～災害弱者への支援～

地震 大雨・洪水
大雪

秋田県立横手高等学校定時制課程

高校生114人 大学生10人 教職員22人
その他30人

<目的・きっかけ>

・生徒が主体的に運営する「おらほの避難所」の開設運営訓練を通じ、単なる避難者ではなくむしろ災害弱者を支援する側であることを生徒に自覚させるような「防災教育」に取り組む。

<活動内容>

・夏季、冬季と環境の変化が大きく、特に冬季の積雪を想定して実施している。
・併設している衛生看護学院、関係機関および各種団体と連携し、お互いの顔が見える訓練にしている。

<活動の成果>

・生徒の防災意識の高揚が見られる。また、不登校ぎみの生徒が活動を通じて自信をつけ、普通に登校している。
・参加する団体が増え、地域の防災力向上が図られており、避難所開設および数日経過後訓練に結びついている。

<活動の工夫・ポイント>

・毎回、各団体や活動班から出される反省を生かし、何度失敗しても決して諦めずよりよい訓練にしようと努力を重ね続けている。



地域連携による防災活動の推進 ～地域の防災リーダーを目指して～

地震
大雨・洪水

群馬県立渋川工業高等学校 JRC部

小学生100人 高校生20人 教職員5人
大人5人

<目的・きっかけ>

・地域における防災活動のリーダーとして行動できる姿勢を身につける。
・地域調査を通して地域を知り、地域の将来のことを考えて行動できる生徒を育成する。

<活動内容>

・ぼうさいマップにおける地域調査および活動紹介
・地域における各種防災学習の支援活動

<活動の成果>

・生徒主体の防災学習や地域調査により防災に対する意識を高めることができた。
・生徒は、地域の子供たちへの指導者としての姿勢を身につけ、主体的に行動する力を身につけた。

<活動の工夫・ポイント>

・地域の各機関の協力を得ることにより、防災意識を高めながら地域貢献へと発展させている。
・日々の地域調査の結果を、Web上の防災マップに更新させている。



<目的・きっかけ>

- ・以前から「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」を実践目標に防災ボランティアを行ってきた。
- ・子どもの虐待や貧困をなくす学生サポーターとしても活動してきた。
- ・地域に「英語を母国語としない」外国の方が増えた。コミュニケーションについて工夫する場面が増えた。

<活動内容>

- ・防災情報を「やさしい日本語」にして伝える学習。
- ・ハラル食材の非常食の紹介など国際理解。
- ・子どもからお年寄り、障害者、外国人の防災を支援する。

<活動の成果>

- ・地域の団体と協働しながら、幅広い市民にコミュニケーション型防災について働きかけることができた。
- ・青少年赤十字での救命・防災学習や、これまでの子ども・国際交流ボランティアの経験を生かして、地域の防災・減災を啓発できた。

<活動の工夫・ポイント>

- ・災害時に自分たちの身を守るのみでなく、勇気を持って一歩を踏み出し、高校生の知力・体力を駆使して災害時要援護者の方たちの支援に役立てる。
- ・多文化共生、多様性を認め、「誰一人取り残さない」世界の実現を目指す。主体的な活動を通して自尊心とレジリエンスを高める。



<目的・きっかけ>

- ・地域の防災意識を高める。
- ・地域の環境に興味を持ち、地元への郷土愛を育む。

<活動内容>

- ・小中学生に向けたDIG演習。
- ・自分たちに向けたメンテナンスエキスパートの方々によるDIG演習。

<活動の成果>

- ・災害の起こる可能性が高い箇所を把握することで一人ひとりの防災意識が高められた。
- ・DIG演習を通して、安心で安全なまちづくりに貢献できる土木技術者を目指そうという人が出てきた。

<活動の工夫・ポイント>

- ・ゲーム感覚でDIG演習を行った。



<目的・きっかけ>

- ・3年生になり、課題研究が始まった。7つの分野から、私たちは「防災」を選んだ。そして話し合い、防災マップ作りと防災グッズ作りを取り組むことにした。
- ・防災って何?という疑問を抱く人を減らすために、可児市役所周辺地域の防災マップを作り、防災グッズの作り方を紹介し、一人一人に少しでも防災について考えてもらおうキッカケをつくることを目的とする。

<活動内容>

- ・街歩きと防災マップづくり。・防災グッズづくり。

<活動の成果>

- ・実際に街歩きを行うことによって、危険場所を発見し、また良いところを見つけ、より一層この地域が好きになった。
- ・避難所HUG訓練をしたことによって、災害時の対応に自信がつき、冷静に物事を判断する力や、自分の意見を伝える力を身に付けることができた。

<活動の工夫・ポイント>

- ・生徒自らが計画を立て、活動していること。
- ・地域と交流しながらの街歩きなど、体験的な活動をしていること。



<目的・きっかけ>

・2011年に東日本大震災が発生し、2012年度から夏休みを利用して東北ボランティア活動（岩手県・宮城県）を開始した。その後、2019年度までに岩手県・宮城県での活動は8回、福島県での活動は4回になる。その活動で被災した方やボランティア活動に携わっておられる方々や同世代の高校生たちとの交流によって学んだことや考えたことがきっかけとなった。

<活動内容>

- ・東北ボランティア活動
- ・震災を風化させない取組 復興支援2畳風、いいたて雪つ娘力ボチャ栽培とジャム等の販売
- ・竈ベンチづくり ・生徒向け救命救急法 毎年夏休み前
- ・地域の防災関係の方と避難所運営についての会議
- ・募金活動（西日本豪雨・米原竜巻被害・北海道地震等）
- ・防災訓練 ・防災リーダー養成講座参加

<活動の成果>

・本校は以前問題行動が多く、地域の方からの信頼も薄く、生徒達も自尊心・自己有用感の欠如した状況であった。しかし、活動が地域の方から見えるようになり、新聞等にも紹介されることによって「こんなこともできる学校」として信頼を回復できていった。そのことは地域の中学や保護者にも知れ、本校を希望する生徒が増加し、落ち着いた学校生活が出来るようになった。



<目的・きっかけ>

・本校は世界遺産醍醐寺の近くにあり、大災害が起こった場合、観光客や文化遺産の保護の問題、避難所の運営のありかたなど課題が山積している。その中で、指定緊急避難場所に指定されている本校で防災、環境、公共について学ぶ京都初の防災カリキュラムを導入したキャリアコースライフマネジメントクラスを2018年度に設置した。「京都の防災教育の先頭バッター」として、防災学習の普及を進めており、この度ぼうさい甲子園に応募を行った。

<活動内容>

- ・地域の小・中学校で高校生が企画・立案したワークショップを行う。
- ◎ワークショップの内容(小・中学生と学ぶ○○)
- ①家族会議 ②防災すごろく(京都版) ③水難事故ゼロ活動 ④防災紙芝居 ⑤防災マニュアル作り

<活動の成果>

- ・グループ発表コンテストを行うことで、生徒たちの独創性や工夫、自主性が身に付いた。
- ・地域の学校に対し、防災に関する啓発活動の一役を担うことができた。

<活動の工夫・ポイント>

- ・地域の実態に合わせたゲームなどとおして、小・中学生にも興味・関心をもたせることができる。
- ・防災を切り口にした家族間のコミュニケーションをすすめることで、自助力を高めることにつながる。



<目的・きっかけ>

- ・災害時に温かくておいしい食事を食べることは、心のケアや安心に繋がることを伝える。
- ・多くの人に常にローリングストックや備蓄をしておくことの大切さを伝え災害への備えを見直してもらう。

<活動内容>

- ・保健所の方にインタビュー調査を行ったり、防災士の方から調理方法を学ぶ。
- ・災害時に使えるオリジナルレシピを開発し、レシピ本を作成する。
- ・ポリ袋クッキング等を使った防災料理教室を開催し、地域の方々に広める。

<活動の成果>

- ・常にローリングストックを行うことで実際に災害が起きた時に食に困らないようにする大切さや、温かくておいしい普段通りの食事が心のケアや安心に繋がることなどを地域の方々に伝えることができた。
- ・身の回りにあるものを工夫し、活用できることを伝え、日々の家庭生活が防災対策につなげられることを広めることができた。

<活動の工夫・ポイント>

- ・一度作った料理をただ食べるだけでなく、どうすればもっと食べやすくなるかなどを試行錯誤して次に繋げた。
- ・備蓄やローリングストックの大切さやいざという時の食事の作り方を地域に伝える体験イベントを行った。



<目的・きっかけ>

- ・想定外の天災や人災を経験した平成という時代を振り返るとともに、令和という新たな時代を他者と協働しながら生き抜く力を育む「防災」に関する取組を、探究活動のテーマとして設定した。

<活動内容>

- ・総合的な探究の時間などを活用して地域に密着したオリジナルクロスロードを作成し、防災交流会を通じて鴨沂高校生として地域に対して啓発や問題提起といった発信を行う。
- ・危険箇所の発見・発表、救命実習、防災講話などを通して、防災の様々な知識や技能を習得する。

<活動の成果>

- ・「“やってみよう”という積極性」や「誰かと一緒に取り組む協働性」が身についたと感じた生徒が多数を占めた。
- ・探究活動としての防災学習の一つのモデルを構築することができた。

<活動の工夫・ポイント>

- ・地域に根ざしたオリジナルクロスロードを作成し、実際に異年齢の地域の方々と交流をする中で、地域の中での鴨沂高校生として何ができるのか、主体的に考え発信する機会となった。
- ・高校生が防災について考え発信することにより、学校として地域の人々を結びつけ防災への意識を高める役割を果たすことができた。



<目的・きっかけ>

- ・被災者の方のために、「建築科を学ぶ生徒が身に付けた技術を活かせる支援活動に取り組みたい」と考えた。

<活動内容>

- ・被災者の方が、避難所でプライバシーを確保でき、落ち着いて休める空間が作れるように、「和風間仕切り板」を考案し製作した。・木造住宅を建てる基本を学びながら、「ままごとハウス」などの製作を行い、幼稚園、こども園等に寄贈している。

<活動の成果>

- ・製作した作品を地域の方が高く評価してくださり、生徒たちはやりがいを感じながらものづくりに励んでいる。
- ・「宮高建築科で、地域連携やものづくりを行いたい」と言って入学してくる生徒が増加している。
- ・本校建築科の活動に共感していただき、間伐材をボランティアで製材して提供してくださったり、「ままごとハウス」の屋根の板金葺をボランティアで指導してくださるなど、活動を支援してくださる地域の方がおられる。

<活動の工夫・ポイント>

- ・被災者の方、支援活動に関わっておられる方の声を直接お聞きし、作品製作に取り組んでいる。
- ・被災地の子どもたちが笑顔になれることを大切にしながら、作品製作を行っている。



<目的・きっかけ>

- ・本校は、地域の伝統地場産業による「復興支援」を続けており、被災地との交流も地域と共に行っている。被災地を支援することにより、交流を深めることが出来て、様々な体験談を聞かせて頂き、地震・津波からの避難方法など多くの教訓を学ぶことにより、本校及び、地域の「防災活動」に役立てる。

<活動内容>

- ・年に6回の「防災」関連活動の実施 ・毎年被災地を訪問し、生徒が作成した堺市の地域産業である「包丁」と「線香」を寄贈し、その際に「地震・津波」についての教訓などを教えて頂いている。
- ・「夜間避難訓練」を実施し、「バイオディーゼル発電機」と「電気自動車」・「電動マリオカート」の製作も行い、地域と共に「ぼうさい」に取り組んでいる。
- ・「キャンドルナイト」の実施による防災啓発

<活動の成果>

- ・生徒は自分に自信を持ち、「自己有用感」を高めることが出来た。
- ・この活動を通じて、地域の方々にも「ぼうさい」について考えてもらえるようになった。

<活動の工夫・ポイント>

- ・年間行事予定に毎年「防災訓練」を取り入れて、継続的に行っている。
- ・地域の方々と様々な「防災イベント」を実施し、活動が継続出来るようにしている。



大阪府

南海トラフに備えよう

地震

津波

火災

大雨・洪水

大阪府立貝塚高等学校

高校生2400人 教職員90人 大人60人

<目的・きっかけ>

- ・防災センターに行ったり、避難所の体験を実際に行ったり防災に対する活動を通して知識や意識を高め、それを学校全体や地域に広め災害時に活用できるようにする。

<活動内容>

- ・防災センターの見学
- ・地域の避難所に指定されている施設の備蓄の状況を「備蓄マップ」として作成
- ・学校に1泊して避難所体験
- ・炊き出し体験と身近なもので出来る応急手当法を学ぶ。

<活動の成果>

- ・保健委員会の活動が全校生徒や保護者、地域の関係機関とも協力して行うことができ、保健委員会の活動がさらに広がり、知識なども深めることができた。

<活動の工夫・ポイント>

- ・保健委員会だけでなく、全校生徒への参加を呼びかけ、保護者や地域へも発信し、防災について一緒に考え自然災害に備える知識を深める機会とした。



大阪府

Always Be Careful

地震

津波

関西創価高等学校

高校生3人 教職員1人

<目的・きっかけ>

- ・私たちは大地震により被害を受けた経験がある。そのため、「私たちのように大地震により心に傷を負う人を少しでも減らしたい」というのがきっかけで活動を開始した。
- ・30年以内に来ると予想されている南海トラフ地震に備え、「私たちの力で1人でも多くの人が地震や津波から生き延びて欲しい」と思い、人々の防災への意識向上を目的として活動している。

<活動内容>

- ・防災曲“Always Be Careful”の作成、宣伝。
- ・防災カードを作り、校内や地域、オープンキャンパスで配布した。

<活動の成果>

- ・全校生徒が“Always Be Careful”というテーマを覚え、地震や津波に対する意識を高めることができた。
- ・校内と地域を含め、私たちが作った防災カードを約1200枚配り、多くの人々が財布や携帯電話のケースに入れて持ち歩くようになった。

<活動の工夫・ポイント>

- ・防災に関心の薄い若者にも興味を持ってもらうために、歌や覚えやすいテーマを作り、「楽しく学ぶこと」を意識した。
- ・英語でのプレゼンテーションや、英語版の自作曲など、より多くの人を対象にした活動を行っている。



兵庫県

絆～地域で繋がる防災～

地震

兵庫県立明石南高等学校
めいなん防災ジュニアリーダーMRDP

小学生30人 中学生10人 高校生822人
教職員74人 大人158人 その他39人

<目的・きっかけ>

- ・平成25年、兵庫県教育委員会教育企画課の主催する「防災ジュニアリーダー」が誕生したこと。
- ・発足当初からチーム名に「MRDP(Meinan Regional Disaster Prevention)」を加え「地域防災に寄与すること」を活動の目的とした。活動テーマ「絆～地域で繋がる防災～」は生徒の提案で設定された。

<活動内容>

- ・当初の地域のイベントに参加していただけたが、現在では地域での防災活動は地域との共催、地域からの依頼、チームの単独主催で実施している。
- ・3月末の南三陸町訪問ではボランティア活動のほか志津川高校との交流において地域の復興に取り組んでいる。

<活動の成果>

- ・MRDPの活動が参加している生徒の意識を高めただけでなく、他の生徒にも校内の防災訓練や防災学習のホームルームでの取り組み姿勢などにより影響を及ぼしている。
- ・MRDPの活動が地域で認められるようになり、それとともに他の地域活動でも高い評価を得られるようになった。

<活動の工夫・ポイント>

- ・生徒会や部活動ではない「その他大勢」の有志生徒が主体となって活動している。
- ・活動では生徒が主体的にイベントの進行やプレゼンを行い「いつでも、だれでも」を実行している。



<目的・きっかけ>

- ・神戸市東部第4工区コンビナートにおける懸念事項の1つに、「この地域と本土をつなぐ唯一の『深江大橋』が、大災害による崩壊の状況をどのように確認するのか?」という疑問がきっかけである。

<活動の活動内容>

- ・有事の際に、この崩壊確認は急ぐことであり、崩壊していることが確認できれば、校舎屋上または、阪神高速道路などの垂直避難の判断ができる。
- ・また、ドローンの活用は、災害時等に関わらず、これからどんな現場でも求められる時代になるので、学校現場でもドローンを操縦することができる生徒を育成することは、非常に有意義な活動である。

<活動の成果>

- ・有事の際に関わらず、定期的に第4工区の協定を結んだ企業にライブ映像を配信する。

<活動の工夫・ポイント>

- ・第4工区を区画割りし、それぞれの上空写真を撮影し、ハザードマップを作成する。
- ・また、平時の空撮と災害時後の空撮を比較し、第4工区の資料とする。第4工区協議会と連携し、防災・減災の産学連携を構築する。SNSのアカウントを取得し、災害時にライブ映像を、第4工区の協定を結んだ企業が確認できるようにする。



<目的・きっかけ>

- ・本校は災害時の避難所として指定されている。近くに断層があり正門前には河川もあるため、地域をあげて防災に取り組む必要があった。専門高校の強みを活かした訓練はスキルを高めると共に、高校生として出来ることを見つけ地域貢献に繋げることを目的としている。

<活動の活動内容>

- ・自衛隊・国交省・消防・市役所など専門家の指導のもと、自治会や地元小学生とともに避難所開設を想定した防災訓練を実施。電気情報、環境建設、デザイン、看護、福祉を学ぶ学生らしく、専門性を生かした訓練を実施している。看護科、福祉科は地域に出向き、心のケアを中心とした校外での訓練も展開している。

<活動の成果>

- ・防災への意識だけではなく人とのコミュニケーションの大切さを実感できた。
- ・参加していただいた方からは避難する事への抵抗感がなくなったという言葉をいただいた。

<活動の工夫・ポイント>

- ・激流・地震、避難所開設などの疑似体験ができ、災害時への不安やパニックの軽減に役立てる。
- ・事前準備は綿密に行い、防災訓練当日は、生徒主体で運営実施することで自信をつけさせる。
- ・防災訓練では学校設定教科「防災」を取り入れ、災害と対策についての知識を高めている。



<目的・きっかけ>

- ・学校法人神戸創志学園クラーク記念国際高等学校芦屋キャンパス(以下、芦屋キャンパス)に通う生徒達の多くは、防災意識が低い状況である。本状況を受け、本校では防災教育を通して生徒達に防災意識を定着させていくと同時に、地域防災の中核を担える専門的な知識、技術の涵養を目指し、地域防災リーダーとしての資質を身につけさせる防災教育の実現を視野に教育活動を展開している。

<活動の活動内容>

- ・『芦屋市阪神淡路大震災慰霊碑モニュメント調査報告書(仮称)』制作
- ・校舎を利用した「避難所生活体験合宿」など

<活動の成果>

- ・芦屋キャンパスに通う多くの生徒達は、中学時学力不振やその他様々な理由により学校に通うことができなかった、何かしらの苦手意識を抱える生徒である。そのような生徒達が防災意識を向上させただけではなく、そこから得られた知識や技能を活用して地域還元を行うところまで意識を醸成することができた点があげられる。今後は、地域の震災モニュメント調査を踏まえて、芦屋市のデジタルハザードマップを作成し、阪神・淡路大震災の記憶を現代に継承するとともに、その学びを地域に還元していきたいと考えている。



<目的・きっかけ>

- ・台風や大雪等の際、学校によって休校や授業打ち切りなどの判断が異なることに興味を持った。そして、判断が異なるのは学校の敷地や地域によって災害時の危険性が異なるからではないかと仮説を立て、それを確かめたいと考えた。
- ・敷地周囲に山や川があり、江戸時代に作られた石垣の上に校舎が建っていたり、敷地が土砂災害警戒区域に含まれるなど、豪雨があった時には大きな被害が出る危険性がある。私たちの通っている鳥取西高校において想定される災害は何か、災害時の対応は果たして適切であるのか考えたいと思った。また、その知識を生かして災害時に役立つような地図を作成し、安全な非難に役立てたいと考えた。

<活動内容>

- ・学校敷地内の危険箇所及び避難経路の点検 ・救助袋による訓練 ・火災避難訓練(全校)
- ・学校敷地周辺の危険箇所及び避難経路の点検 ・ポスターセッションによる発表

<活動の成果>

- ・これまで「学校は安全である」と何となく考えていたが、災害の種類や規模、校内の箇所により危険があることが分かってきた。さらに校地外にも目を向け、地域の防災について考えるきっかけができた。



<目的・きっかけ>

- ・平成30年7月に発生した西日本豪雨災害により、本校がある熊野町でも甚大な被害を受けた。災害のボランティア活動を通して被害を目の当たりにし、災害に対する危機感、防災に対する関心が高まった。
- ・課題を自分事としてとらえ、自ら判断し行動できる生徒を育てることを目的とする。

<活動内容>

- ・3学年地理Bの授業において、本校周辺などの3地域の模型を地形図から作製。作製した模型にハザードマップから得た情報をまとめ、災害危険箇所や安全な通学路を検討した。模型は文化祭で展示した。

<活動の成果>

- ・昨年の災害発生場所をふまえて、ハザードマップには書かれていない危険な場所を知り、自ら安全な通学路や適切な避難場所の立地を考えることができた。
- ・この学習を通して、学習に対して受け身であった生徒が学んだことを他者に発信していきたいと考えが変容した。

<活動の工夫・ポイント>

- ・自宅がある地域や出身中学校周辺の地域を取り上げたため、その地域に住む生徒だからこそわかる道の狭さや急傾斜地などを話し合いながら考えることができた。また、昨年の災害の情報を取り入れることで、実体験と結びつけて考察できるように工夫した。



<目的・きっかけ>

- ・那賀川の氾濫による洪水被害を受けて、より地域とのつながりを意識し地域に貢献したいという意欲がみられた。
- ・地域の方とのつながりを大切に、「顔の見える関係づくり」を深め、災害発生時には地域防災の担い手として積極的に行動できる人材の育成をめざす。

<活動内容>

- ・地域の方を招いた「防災食づくり講習会」と「防災食レシピ集」の作成及び配付
- ・那賀町消防署や那賀川河川事務所等の関係機関と連携した那賀よし防災キャンプの実施
- ・生徒発案による避難確認シールや防災リュックの作成
- ・地元中学生と連携した「避難確認シール」の配付による啓発活動の実施
- ・地域防災力充実強化大会in徳島2018での実践発表

<活動の成果>

- ・「防災食レシピ集」を作成し配付する活動を通して、学校全体の防災意識の向上や積極的に地域に貢献したいという意欲に繋がっている。
- ・「防災食づくり講習会」や「避難確認シール」の配付といった地域の方との交流の機会を増やすことで、「顔の見える関係づくり」が着実に深化している。
- ・実践発表を通して、取組のまとめや課題を見いだすことができ、次の活動に生かすことができた。



高知県

防災力向上への取り組み

地震

津波

火災

大雨・洪水

土砂災害

高知県立高知工業高等学校

高校生18人 教職員1人

<目的・きっかけ>

- ・来る南海トラフの地震被害を減少させるため、地震対策の啓発や、自主防災組織に積極的に関わっていくなど、地域防災に役立つことを目的に活動している。
- ・課題研究という授業の一環として、南海地震について学習し、本校の防災意識の低さを知った。このままでは、多くの命が奪われると思い、少しでもその数を減らす活動をしたいと考えた。

<活動の活動内容>

- ・高校生が講師役で主に小中学生対象の地震防災出前授業。
- ・校内避難訓練の企画・実施。

<活動の成果>

- ・出前授業では、より年齢の近く親しみのある高校生からの話をよく聞き、小中学生の防災意識が高まった。
- ・高校生は、小中学生の良い反応にやりがいを感じ、さらに分かりやすくする工夫をしたり、新しい情報を盛り込むなど意識が向上した。

<活動の工夫・ポイント>

- ・プレゼンテーションでは写真はもちろん自分たちで書いた絵を多用し、対象に応じた言葉遣いを考え、分かりやすさを追求した。
- ・講演内容の多様化により、豪雨災害についても講演を行い、高知県が日本で年間降雨量が一位であるにも関わらず、被害が少ないのはなぜかということも、土木の仕事と関連づけて発表を行っている。



高知県

高校生が作る地区防災計画

地震

津波

高知県立大方高等学校

高校生86人 教職員25人 大人40人

<目的・きっかけ>

- ・本校は、南海トラフ地震が起こった際の避難所に指定されている。高齢者の多いこの地域において、自分自身を守るだけでなく、地域の支援者となることを目指した防災教育が必要であると考えた。
- ・本校が避難所になることを想定すると、既存の地区防災計画では不十分であるとの声が生徒からあった。

<活動の活動内容>

- ・昨年度作成した「大方高校オリジナルHUG」の実践を用いて、被災後の生活について地域の方々と共に考える。
- ・「逃げトレ」というアプリを用いて避難訓練を行う。地域の方に結果を報告し、避難路について共に考える。

<活動の成果>

- ・被災後の生活について地域の方々と考える機会を持つことで、いざというときに協力できる関係づくりを進めることができた。
- ・「オリジナルHUG」の作成、実践のなかで、被災時に自分たちに起こることを具体的に想像することができた。
- ・避難生活について考えることにより、生徒が他者の立場を考えることができるようになった。

<活動の工夫・ポイント>

- ・黒潮町役場、地域住民、周囲の保育園・小・中学校、被災地の高校など、学校外の方と関わる機会を多く設け、生徒が他者との関わりのなかで学べるよう工夫した。



高知県

#不登校、防災やってみた。

地震

津波

火災

太平洋学園コミュニティー協力隊

高校生1540人 大学生20人 教職員90人
大人75人 その他20人

<活動の活動内容>

- ・災害から学び、自分の周りに防災の輪を広げていくこと。

<活動の成果>

- ・活動開始当初に生徒全体にアンケートを取った結果から比較すると、現在ボランティアに積極的な生徒は、自己肯定感に関する項目（「自分に自信がある」等）で約10～20ポイント、自身のキャリア意識に関する項目（「私なりの人生があっても良い」等）で約20～30ポイント高い割合になっている。地域からは、これまで本校に否定的な意見があり、また学校へのクレームもあった。しかし、現在では本校があって良かったと言って頂けるまでになった。

<活動の工夫・ポイント>

- ・これまで、被災地でボランティア&ヒアリング調査を行っている。その際に聞き取った内容を基に、プログラムを作成する防災キャンプを行っている。このように災害から学ぶことと伝え広げる活動を両輪にし、取り組みを行っている。
- ・毎回の活動がどの程度効果があったのか、検証できる仕組みを作りつつある。今年度後半には、検証のためのワークショップ&ヒアリング活動を行う予定である。自分たちの活動が果たして本当に防災力向上に役立っているのかという点で厳しく評価され、真に地域のためになる活動を心掛けている。



明治学園高等学校 「自然災害と防災・減災」チーム

高校生20人 教職員2人

<目的・きっかけ>

・自然災害が身近に発生する中で、高校生として何ができるかを考えた。まずは、「知識」を獲得し、「助かる人」になることを目標とした。次に、自分たちだけでなく周囲の人も救うことができるように啓発活動を実施するようになった。その結果、「助かる人」から「助ける人」になることを目的として本活動を実施している。

<活動内容>

- ・自然災害に対する防災・減災意識向上のための啓発活動を実施。
- ①高校生地震防災シンポジウム ②高校生防災意識啓発プラン（被災地巡検）
- ③小学生に対する啓発授業 の3本柱でより幅広い年代への啓発・普及活動を実施。

<活動の成果>

・北九州市内の防災・減災意識向上のための連携モデルを創出した。地域の高校が、地域防災力向上のために協働する契機をつくった。

<活動の工夫・ポイント>

- ・年代別の防災・減災意識啓発活動を高校生が企画し運営をしている点。また、他の学校も巻き込み、この活動を普及させることに努めている点。
- ・北九州市のSDGs推進室と連携を図ることで、今後さらなる発展が期待できる。産官学連携プランとして、様々なステークホルダーと連携を図り、定番化をしようとしている点。



熊本県立八代工業高等学校

高校生6人 教職員1人

<目的・きっかけ>

- ・学校運営協議会を中心に、色々な方々と情報共有・連携・相互支援に取り組むことになり、学校としてどういったことを取り組むかを考えた。
- ・工業高校の特色である「ものづくり」の技術を生かした支援を行うことで、地域の方々との交流や防災意識の高揚につなげることを目的とする。

<活動内容>

・自分たちが製作した災害用調理コンロを用いての文化祭での避難食の振る舞い。地域に寄贈した災害用調理コンロを用いての炊き出し訓練。熊本地震復旧の現場見学。研究発表会や青年会議所定例会等での研究発表。

<活動の成果>

- ・災害用調理コンロ（ロケットストーブ）の製作・寄贈を通じての地域貢献活動が進むにつれ、生徒の積極性が高まり、最後には、この発表会を経験して良かったとの感想を聞くことができた。
- ・発表を通して、地元の地域からロケットストーブを備蓄したいとの要望をいただいている。

<活動の工夫・ポイント>

- ・教師が最初から製作手順等を全部教えず、生徒たちが試行錯誤しながら製作することで、ものづくりへの興味・関心を深化させることができている。



宮崎県立佐土原高等学校 情報技術部

高校生21人

<目的・きっかけ>

- ・佐土原高校情報技術部では、情報技術を駆使し社会貢献することを模索していたところ、公益に資するアプリ開発とプログラミング教育が両立できる「防災アプリ開発」を活動のテーマにすることにした。防災アプリ開発はH29年からスタートし、今年で3年目を迎える。活動の主体は高校2年生である。

<活動内容>

- ・地域の防災に役立つ防災アプリ「SHS災害.info」を開発する。
- ・地域の行事に参加し、アプリの普及活動を行う。

<活動の成果>

- ・国土地理院主催 平成29年度 防災アプリ審査委員会 「大賞」受賞
- ・国土地理院主催 平成30年度 防災アプリ審査委員会 「大賞」受賞

<活動の工夫・ポイント>

- ・教師側は、個々の生徒のプログラムのエラーに対応することや、生徒のアプリを一つの防災アプリにまとめる作業等は、大変な部分もある。しかし、アプリ開発を通して生徒たちは、自分たちが思い描いたアプリケーションは、実現することを実感できたのではないかと。・アプリのPR活動は、アプリのダウンロード数を確認しながら、地域の各種行事に参加し行った。参加者から、高校生が直接アプリの感想を聞くことは、「防災アプリ開発」のCheck機能として有益な活動であった。



<目的・きっかけ>

- ・地域防災訓練での指導で、フォロー不足を感じたため独自イベントとして「防災スクール」を開催した。
- ・防'zとして活動をしてきたことを生かし、より多くの人に防災について知識を深めてもらう。
- ・また活動をともし行うことにより参加者同士の交流を図る。

<活動内容>

- ・防災スクール2019開催
 - ①静岡の自然の豊かさを学び、防災を学ぶ（講演）、②身近なものでの応急処置+非常食について知ろう（講演）、③目黒巻の3講座を実施
- ・非常食 de ランチ開催非常食の作り方、試食と三角巾による包帯法の指導を実施
- ・その他地域防災訓練でのCPR、包帯法の指導実施

<活動の成果>

- ・防災訓練の活動が積極的になった ・若い世代の防災意識向上

<活動の工夫・ポイント>

- ・企画・宣伝・運営のほぼ全てを学生が担い、講演依頼も学生が行なった
- ・講演は本学教職員や卒業生を中心に依頼し地域に根ざした内容を行なっている。



<目的・きっかけ>

- ・地震災害後における大学運営と、学生と近隣地域住民への初期対応力を向上させることが目的。
- ・災害時医療に対する動機付けを行う。

<活動内容>

- ・近隣地域住民の避難を想定した避難所運営訓練。
- ・傷病者の救護・看護を目的とした初期対応を行う救護所運営訓練。
- ・学内情報伝達の問題点を洗い出し、情報が錯綜する状況を体験する情報伝達訓練。
- ・京都府八幡警察と合同の傷病者の救護搬送訓練。
- ・食堂主体の炊き出し訓練。

<活動の成果>

- ・多くの教員・学生が災害時医療教育の必要性和避難所運営訓練の必要性を理解した。
- ・学内全体として防災に向けて動くようになった。
- ・教員が1度目にお手本を見せ、2度目に類似の症例が来た際には学生が実践することで学びにつながりやすい。

<活動の工夫・ポイント>

- ・傷病者や避難者の情報は、出来るだけリアルに見える設定にしている。
- ・当日発表で課題を用意し、飽きが来ない様に工夫を行っている。 ・訓練の運営には学生が主体的に関わっている。



<目的・きっかけ>

- ・2009年神戸国際大学リハビリテーション学部開設時、学部1期生8名が、救急法普及活動を通じてたった一つしかない命を皆で救うことを通して命の大切さを知って頂き、命を大切に社会を築く一助となることを目的として大学の課外活動部として活動を始めた。
- ・2011年東日本大震災時に、地元消防団に入団し地域住民と一緒に防災活動も行うようになった。

<活動内容>

- ・一般市民（中学校、高校、大学、企業含む）へ救急法講習会の企画・実施を通じて命の大切さをアピールする。
- ・地元消防団に加入し、防災訓練等を通して防災技術修得と地域防災への貢献。
- ・その他、転倒予防教室での健康体操の実施、障がい者運動会やチャイルドフェスティバル等の運営協力を行うことで間接的に命の問題について学んでいる。

<活動の成果>

- ・命の大切さについて、救急法普及活動や自殺防止活動、地域防災活動を通じてアピールすることができた。
- ・救急法普及においては、2019年3月まで延べ1,883人に講習を実施した。

<活動の工夫・ポイント>

- ・大学のホームページに活動報告を掲載し、市民や学生にアピールし、モチベーションを高めている。



<目的・きっかけ>

- ・西日本豪雨災害において、愛媛大学生の約3割が被災地出身者であり、実家が被災した学生が88名にのぼった。
- ・大学のスケールメリットを活かしより効果的な支援活動を展開するため、愛媛大学学生ボランティア・サポートセンター (SVSS) を設立し、様々な取組を展開した。
- ・災害時における、いろいろな立場の心のジレンマを教訓にし、今後の災害に備えることを目的とした総括をすることとなった。

<活動内容>

- ・正しい情報発信、大学発ボランティア・バスの運行、災害ボランティア活動の実践。
- ・災害ボランティアに特化したハンドブックの編集。・ハンドブックを活用した防災教育の展開。

<活動の成果>

- ・『愛大生のための「災害ボランティア活動」ハンドブック』の発行。
- ・同冊子を活用した教育活動の展開。

<活動の工夫・ポイント>

- ・学生が中心となり本文を執筆。西日本豪雨災害における災害ボランティア活動を踏まえての実際の悩みや経験からできたハンドブック。
- ・「現地で行う支援活動」のみならず「行かなくてもできる支援」も取り扱う。
- ・「行くことを決めている学生」のみならず「行こうか悩んでいる学生」も対象とする。・「Q&A」形式とする。



<目的・きっかけ>

- ・平成27年9月関東・東北豪雨により市域の3分の1が浸水する被害を受け、水害検証報告書が作成された。本書では、学校における水害を対象とした日頃からの訓練の必要性が提言され、日頃からの備えや幼少期からの防災教育の大切さを痛感したことが取組みのきっかけとなった。
- ・主な目的 1.状況を正しく判断し、安全かつ迅速に避難するための秩序ある行動がとれるようにすること。2.児童・保護者・地域・教職員の学校防災に対する意識を高め、顔の見える関係を築くこと。

<活動内容>

- (1) 防災勉強会（ワークショップや講話）学校の地域性や人材によってプログラムはさまざまである。
- (2) 避難訓練
- (3) 保護者への引き渡し訓練 小学校と中学校が隣接する場合は、合同で訓練を行うケースも見られる。

<活動の成果>

- ・各学校がアイデアや課題を活発に議論することで、継続性を保つ端緒が多い。
- ・子供たちが日頃から防災について深く考えることができています。

<活動の工夫・ポイント>

- ・一斉に訓練を行うことでアイデアや取組みの課題を共有できている。
- ・さまざまな関係者が訓練に参加することで連携強化につながっている。



<目的・きっかけ>

- ・東日本大震災をきっかけにして防災教育に取り組んできたが、今回の台風15号により市原市は大きな被害を受けた。停電、断水により学校は4日間の休校を余儀なくされた。各家庭においても対応は様々であり、猛暑であったことから、車内泊を選択する家庭もあれば、家から出ることを頑なに拒否する子供と共に暑い家の中で過ごした家庭もあった。これを機に学校防災体制の見直し及び子どもたちや家庭における防災教育を推進する。

<活動内容>

- ・台風15号による停電や断水の中での家庭生活における様子を丁寧に聞き取り、現在の学習にどのようなにつなげられるかについて、校務分掌や各担任が考え学習に生かすとともに、PTAとも連携して研修等の内容を検討する。また、今回の台風被害による教訓をどう残していくかについて、地域や行政等の関係機関を交え検討する。

<活動の成果>

- ・訓練の当日だけでなく、事前・事後学習で深まるようにしている。大きな避難訓練の前日に必ずミニ避難訓練を実施し、ワンポイントアドバイスをしている。高等部の放送委員会では、毎日行う校内放送の中で、朝地震があったこと、交通安全運動、防災の日、避難訓練の内容等、タイムリーに防災・安全の内容を紹介している。



<目的・きっかけ>

- ・被災地の支援は様々だが、子どもたちの「学び」に目を向けたものは少ない。子どもたちの心のケアのためにも、「学び」の支援が必要と考えた。

<活動内容>

- ・ボランティアが集まった関東や地元の大学生が中心となり、益城町立飯野小学校の希望する児童に、長期休業中の数日間、「宿題の仕上げ」を主な目的として、学習支援をしている。
- ・午後は、ドミノ大会や、歯についての勉強後に歯磨き指導をおこなったり、プールの開放を手伝ったりしている。

<活動の成果>

- ・比較的年齢の近い大学生と触れあうことは、子どもたちの心のケアにつながっている。
- ・安心・安全な学びの場となっており、学校も保護者も安心できる。

<活動の工夫・ポイント>

- ・「学び」が主であるが、子どもたちが楽しめるような活動もできるだけたくさん取り入れていく。
- ・昨年度から、地元大学生の割合が増えてきており、打ち合わせ等にはSNSを駆使している。
- ・支援者の経験の差が大きいため、ミーティングを必ず行い、打ち合わせやルールを徹底するようにしている。



豊橋障害者(児)団体連合協議会

小学生40人 中学生15人 高校生10人 大学生10人
教職員5人 大人760人 小学生以下5人

<目的・きっかけ>

- ・防災の備えや対策をゴミの分別や交通ルールのように市民の日常生活の中に習慣づける。
- ・普段から障害者と健常者が声をかけ合える地域になるよう、福祉と防災と一緒に学べる機会を作る。

<活動内容>

- ・「防災タイム」9月中(3回/1日×2週間) 趣味やスポーツ目的を含む全来館者に避難訓練を実施。
- ・「親子防災」夏休みに障害者理解の体験と防災に関連した工作の講座を合わせて実施。
- ・「避難所体験～防災運動会」非常食配達ゲーム・大声コンテスト等、防災に関連づけた競技を実施。

<活動の成果>

- ・防災イベントには無関心な人も防災タイムには参加し、災害について話し合うきっかけになった。
- ・夏休みに障害児と健常児と一緒に学ぶことで思いやりの心が生まれ、保護者への理解啓発にもつながった。

<活動の工夫・ポイント>

- ・障害者が活動する会館である特性を生かし、障害者をお客様扱いせず、地域に生きる仲間として市民と出会い学びあえる方法を心掛けている。



愛知県立一宮東特別支援学校

小学生1209人 中学生1001人 高校生2210人
教職員1885人 その他40人

<目的・きっかけ>

- ・障害のある生徒の実態に合わせた防災学習に取り組み、自らの命を守る方法を身に付ける。
- ・防災学習を通して、主体的な姿勢を育み仲間や地域の方の援助者としての役割を果たせる生徒を育てる。
- ・地域とPTAと共に、防災について取り組み、地域との交流を深め、情報共有、ネットワーク作りを進める。

<活動内容>

- ・年4回の防災訓練、学期ごとのショート訓練、保護者引き渡し下校訓練、災害伝言ダイヤル活用訓練、消火器、消火栓活用訓練、特別活動、生活単元学習での防災授業、職業家庭科での防災調理実習、総合的な学習の時間での防災への取り組み、地域自治会「井端睦会」との交流

<活動の成果>

- ・地域と学校が共に防災を通じてのつながりができ、取り組みへ発展している。
- ・防災学習を通して、正しい避難方法を身に付けたり、主体的に取り組む姿勢が見られるようになった。



京都市立修学院中学校 1・2・3年9組

中学生10人 教職員3人

<目的・きっかけ>

- ・緊急災害時や避難時に、育成学級生徒が仲間や周囲の人々と協力し、適切な行動をとり、自らの生命と生活を守ることができるようにするため。

<活動内容>

- ・簡単な防災グッズの製作。
- ・防災に関する知識と技能(行動力)の習得。

<活動の成果>

- ・様々な防災グッズを製作できるようになった。
- ・防災に関する興味・関心が向上した。
- ・机の下に隠れるなどの行動が速くなった。

<活動の工夫・ポイント>

- ・1回やって終わるのではなく、繰り返し何度も行い、定着を図ること。
- ・仲間意識・協力意識を持たせること。



<目的・きっかけ>

・開校以来、さまざまな防災学習を行ってきた。卒業後は就職する生徒が多いことから、自ら考え、行動する防災教育が重要である。

<活動内容>

- ・特別支援学校単独での防災避難訓練や高等学校との合同避難訓練
- ・1.17の震災学習
- ・中学生・高校生防災ジュニアリーダー育成会参加と活動報告会の開催

<活動の成果>

・防災避難訓練を非公開で行うことで、いつ発生するかわからない地震や火災に対応する力がついてきた。

・少人数の生徒の防災に関する活動報告を聞くことで、他の生徒の他者肯定や自己肯定につながった。

<活動の工夫・ポイント>

- ・避難訓練や震災学習だけではなく、通常授業中にも防災について学んでいる。
- ・避難訓練は、年度最初の訓練以外は非公開で行っている。
- ・支援を受ける側とされてきた特別支援学校の生徒が防災ジュニアリーダー育成会に参加して意見を聞いたり、発表することは、参加した生徒自身だけではなく、周囲の生徒にも多くの良い影響を与えた。



<目的・きっかけ>

・日常から火災が発生したとき、学校としてどのように対応していくべきか、危機意識をもった行動を取っていくかを考え、地域の一員としての助け合いの心もち、人間としての生き方なり方を身に付けることを目的とする。

<活動内容>

・地域合同避難訓練では、近隣地区住民、豊岡市出石振興局、出石精和園の職員が参加し、近隣地区住民、出石精和園、本校教職員・高等部生徒が、水消火器を使用した防災訓練を行う。

<活動の成果>

・地域と連携した防災避難訓練を実施することにより、学校と地域が防災意識の高揚に努めることができた。

<活動の工夫・ポイント>

- ・児童生徒が防災頭巾を着用、教員は全員防災ヘルメットを着用した防災避難訓練を実施することにより、落下物から頭部を保護し、安全に避難できるようにした。
- ・出石精和園グラウンドを避難場所としてあげている。避難する際は鍵を借りてくるので、事前にその時間を考慮に入れて児童生徒の避難の時間を設定している。
- ・逃げ遅れた児童生徒への対応として、救助班と教頭がトランシーバーを持って情報のやりとりをし、救助にあたっている。
- ・各クラスで教員が事前に防災避難訓練に向けて、「おはしも」の説明をしている。



<目的・きっかけ>

・来る南海トラフ巨大地震に備えるために、明石高専の防災士として何か活動を行うべきだと考え、この組織は発足された。

<活動内容>

- ・遊ぶだけで防災の知識が身につく、防災ゲーム（災害からの避難、避難所運営など）の製作。
- ・明石市の近隣地域、淡路、神戸市などでの減災まちづくりに協力。
- ・芦屋市の逃げ地図製作の参加。

<活動の成果>

- ・防災ゲームに取り組んだ方々の防災意識向上に大いに役立った。
- ・活動地域がさらに広がり、防災についての関心が広がっていると言える。

<活動の工夫・ポイント>

- ・組織の運営や、活動の計画、実施は学生自らがやっている。
- ・神戸市、明石市、芦屋市、淡路市など諸地域で活動を展開している。
- ・毎年、新防災士や新入生の有志が組織に加入することにより、活動の継続性が保障されている。
- ・活動をさらに展開しても、個々で防災について教えるのではなく、改善点や新たな発見を共有し合い、お互いにより影響を与え合いながら活動を進めている。



117KOBEBouサイマスター育成会議

大学生80人 大人10人

<目的・きっかけ>

- ・阪神・淡路大震災の記憶と教訓を次世代へ継承していくことを目的としている。
- ・2014年、神戸市と神戸新聞社が地域の大学生に呼びかけ、117KOBEBouサイマスタープロジェクトを始めた。

<活動内容>

- ・プロジェクトの中心を担うのは兵庫県内の大学生で、「117KOBEBouサイ委員会」を結成し、活動している。
- ・Bouサイワークショップや出前授業、市民救命士講習を実施し、日ごろの「備え」を呼びかけている。

<活動の成果>

- ・年20～30回の活動を続けており、小学生から20代の若者まで、防災・減災に触れてもらう機会を創出した。
- ・プロジェクト独自の「Bouサイ検定」と市民救命士講習を終了した1000人超の「Bouサイマスター」が誕生した。

<活動の工夫・ポイント>

- ・月に1度定例ミーティングを開き、大学生自らが活動計画や新たに取り組む企画について考え、実現させている。
- ・年間を通じて新規加入メンバーを募集すると同時に、OB、OGとの交流を続けるなど活動が継続できる体制づくりに取り組んでいる。

子供の命を守る取組
～障害のある子供達の防災訓練～

和歌山県立 みくまの支援学校

小学生25人 中学生18人 高校生28人

<目的・きっかけ>

- ・南海トラフ地震など大規模災害に備え、障害のある子供達のわかりやすい防災対策について学び、災害に対する心構えや防災への関心を高める。

<活動内容>

- ・災害対策として、青色のセーフティゾーンを設置、活用しての避難訓練を行う。
- ・日常的、見える化した防災対策を行う。(ヘルプカード 防災マイバックの確認 ライフジャケット着用)
- ・「防災キャラクターみくまじろ」を通して、地域、保護者へ防災の広報を行う。(みくまじろ缶バッジ ポスター 作業製品等)

<活動の成果>

- ・学校の重点課題の1つとして取り組むことで、児童生徒、教職員、育友会、地域が一体となって防災に取り組めており、子供達が防災を身近に感じられる。

<活動の工夫・ポイント>

- ・障害のある子供達にとって見通しを持って安全に避難するための避難場所として視覚支援となる青色のセーフティゾーンを校内63カ所に設置している。
- ・「防災キャラクターみくまじろ」を通して親しみやすい防災教育を推進する。(みくまじろ=みくまの+あるまじろ)
例) みくまじろのポーズ・・・あるまじろが丸まるポーズを真似ることで、避難時に頭部を保護する姿勢をとる。

まなぼう・つなごう・つたえよう
～いのちをまもる行動とは～

こどもプロジェクト1・2・3

小学生500人 中学生10人 教職員30人
大人200人 その他10人

<目的・きっかけ>

- ・オリジナル防災DVD等制作・広報し、わかりやすい身近な防災・減災活動を行う。
- ・Bouサイフェスティバルinいしいを開催、防災意識を向上に努める。

<活動内容>

- ・Bouサイフェスティバルinいしいでの予告なしの避難訓練などが行政でも取り入れられるようになった。
- ・町内各小中学校より出前教室の依頼が増え、体験中心の防災学習が子どもたちを通して、保護者や地域へ広がっている。

<活動の成果>

- ・毎年1回Bouサイフェスティバルinいしいを企画・開催し、スタッフは常に学びを深め、思いを共有する、オリジナル防災ミュージックDVD等を制作・広報することで、誰でも、どこでも、同じように、防災の学びを得ることができるようになった。映像化することで、だれにでもわかりやすく、すぐに防災アクションを起こすきっかけをつくる。
- ・弱小ボランティア団体であるが、私たちだからこそできる活動を行政に提案し、協力して、すぐに防災アクションにつながるような活動を行うことで、地域住民の防災意識の向上に努める。



大方児童館（NPO童夢）

小学生120人 中学生15人 教職員30人
大人20人 その他50人

<目的・きっかけ>

- ・南海トラフ地震の津波想定で、日本一高い34.4mに立ち向かうため、犠牲者ゼロを目指して、自分の身を自分で守れることを目標に児童館の強みを生かした防災活動。

<活動内容>

- ・子どもの気づきと発見を重視した、臨機応変な判断力を育成する避難訓練。
- ・児童館だからこそできる防災体験学習をプログラムした防災DAYの実施。
- ・児童館を中心とした、地域・家庭・学校の防災連携を推進するための取り組み。

<活動の成果>

- ・子どもたちの発言を地域の方がしっかり受け止めてくれている。
- ・児童館での活動を地域に向けて発表している。
- ・こうした成果から、当初から目標としている防災力upが進んでいる。

<活動の工夫・ポイント>

- ・マンネリ化を防ぐために、防災DAYでは3つの異なるプログラムを1年に1つずつ実施することで、長期的な学習のサイクルを作り、子どもたちには毎年新鮮な気持ちで防災活動に取り組んでもらえるように工夫している。
- ・毎年の活動の反省点や改善点。



八重山特別支援学校

小学生19人 中学生15人 高校生24人
教職員72人

<目的・きっかけ>

- ・障害のある児童生徒の迅速な避難と災害時における支援方法

<活動内容>

- ・令和元年度 5月10日 <地震火災津波避難訓練の事前学習>
- ・令和元年度 5月14日 <第1回 学校安全マップの作成（校内1階）>
- ・令和元年度 5月16日 <地震火災津波避難訓練を実施>
 - 第1部 地震発生から火災、津波が押し寄せてくることを想定し、避難訓練を実施
 - 第2部 避難所生活の様子を知ろう（避難所生活の様子をスライド視聴、非常食の体験）
 - 第3部 給食時間に非常食を出してもらい、食器等が無い場合の食べ方について学ぶ
- ・令和元年度 6月30日 <第2回 親子で学校安全マップの作成（校内2階）>
- ・令和元年度 9月6日 火災避難訓練の事前学習
- ・令和元年度 9月10日 火災避難訓練

校内にて火災が発生した際の避難経路の確認と火災発生時の初期行動

<活動の成果>

- ・本校は5障害種を対象とした総合型の特別支援学校であり、それぞれの障害の状態に応じた避難訓練、防災学習を行う必要がある。また、職員も緻密な避難誘導計画を立てている。知的に障害のある児童生徒向けの講話や病弱、肢体不自由の生徒向けなど多角的な視野で防災学習を実施。



＜毎日新聞 関連記事一覧表＞

※毎日新聞社使用許諾

年 月 日	タイトル	備 考	ページ
2019年12月 5 日 (木)	グランプリ 関西大・近藤研究室	全国一面	69
2019年12月 5 日 (木)	「現場主義」で情報発信	全国社会面	70
2019年12月 5 日 (木)	古里を愛する心学ぶ 震災の記憶 紙芝居に	岩手面	71
2019年12月 5 日 (木)	県内3校が奨励賞	宮城面	72
2019年12月 5 日 (木)	年間20ステージ 創作劇や歌披露	福島面	73
2019年12月 5 日 (木)	「忍者ポーズ」で危険判断	埼玉面	74
2019年12月 5 日 (木)	優秀賞に東金特別支援学校	千葉面	75
2019年12月 5 日 (木)	「チーム防災」が入賞	東京面	76
2019年12月 5 日 (木)	津波へ備え 命の大切さ学ぶ	神奈川面	77
2019年12月 5 日 (木)	静岡大・研究室が優秀賞	静岡面	78
2019年12月 5 日 (木)	ぼうさい甲子園奨励賞 岡崎市立常磐東小 愛知工科大・板宮研究室	愛知面	79
2019年12月 5 日 (木)	白鷺中 リーダー育成評価	大阪市内面	80
2019年12月 5 日 (木)	非常時の調理方法工夫	神戸・明石面	81
2019年12月 5 日 (木)	県内4団体受賞	和歌山面	82
2019年12月 5 日 (木)	上道中 フロンティア賞	岡山面	83
2019年12月 5 日 (木)	呉・広南中「はばタン賞」	広島・備後面	84
2019年12月 5 日 (木)	津乃峰賞が大賞受賞	徳島面	85
2019年12月 5 日 (木)	地域一帯で独自の防災	高知面	86
2019年12月 5 日 (木)	新宮東中に特別賞	福岡面	87
2019年12月29日 (日)	安心 自分たちの手で みんなで守る未来	全国特集面	88・89
2019年12月29日 (日)	「ぼうさい甲子園」入賞2校活動	岩手面	90
2020年 1 月13日 (月)	防災教育に大きな役割	全国企画特集面	91
2020年 1 月13日 (月)	関大研究室など表彰	全国一面	92
2020年 1 月13日 (月)	ぼうさい甲子園 県内の2校栄誉	岩手面	93
2020年 1 月13日 (月)	尼崎小田高を表彰	阪神面	94
2020年 1 月13日 (月)	啓発用の商品開発	神戸・明石面	95
2020年 1 月13日 (月)	山崎高(穴栗)を表彰	丹波・但馬面	96
2020年 1 月13日 (月)	山崎高や松陽高 表彰	播磨・姫路面	97
2020年 1 月28日 (火)	誰も 取り残さない 守る みんなの手で	全国特集面	98・99

グランプリ 関西大・近藤研究室

学校や地域が取り組む優れた防災教育を顕彰する今年度の「ほうさい甲子園」（1・17防災未来賞）の受賞校・団体が決まりました。小学生、中学生、高校生、大学生、特別支援学校・団体の5部門に計118校・団体の応募があり、選考委員会（委員長＝河田恵昭・人と防災未来センター長）は、グランプリに関西大学社会安全学部・近藤研究室（大阪府）を選びました。このほか、各部門から最優秀賞のほうさい大賞（うち1校がグランプリ）、優秀賞、奨励賞と特別賞7賞を選考しました。1月12日、神戸市中央区の兵庫県公館で表彰式と発表会を開きます。

ほうさい甲子園

その他の大賞は、徳島県阿南市立津乃峰小学校、高知県黒潮町立佐賀中学校、兵庫県立山崎高校、埼玉県立日高特別支援学校。

（26面に他の受賞校・団体）

主催 毎日新聞社▽兵庫県▽（公財）ひょうご震災記念21世紀研究機構／協賛 UR都市機構

ぼうさい甲子園

グランプリ 関大・近藤研究室



「釣り紙だるま」にメッセージも入れる広聴試み
津教授（左から3人目）と学生ら一大阪府高槻市の
関西大学社会福祉学部で、聴覚障がい者劇

「みんなのぼうさい」
 避難メディアを使用
 した防災プロジェクト
 上巻テーマとして掲
 げられた人の被災避難に
 分巻として扱え、4年
 から避難生活都市を
 開いて避難生活や障
 害を人の被災避難に

[illegible]

グランプリ、ぼうさい大賞以外の受賞校・団体

＜豊田西片岡南地区立小中学校＞
津小・中島市津田中、的良寺西條
美基マコ和山県立神野高、Kumanoサポーターズリーダー館マ
勢岡大教育学園、橋本基義研究所
マ千歳県立中央会別支那本校

●《貴陽黃》有城關南河汚立石標
小字雲山縣同前南河立月經表小字和
車山縣同前南河立月經年〇貴城黃泥
杜因市立南上中〇留手舉之天無血。
還其新我云〇與南高立起解小田
萬。智池科看煙莊藥。健康開道〇
豐知工科大。新道研究室〇貴城關
立主權於女士南河黃泥

＜Uのレジリエンス賞＞徳島県
美波町立由能小々高庭南園五十町
立美津中々高庭山南立田高島マ勢

＜はばタン賞＞広島県立広島南中マキズナプロジェクト（監修）＝高校生マキズナ100年祭の

いじめをなくす会（民権派）＝大生
生子どもにも音楽を教える会「就
聴しあわせ居るように合唱団」（民
権派）＝都立文芸学校、団体

＜だいいじょうき＞新潟県立
市立新井高等学校で、大勢の市立白根中
津市立津波高等学校。Jishuの
中見大ボランティアセンター公認
学生団体。チーム活動（東京）
＜津波ぼうき＞新潟県立
市立新井高等学校で、大勢の市立白根中
津市立津波高等学校。Jishuの
中見大ボランティアセンター公認
学生団体。チーム活動（東京）

＜教科アイデア集＞兵庫県立松
陽高

＜フロンティア賞＞佐藤雄樹山
市立南沢小学校二小学生▽東京都
足立区立西新井小▽岡山県立上道

中江津赤川町立南中学校
＜連絡にせうき＞上宮川ふれあ
いホーム（花巻山脈）＝今学生が
北方領土・被災チーム

[illegible][illegible]

「新刊のしるし」の題名に「新刊」の文字が

[illegible][illegible]

ぼうさい甲子賞

県内3校が奨励賞

2団体に「はばタン賞」

優れた防災教育を顕彰する今年度の「ぼうさい甲子賞」（1・17防災未来賞）は、他日新聞社など主催で、県内からは、石巻市立広瀬小と気仙沼市立陸上中、県立支援学校女川高等学園の3校が「奨励賞」に選ばれた。また、被災の経験と教訓から生まれた活動に贈られる「はばタン賞」には、七ヶ浜町立向洋中の卒業生たちで活動する「さすなぐ」が選ばれた。

「はばタン賞」は、大震災で避難所生活に携わった人の貴重な体験などを、地域と連携した取り組みが評価された。

「さすなぐ」は、県立支援学校女川高等学園は、市内の自主防災会組織を参考に、生徒が自主的に防災活動に参加できる仕組みを構築している。

「さすなぐ」は、大震災で避難所生活に携わった人の貴重な体験などを、地域と連携した取り組みが評価された。

「さすなぐ」は、県立支援学校女川高等学園は、市内の自主防災会組織を参考に、生徒が自主的に防災活動に参加できる仕組みを構築している。



防災学園で災害時の避難の仕方などを学ぶ児童ら（広瀬小提供）

「さすなぐ」は、大震災で避難所生活に携わった人の貴重な体験などを、地域と連携した取り組みが評価された。

「さすなぐ」は、県立支援学校女川高等学園は、市内の自主防災会組織を参考に、生徒が自主的に防災活動に参加できる仕組みを構築している。

「さすなぐ」は、大震災で避難所生活に携わった人の貴重な体験などを、地域と連携した取り組みが評価された。

「さすなぐ」は、県立支援学校女川高等学園は、市内の自主防災会組織を参考に、生徒が自主的に防災活動に参加できる仕組みを構築している。

東日本大震災の被災者を慰め、被災者への支援を目的として創作劇を上演する白鷺合唱団「はばたん」が、福島県内の合唱団に「はばたん賞」を贈る。白鷺合唱団は、被災者への支援を目的として創作劇を上演する。白鷺合唱団「はばたん」が、福島県内の合唱団に「はばたん賞」を贈る。



はばたん賞に県内の合唱団 年間20ステージ 創作劇や歌披露

「はばたん賞」は、25年前の阪神大震災で自宅が全壊した神戸の音楽教師、日井真さんが作詞・作曲した。合唱団は「復興を祈る人間の音楽」をテーマにしており、東日本大震災以降、合唱団の一部を「福島」に変えて歌っている。メンバーは現在、小学2年と大学1年の4人で、年間20ステージをこなす。東日本大震災を題材とした創作劇にも取り組んでいるほか、渡江町の仮設住宅で歌を披露したり、他の被災地の被災学園を訪問しコーディネートしたりと、さまざまな活動を行っている。

「はばたん賞」は、25年前の阪神大震災で自宅が全壊した神戸の音楽教師、日井真さんが作詞・作曲した。合唱団は「復興を祈る人間の音楽」をテーマにしており、東日本大震災以降、合唱団の一部を「福島」に変えて歌っている。メンバーは現在、小学2年と大学1年の4人で、年間20ステージをこなす。東日本大震災を題材とした創作劇にも取り組んでいるほか、渡江町の仮設住宅で歌を披露したり、他の被災地の被災学園を訪問しコーディネートしたりと、さまざまな活動を行っている。

日高特別支援学校「ぼうさい甲子園」大賞



「それと、もう一つ。『山崎先生』の著者には、
佐々木康雄という方がいます。」

[illegible]

ヘルメットにイラスト描かせ関心高め



里麿がイラストを描いた「アコヘル」

[illegible][illegible]

國立成功大學圖書館

「忍者ポーズ」で危険判断

優秀賞に東金特別支援学校

「ぼうさい甲子園」

津波ぼうさい賞 長生特別支援学校

優れた防災教育を顕彰する今年度の「ぼうさい甲子園」(1・17防災未来賞)Ⅱ部日新聞社主催で、県内からは東金特別支援学校が優秀賞、長生特別支援学校が「津波ぼうさい賞」に輝いた。それぞれ災害に備えた地域との協力を評価し、顕彰された。

東金特別支援学校の児童・生徒は日新聞の防災をテーマにした「あたりき防災」を船場、おだて、入江の3カ所を巡り、避難行動を工夫し、合わせて表現した動画を作り、「あたりき防災」と題してインターネット上で発信したり、曲をこじ化したりする活動が評価された。

海神宮を約400メートルの距離にある長生特別支援学校は、災害や事故に関する動画をアップロードする「らっぷら防災」の制作、生徒らも歌った

曲を制作。小学部・中学部の2年生から3年生までの防災教育に活用。全国にも発信したいと意気込んでいる。

【東金特別支援学校】



机の下に逃げ込む児童＝長生特別支援学校提供

「チーム防災」が入賞

ぼうさい甲子園 西新井小も

優れた防災教育を顕彰する今年度の「ぼうさい甲子園」(1・17防災未来賞)毎日新聞社など主催)で、都内から中央大がランティアセンター公設学生団体・チーム防災(八王子市)が「だいじょうぶ賞」、足立区立西新井小が「ブロンズ賞」に輝いた。それぞれ、地域との連携を構築している点や、防災教育に情報通信技術

優れた防災教育を顕彰する今年度の「ぼうさい甲子園」(1・17防災未来賞)毎日新聞社など主催)で、都内から中央大がランティアセンター公設学生団体・チーム防災(八王子市)が「だいじょうぶ賞」、足立区立西新井小が「ブロンズ賞」に輝いた。それぞれ、地域との連携を構築している点や、防災教育に情報通信技術

優れた防災教育を顕彰する今年度の「ぼうさい甲子園」(1・17防災未来賞)毎日新聞社など主催)で、都内から中央大がランティアセンター公設学生団体・チーム防災(八王子市)が「だいじょうぶ賞」、足立区立西新井小が「ブロンズ賞」に輝いた。それぞれ、地域との連携を構築している点や、防災教育に情報通信技術



子供たちと防災すごろくをする中
央大の学生たち「チーム防災」提供

「3Dインターネット」
と公開した。担当者は「自然と身につけた防災意識が被災に結びついてくれたら」と期待

待する。
木更津市の南郷地区にある西新井小は、地震発生時には大きな被害が懸念され、防災教育に力を入れている。今年度からタブレットを活用。毎晩な場所を記した防災マップを作成するなど、先進技術を積極的に活用する。担当者は「児童の学習が、地域防災に役立てば」と願っている。
【藤元悠太】



修学旅行で、磯部高田市の防波堤を見学する生徒
横須賀市立浦賀中提供

津波へ備え 命の大切さ学ぶ 横須賀市立浦賀中に「フロンティア賞」

優れた防災教育を顕彰する今年度の「ぼうさい甲子園」（1・17防災未来賞）＝毎日新聞社など主催＝で、県内からは横須賀市立浦賀中が「フロンティア賞」に輝いた。津波への備えや命の大切さを学ぶ取り組みが評価された。

浦賀中は海岸に近く、江戸時代には津波で大被害を受けた地域にある。2011年の東日本大震災を機に、翌12年から抜き打ちの避難訓練を始め、16年からは防災教育も強化。地域の特性を把握し、震災時の被害も調査した。地元の小中学校との合同避難訓練も実施。昨年からは、被災

した岩手県陸前高田市を修学旅行で訪問している。

防災教育を担当する山口英波教諭は「生徒は修学旅行前に、震災被害について調べていたが、被災地の現状を目の当たりにして意識が変わった」と指摘する。生徒からは「震災発生時の記憶がある最後の世代として、次の世代に伝えたい」という声があったという。

受賞について、山口教諭は「子供たちが頑張った成果で、すごくうれしい。防災教育は、すぐに効果が出るか分からないので、粘り強く取り組んでいきたい」と話した。【柴山雄大】

ぼうさい甲子園

静岡大・研究室が優秀賞

ぼうさい甲子園 授業や教材開発、普及



紙芝居を使って防災について子供たちに説明する学生＝藤井研究室提供

優れた防災教育を顕彰する今年度の「ぼうさい甲子園（1・17防災未来賞）」11毎日新聞社など主催で、県内からは静岡大教育学部・藤井基興研究室が優秀賞に選ばれた。また「減災」につながる取り組みを対象として

新設されたURレシリエンス賞を県立御殿場特別支援学校が受賞した。藤井研究室は東日本大震災以降「考える防災」をテーマに掲げ、防災に関する授業や教材の開発、普及を進めてきた。近年は教員と

して働く卒業生と連携して現場の声を教材に反映している。海外にも目を向けており、今年9月には来日したトルコの教育関係者に防災研修も実施した。御殿場特別支援学校は、藤井研究室と連携して防災教育を進めている。小学生には地震時に頭を隠す「ダンゴムシのポーズ」を指導。高校生の授業には「すころく」を取り入れるなど工夫を凝らす。今年度からは毎月第4水曜に防災教育の時間を設けた。今後は地元住民と非常食をおいしく食べるイベントなどを予定している。

【関元悠太】

ぼうさい甲子園奨励賞 岡崎市立常磐東小 愛知工科大・板宮研究室



地域の人に「土砂災害マイタイムライン」の
記入の仕方を説明する児童＝常磐東小提供

優れた防災教育を顕彰する今年度の「ぼう
さい甲子園」（17防災未来賞）毎日新聞社
など主催で県内からは岡崎市立常磐東小
と愛知工科大・板宮研究室が奨励賞に選ばれ
た。また、数年にわたり継続的に実施された取
組みを対象とした「継続と努力賞」に名古屋
高・減災チームが選ばれた。【岡崎大輔】

継続と努力賞 名古屋高

常磐東小は、学区で
高齢化と過疎化が進行
しているうえ山の斜面
に建つ家が多く、台風
や大雨、地震による危
険度が高いことに着

目。独自の、あらかじ
め時系列で整理した防
災行動計画「土砂災害
マイタイムライン」を
作成した。また同じよ
うに防災教育に取り組
む星野東の小学校とテ
レビ防災会議を行うな
ど、多様な取り組みが
評価された。近藤副部
校長は活動について
「子どもの成長につな

がるだけでなく、地域
の防災活動への積極的
な参画を生み出してい
る」と話す。
愛知工科大・板宮研
究室は、防災訓練のマ
ンネリ化を防ぐためA
R（拡張現実）やVR
（仮想現実）の技術を
活用して災害を疑似体
験しながら避難行動を
学ぶことを考えた。研
究生が、VR津波体験
アプリ開発に取り組み
高校で指導するなど後
継者の育成に加え、学
部上級生が下級生を指
導して研究室内の継続
性を担保している。
名古屋高・減災チー
ムは、高校生や中学生
が「助けられる存在」
から「助ける存在」に
なることが活動のテー
マ。7年間にわたって
地元自治会や社会福
祉評議会などと連携
し、避難所における信
託訓練を続けてきた点
などが評価された。

ぼうさい甲子園・だいじょうぶ賞



地域防災リーダーと避難所などの状況を報告し合う白鷺中の生徒ら＝白鷺中提供

白鷺中リーダー育成評価

優れた防災教育を顕彰する今年度の「ぼうさい甲子園」（1・17防災未灾覧）「毎日新聞社など主催」で、府内からは関西大社会政策学部・近藤研究室がグランプリとなったほか、防犯や安心・安全なまちづくりを旨とする取り組み「だいじょうぶ賞」に大阪市立白鷺中が選ばれた。

近藤研究室は、2015年に「教科アイデア賞」、16年に「優秀賞」、18年に「ぼうさい大賞」を受賞するなど防災活動に力を入れており、今回初めて最高賞に輝いた。

白鷺中は、1995年の阪神大震災

関大・近藤研究室 初のGP

昭和30～40年代の東日本大震災を教訓に、16年4月から子どもの防災リーダー（防災A・I・Y）を育成する活動をしている。A・I・Yは「Active Learn Team」の頭文字。「積極的に学ぶチーム」の意味だ。

今年度は、公益財団法人・パナソニック教育財団から実践研究助成を受け、ICT（情報通信技術）を活用した防災教育の取り組みだ。今夏には東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県南三陸町を生徒と教員計7人が訪れた。防災の啓発活動にも力を入れる。

同中の斎藤二教頭は「災害はいつ起こるか分からない。『防災を中心とした地域とのつながり』をテーマとして、いざというとき役立つ生徒を育てたい」と話す。

【関係人】

ぼうさい甲子園 大賞に山崎高^(大)

非常時の調理方法工夫

優れた防災教育を顕彰する今年度の「ぼうさい甲子園」(1・17防災未来賞)「毎日新聞社」主催で、県内からは兵庫県立山崎高等学校が、高校生部門最優秀の「ぼうさい大賞」に選ばれた。3年連続の受賞。防災科、生物資源科、森林環境科学科があり、それぞれの特長を生かした防災教育への取り組みが評価された。【奈良田子】

山崎高は、大地震を、今年4月には、被災地こそ可能性がある。時に役立つポリ袋を使

3年連続受賞 特長生かした教育評価



のに絞った。保丁やま 指導に当たる多々良 教諭は「卒業後の進路 想定して、料理はさみ や立派はさみさまた や手ではさむよう、 里方法も工夫した。 昨年の12月の防災体 会では、森林環境科 学や自然な人を育て 材が木造校舎の組 みの構えなどを担当

小田山崎校同様に、 阪神・淡路大震災 市が被災者として 立神高等学校、日 だじょうと高野 松崎高校(宮野市) が 教員アイディアを 受賞した。尼崎小田 高は、子供から大人まで 楽しめる防災イベントを 開催。地域のハブ(中 心)になるべく、地 元の防災訓練に参 加し、小学校の防災 訓練を実施した。神 崎高は、防災教育を 奨励。松崎高は、食 品の活用を行った。

表彰式と発表会が来 年1月12日、神戸市中 央区の県立総合体育 館で開催される。 市役所、市立山崎 高、市立大甲子園 防災館、大甲子園 防災館。

県内4団体受賞

日高高、近隣との訓練評価

開かれた新設校舎内を撮影する半田の「日経」の記者さん。①・②・③は、毎日新聞社と「日経」関係者から、新設校の設立に賛同する「日経」のメンバー。④・⑤・⑥・⑦・⑧・⑨・⑩・⑪・⑫・⑬・⑭・⑮・⑯・⑰・⑱・⑲・⑳・㉑・㉒・㉓・㉔・㉕・㉖・㉗・㉘・㉙・㉚・㉛・㉜・㉝・㉞・㉟・㊱・㊲・㊳・㊴・㊵・㊶・㊷・㊸・㊹・㊺・㊻・㊼・㊽・㊾・㊿・

れている。そのために、同級生では1000年かから、近への幼稚園の園児や小、中学校の児童・生徒が、7月20日(日)に、高野山に上り、大雄の誕生を祝っている。地蔵

よりシリエンヌ
西立日暮高校
日暮高校がある周辺
地域は南海と天王寺大
地蔵の駅、約10分の車
が来るので探検店に

[illegible]

猪生肌、同校の技術者
士は肥田剤を製造し、
米圃に散布する。第
52号

生徒たちは同校の
運動場にある土を
定めて、簡易のポ
ールの加工切りを
する訓練をした。土
の配製を要するシ
ュレーン、ベンチ
を列するなども行
った。

◆徳天宮―東京・神田区
寛政

年は町内のA邸におる通明を託したマップを製作。女性のためにバードウォッチングに導く「ハートフルシート」の開発も行い、製品化を目指している。

◎歡迎選購一書兩件
◎贈送中法校

を語り、太陽をこめ
てお湯を沸かす「太陽
傘」の作りかたを

1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100. 101. 102. 103. 104. 105. 106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 119. 120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 154. 155. 156. 157. 158. 159. 160. 161. 162. 163. 164. 165. 166. 167. 168. 169. 170. 171. 172. 173. 174. 175. 176. 177. 178. 179. 180. 181. 182. 183. 184. 185. 186. 187. 188. 189. 190. 191. 192. 193. 194. 195. 196. 197. 198. 199. 200. 201. 202. 203. 204. 205. 206. 207. 208. 209. 210. 211. 212. 213. 214. 215. 216. 217. 218. 219. 220. 221. 222. 223. 224. 225. 226. 227. 228. 229. 230. 231. 232. 233. 234. 235. 236. 237. 238. 239. 240. 241. 242. 243. 244. 245. 246. 247. 248. 249. 250. 251. 252. 253. 254. 255. 256. 257. 258. 259. 260. 261. 262. 263. 264. 265. 266. 267. 268. 269. 270. 271. 272. 273. 274. 275. 276. 277. 278. 279. 280. 281. 282. 283. 284. 285. 286. 287. 288. 289. 290. 291. 292. 293. 294. 295. 296. 297. 298. 299. 300. 301. 302. 303. 304. 305. 306. 307. 308. 309. 310. 311. 312. 313. 314. 315. 316. 317. 318. 319. 320. 321. 322. 323. 324. 325. 326. 327. 328. 329. 330. 331. 332. 333. 334. 335. 336. 337. 338. 339. 340. 341. 342. 343. 344. 345. 346. 347. 348. 349. 350. 351. 352. 353. 354. 355. 356. 357. 358. 359. 360. 361. 362. 363. 364. 365. 366. 367. 368. 369. 370. 371. 372. 373. 374. 375. 376. 377. 378. 379. 380. 381. 382. 383. 384. 385. 386. 387. 388. 389. 390. 391. 392. 393. 394. 395. 396. 397. 398. 399. 400. 401. 402. 403. 404. 405. 406. 407. 408. 409. 410. 411. 412. 413. 414. 415. 416. 417. 418. 419. 420. 421. 422. 423. 424. 425. 426. 427. 428. 429. 430. 431. 432. 433. 434. 435. 436. 437. 438. 439. 440. 441. 442. 443. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812. 813. 814. 815. 816. 817. 818. 819. 820. 821. 822. 823. 824. 825. 826. 827. 828. 829. 830. 831. 832. 833. 834. 835. 836. 837. 838. 839. 840. 84

◆植物系カプラー上
田ふれあいルーム
手動で調整され
る。食事の際、牛乳パッ
クを使用して食料を作
ったり、調理がスリ
ズリ。

上道中フロンティア賞

ぼうさい甲子園「逃げ地図」作成 岡山

優れた防災教育を顕彰する今年度の「ぼうさい甲子園」(1・17市立上道中(岡山市東区防災未来館)「毎日新聞古部」が「フロンティア賞」に選ばれた。

西日本豪雨を機に、災害時の避難経路を「逃げ地図」としてまとめたことが高く評価された。

昨年7月の西日本豪雨では上道中の橋を流れる砂川の橋が決壊し、学区内の住宅が浸水被害を受けた。これを受け、同校の1年

東側に避難場所への経路を歩きながら逃げ地図を作成。公開館に展示した。

さらに、全校生徒に

の住所や自動体外式除細動器(AED)の設置場所などが書き込まれている。

防災教育担当の久山樹弘教頭は「災害時には何が起きるかわからない」といふことを西日本豪雨で痛感した。生徒を守るため、地域と連携しながら学校として向かっているのか、今後も考え続けた」と話している。

【岡元悠太】

●作成した逃げ地図●逃げ地図作りに取り組む上道中の生徒―いづれも上道中連発



ぼうさい甲子賞で「はばタン賞」を受賞した広南中の（左上から時計回りに）大田優はさん、板崎雅也さん、中野雄介さん、沢田結衣さん、森田川藤さん。

呉・広南中「はばタン賞」

被災経験活かして創作劇

【本紙記者の取材】被災経験を活かして創作劇を上演する広南中学校の生徒たちが、ぼうさい甲子賞で「はばタン賞」を受賞した。この賞は、広島県内の中学生が、被災地の現状や復興の取り組みについて、自分たちの力で創作した作品を発表する機会を目的に設けられた。広南中は、この賞を受賞した作品の中で、最も優秀と認められた。生徒たちは、被災地の現状や復興の取り組みについて、自分たちの力で創作した作品を発表する機会を目的に設けられた。広南中は、この賞を受賞した作品の中で、最も優秀と認められた。

福山・駒の浦学園も受賞

小学生「フロンティア賞」に

【本紙記者の取材】福山・駒の浦学園の小学生たちが、ぼうさい甲子賞で「フロンティア賞」を受賞した。この賞は、広島県内の小学生が、被災地の現状や復興の取り組みについて、自分たちの力で創作した作品を発表する機会を目的に設けられた。駒の浦学園は、この賞を受賞した作品の中で、最も優秀と認められた。生徒たちは、被災地の現状や復興の取り組みについて、自分たちの力で創作した作品を発表する機会を目的に設けられた。駒の浦学園は、この賞を受賞した作品の中で、最も優秀と認められた。



福山・駒の浦学園の小学生たちが、ぼうさい甲子賞で「フロンティア賞」を受賞した。この賞は、広島県内の小学生が、被災地の現状や復興の取り組みについて、自分たちの力で創作した作品を発表する機会を目的に設けられた。駒の浦学園は、この賞を受賞した作品の中で、最も優秀と認められた。

ぼうさい甲子賞

安全・安心なまちづくり評価

新宮東中に特別賞

ほうさい甲子園 ハザードマップ活用

優れた防災教育を顕の「たいじょうと賞」
影する今年度の「ほう
さい甲子園」(1・17
防災未来賞)「毎日
新聞社など主催」で
新宮町立新宮東中(折
尾成成校長)が特別賞
い今新設された同校



避難所を学生がゲームの図上訓練を自分たちの
防具に合わせて行うと取り組む生徒たち

は、災害時のヘリボ
トとなる公園に隣接
し、緊急車両の受け入
れを想定した構造にな
っており、防災教育を
活動の柱に据えた。
1年生が町の被害予
測図や避難所を介し
たがしたハザードマッ
プを眺め込んだ。その
後、街でマップ上の警
戒区域を認識。毎日の
通学で気をつけるべき
交通や防犯面での注意
箇所も確かめた。消防
の協力で心肺蘇生法な
ども学んだ。
今村校長さん曰は
「自分では大きな地震
などを直接経験してい
ないけれど、学問を重
じて勉強し、起きうる
問題を考えることがで
きた」。河野教頭は
「生徒たちは『災害は
どうでも起こる』と
意識し、真剣に取り組
む姿があった」と語っ
た。【岡本純典】

「ぼうさい甲子園」入賞2校活動

今年度の「ぼうさい甲子園」（毎日新聞社など主催）で県内から賞状を授けられた東大福高と盛岡市立藤枝南小が、年末も防災や伝家のための活動に取り組んだ。

東京の高校生案内 復興過程など説明

東京都の千葉県花菱
東大福高等学校（通称花菱
江校）の高校生と年生
30人が参加する東日本
大震災の「被災地訪問
ツアー」が20日まで、
盛岡市で実施された。
同校生は大福高の生徒
とも交流した。

花菱江校は震災前から復興
校舎は震災後から復興中
冬と夏の休みに3階
を訪問している。当初
は仮設住宅での滞在
会などがメインだった
が、8年前からは盛
岡市に学ぶメニューが
増えた。



千葉県花菱江校生との交流で「七福神」モコモカルに演じる大福高生徒研究部の2年生＝大福町で

25日は、大福高復興
研究部の2年生14人と
交流した。同校の佐々
木佳里さんは、約12分
の発表では、約12分

の長さの防犯道の建設
過程や、毎年通った飯
沼神社が復興してくる
ことなど、町内を
歩きながら説明。盛岡
市さんは同校生、三
陸町教の佐藤さん（七
福神）を説明した。
花菱江校が盛岡に参ら
ず盛岡の町を歩いた。

は、大福高生が古里の
将来を真剣に考える姿
に刺激を受けたとい
う。「災害の時代」に
生きる子どもたちが、そ
の活動がある。災害
時に率先避難する大切
さを言葉や友人に伝え
たい」と話した。

【中尾雄英】

災害に強いまちを 地域住民に提言へ

盛岡市で25日、地
域の大人に復興に強い
まちづくりを提言する
ための授業があった。

同小は校舎が震災直
接に2011年3月11日
から、防災学習のあり
方を模索してきた。し
かし10月の台風19号暴
雨で、校舎が改めて浮
き彫りになった。

8年生の授業では
「避難訓練に参加しな
い人がいる」「避難場所
を知らない人がいる」
などテーマごとに解決
策を考えた。去年1月、
市職員や地域住民向け
の発表を予定する。

同小の時間マリエ吉
さんは「手作りのポスター
で参加を呼びかけ、ゲ
ームなど親子で楽しめる
防災訓練を企画した
い」。小林樹真さんは
「土砂災害について、王
のうさぎの絵や、川
の水が流れる様子、樹
木が倒れる様子など、
子どもがわかりやすい
イラストを描いた」と話した。

【中尾雄英】



災害に強いまちづくりに向けて盛岡市西小
体協員に向けたプレゼンテーションを考
える盛岡市小6年生＝盛岡市西小で

同小は校舎が震災直
接に2011年3月11日
から、防災学習のあり
方を模索してきた。し
かし10月の台風19号暴
雨で、校舎が改めて浮
き彫りになった。

8年生の授業では
「避難訓練に参加しな
い人がいる」「避難場所
を知らない人がいる」
などテーマごとに解決
策を考えた。去年1月、
市職員や地域住民向け
の発表を予定する。

同小の時間マリエ吉
さんは「手作りのポスター
で参加を呼びかけ、ゲ
ームなど親子で楽しめる
防災訓練を企画した
い」。小林樹真さんは
「土砂災害について、王
のうさぎの絵や、川
の水が流れる様子、樹
木が倒れる様子など、
子どもがわかりやすい
イラストを描いた」と話した。

【中尾雄英】

ぼうさい甲子園創設15年

防災教育に大きな役割

30年、50年継続が大事



河田重昭
日本赤十字会会長

河田氏は、1989年に設立された、日本赤十字会災害立脚部です。阪神大震災の被災地を視察し、被災地を支援する活動を行っています。被災地を支援する活動を行っています。被災地を支援する活動を行っています。

阪神大震災25年

阪神大震災25年。被災地を支援する活動を行っています。被災地を支援する活動を行っています。被災地を支援する活動を行っています。

住民行動へつながる



新田寛人
日本赤十字会会長

新田氏は、1989年に設立された、日本赤十字会災害立脚部です。阪神大震災の被災地を視察し、被災地を支援する活動を行っています。被災地を支援する活動を行っています。被災地を支援する活動を行っています。

災害文化根付かせて

井戸敏三・兵庫県知事



井戸氏は、1989年に設立された、日本赤十字会災害立脚部です。阪神大震災の被災地を視察し、被災地を支援する活動を行っています。被災地を支援する活動を行っています。被災地を支援する活動を行っています。

ハードもソフトも



河田重昭氏（右）と新田寛人氏（左）

河田氏は、1989年に設立された、日本赤十字会災害立脚部です。阪神大震災の被災地を視察し、被災地を支援する活動を行っています。被災地を支援する活動を行っています。被災地を支援する活動を行っています。

経験 知識を文化に

河田氏は、1989年に設立された、日本赤十字会災害立脚部です。阪神大震災の被災地を視察し、被災地を支援する活動を行っています。被災地を支援する活動を行っています。被災地を支援する活動を行っています。

URレジリエンス賞創設 「縮災」の取り組み 対象に



URレジリエンス賞創設。被災地を支援する活動を行っています。被災地を支援する活動を行っています。被災地を支援する活動を行っています。



関大研究室など表彰

ぼうさい甲子園 39校・団体入賞

優れた防災教育を顕彰する「ぼうさい甲子園」(1・17防災未来賞) 毎日新聞社、兵庫県、ひょうご震災記念21世紀研究機構主催、UR都市機構協賛の表彰式・発表会が12日、神戸市の兵庫県公館であった。約400人が出席し、初めてオンラインで開いた関西大社会安全学部(大阪府高槻市)

・近畿研究室(写真・小松雄介撮影)など10校・団体が活動内容を発表した。

阪神大震災から25年の節目の年の今回は、全国の118校・団体から応募があり、39校・団体が入賞した。関西大の近畿研究室は地域防災・防災活動を支援するプロジェクトを展開。阪東大輔さん(4年)は「防災は、皆が共に包摂し合えるような社会づくりが必要。連携できる内容は一緒に取り組みたい」と語った。

【岡崎大輔】

**ぼうさい甲子園
県内の2校栄誉**
神戸で表彰式

神戸市中央区の兵庫
県公館で10日に開かれ
た「ぼうさい甲子園」
（毎日新聞社など主催）
の表彰式と発表会。県
内からは、高校部部門
の奨励賞を大船橋校
復興研究会が受賞し、

津波ぼうさい賞には
釜石市立緑丘小が輝
いた。両校の代表者は、
毎日新聞大阪本社
編集局長と「人と防災
未来センター」のセ
ンター長から、それぞれ
表彰状などを授け取
った。

表彰式後は、表彰さ
れた東北から四国まで
の児童・生徒ら約10

0人の交流ワークショップ
も開催された。同
年度の優秀な児童さ
んと浦田さん、1年
の稲垣さん、目黒
夏樹さんらも参加。昨年
のぼうさい甲子園に参
加したと発表会に参
加した「ぼうさい組
」制作した「ぼうさい組
」を賞した。

発表会では、各校が
自らの取り組みを発表
した。発表が予定され
る浦田さんや稲垣さん
も、発表会から、自分たち
が、防災意識の向上を
目指している。防災・
減災を文化とする地域
づくりを進めたりして

いる他校の発表に刺激
を受けていた。

緑丘小の片山直人
教師は「（同小で）起
める防災意識と共通点
が多かった。やってみ
なると想像以上にな
ったと感えた」と振り返
った。両校の4人は
「防災や津波避難の大
切さを伝えるためにく
や、避難所を築き込
んだ態を制作する活動
が参考になった」と話
す。「備忘録」をつた
えたり、防災を伝える
特別支援学校の取り組
みについて、と賞状
を示し、復興や防災の

●大船橋校復興研究会を代表し、奨励賞の表彰
を受ける佐々木結菜さん（左） ●津波ぼうさい
賞に輝いた釜石市立緑丘小の片山直人教師
（右） ―いすけいも神戸市中央区公館の会場で

担い手となることを改
めて誓っていた。
【中略】



「防災イベント」で、阪神甲子園球場に集まった市民ら。前列には、尼崎小田高の生徒らも参加した。

ぼうさい甲子園

尼崎小田高を表彰

防災イベントで地域結ぶ

神戸市の東公園内にある「ぼうさい甲子園」で、17日防災イベント「ぼうさい甲子園」が開催された。尼崎小田高等学校（小田高）の防災活動が表彰された。この日は、小田高の防災活動が表彰された。この日は、小田高の防災活動が表彰された。

神戸市の東公園内にある「ぼうさい甲子園」で、17日防災イベント「ぼうさい甲子園」が開催された。尼崎小田高等学校（小田高）の防災活動が表彰された。この日は、小田高の防災活動が表彰された。この日は、小田高の防災活動が表彰された。

尼崎小田高は、防災イベントで地域を結ぶ。この日は、小田高の防災活動が表彰された。この日は、小田高の防災活動が表彰された。この日は、小田高の防災活動が表彰された。

ぼうさい甲子園

啓発用の商品開発

神戸・神港橋高を表彰



「ぼうさい大賞」を受賞し、神戸市三木区（左）から表彰状を受け取る県立山崎高の生徒ら
—神戸市中央区の県公館で

神戸市の県公館で12日にあった「ぼうさい甲子園」（1・17防災賞）の県立山崎高（兵庫県三木市）、「災害防衛」の

なら主催の表彰式・発表会。「ぼうさい大

賞」を受賞し、神戸市三木区（左）から表彰状を受け取る県立山崎高の生徒ら
—神戸市中央区の県公館で

山崎高、尼崎小田高なども

県立尼崎小田高（尼崎）が「ぼうさい大賞」を受賞し、神戸市三木区（左）から表彰状を受け取る県立山崎高の生徒ら
—神戸市中央区の県公館で

山崎高(典)を表彰

ぼうさい甲子園被災時の調理紹介

神戸市の泉公園で12
日にあった「ぼうさい
出陣した。

甲子園」(1・17防災
未定稿)―毎日新聞社
など主催の表彰式・
授賞会。「ほうさい大
震」の県立山崎高(犬
塚市)、「災害調査」の
県立尼崎小田富通科
看護医療・健康類型
(尼崎市)、「たいじ
ようぶ震」の神江市立
神橋高校R'sest
07「教科アイデア賞」
の県立松原高(倉敷市)
の県立松原高(倉敷市)

大地震を起すテラ可
性がある山崎断層帯
の上に建つ山崎高は、3
年連続受賞。サツマ
イモと米と水をポリ袋
に入れ、袋ごと揺る
サツマイモご飯など校
災時対応立つポリ袋を
使った調理例をまと
め、冊子を作った。出
席した同高3年の栗原
なのはさん(18)と三輪
杏莉さん(17)と三木七



「ぼうさい大賞」を受賞し、井戸敏三知事(左)から表彰状を受け取る県立山崎高の生徒ら＝神戸市中央区の県公館で

星さん(18)は「誰でも作れるように作りました。設立してからもえたら」と話した。

校で防災授業を開講した。神奈橋高校は防災

昭和60国高は子供から大人まで楽しめる防災イベントを開催。地域のハブ（結節点）になること、地元の防

張訓繩に参加し、小学【藤田一郎、熊本浩二】



山崎高や松陽高表彰

ぼうさい甲子園 被災時の「食」貢献

神戸市の県公館で12日にあった「ぼうさい甲子園」（1・17防災未来賞）の毎日新聞社など主催の表彰式・発表会。「ぼうさい大賞」の県立山崎高（兵庫県）、「奨励賞」の県立尼崎小田高普通科

「ぼうさい大賞」を受賞し、井田三郎（左）から表彰状を受け取る県立山崎高の生徒ら（神戸市中央区の県公館で

看護医療・健康類型（尼崎市）、「たいじようぶ賞」の神戸市立

神港橋高Direct 07（飲料アイディア賞）

の県立松陽高（高砂市）のそれぞれの生徒らが

出席した。

大地震を起す可能性がある「山崎新開地」の上に建つ山崎高は3年連続の受賞。サツマイモと米と水をボ

リに入れ、鍋ごとゆでるサツマイモご飯など被災時に役立つボリ袋を使った調理例をまとめ、冊子を作った。

出席した同高3年の栗原なのはさん（18）と

三輪吉莉さん（17）と三木七聖さん（18）は「誰でも作れるようにしました。役立ててもらえたら」と話した。

尼崎小田高は子供から大人まで楽しめる防災イベントを開催。

地域のハブ（結節点）になると、地元の防災訓練に参加し、小学校で防災授業を実施した。神港橋高は防災啓蒙のオリジナル商品を開発。松陽高は災害食パンの任「松陽餅がまりパン」を作った。

【関係者】縣本治二

守るみんなの手で



ぼうさい大賞

徳島県阿南市立津乃嶋小

「ぼうさい大賞」は、防災・減災の取り組みが顕著な学校や団体を表彰する制度です。阿南市立津乃嶋小は、防災教育の充実と、地域住民との連携による防災活動の推進により、この栄誉を授けられました。

避難所巡りの歌披露



ぼうさい大賞



兵庫県立山崎高



埼玉県立日高特別支援学校

ぼうさい大賞

高知県黒潮市立佐賀中

高知県黒潮市立佐賀中は、防災教育の充実と、地域住民との連携による防災活動の推進により、この栄誉を授けられました。

ぼうさい大賞

兵庫県立山崎高

兵庫県立山崎高は、防災教育の充実と、地域住民との連携による防災活動の推進により、この栄誉を授けられました。

ぼうさい大賞

埼玉県立日高特別支援学校

埼玉県立日高特別支援学校は、防災教育の充実と、地域住民との連携による防災活動の推進により、この栄誉を授けられました。

地域も世界も結ぶ

「非常食ガイド」紹介

忍者の教えで安全に



河田恵昭

河田恵昭氏は、防災・減災の取り組みが顕著な学校や団体を表彰する制度です。

震災から25年、阪神・淡路大震災の経験と教訓、防災・減災の大切さを伝える災害ミュージアム

●毎月17日(休日の場合は翌18日)は入館無料 2月18日(火)は入館無料!

阪神・淡路大震災を伝える語り部フォーラム2020

— 伝えてきたこと、これから伝えること —

語り部フォーラムは、被災者の体験を語り、防災・減災の大切さを伝えるためのイベントです。

日時: 令和5年11月28日(木) 10:00~17:00

会場: 兵庫県立人と防災未来センター

震災25年特別展示

震災25年を記念して、被災者の体験を語り、防災・減災の大切さを伝えるための展示です。

日時: 令和5年11月28日(木) 10:00~17:00

会場: 兵庫県立人と防災未来センター

117シアター

震災25年を記念して、被災者の体験を語り、防災・減災の大切さを伝えるためのシアターです。

日時: 令和5年11月28日(木) 10:00~17:00

会場: 兵庫県立人と防災未来センター



主 催

兵庫県、毎日新聞社、(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構（阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター）

後 援

内閣府、総務省消防庁、文部科学省、国土交通省、兵庫県教育委員会、神戸市、神戸市教育委員会、
関西広域連合、ひょうご安全の日推進県民会議

協 賛 UR都市機構

事務局 （特非）さくらネット

賞および賞金

小学生、中学生、高校生、大学生、特別支援学校・団体の5部門で下記の賞（賞金）を授与

- ◆ グランプリ ぼうさい大賞の中から1校・団体（賞金40万円）
- ◆ ぼうさい大賞 各部門1校・団体（賞金20万円）
- ◆ 優秀賞 各部門1校・団体
- ◆ 奨励賞 各部門数校・団体【8校】
- ◆ URレジリエンス賞 該当数【4校】
- ◆ はばタン賞 該当数【4校・団体】
- ◆ だいじょうぶ賞 該当数【4校】
- ◆ 津波ぼうさい賞 該当数【2校】
- ◆ 教科アイデア賞 該当数【1校】
- ◆ フロンティア賞 該当数【4校】
- ◆ 継続こそ力賞 該当数【2校・団体】 ※【 】内は今年度実績

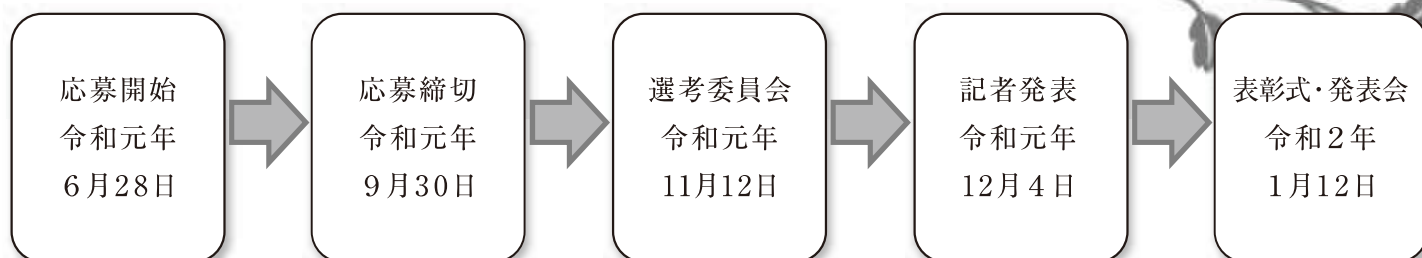
応募先

ぼうさい甲子園事務局（（特非）さくらネット内）

選考基準

- 1 地域性：自分が住んでいる地域の実情に合った取り組みをしている。
- 2 独創性：活動内容に創意工夫があり、ユニークであること。
- 3 自主性：子どもたちが積極的に参加、考えながら取り組んでいる。
- 4 継続性：一過性の取り組みではなく、大人になってからも有効な防災意識を持ち続けられる内容である。

令和元年度 年間スケジュール





委員長 (公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
人と防災未来センター長

河田 惠昭

副委員長 毎日新聞大阪本社編集局長

島田 智

兵庫県防災監

早金 孝

委員 特定非営利活動法人さくらネット 代表理事

石井 布紀子

内閣府政策統括官(防災担当)付 参事官(普及啓発・連携担当)

中尾 晃史

東京大学地震研究所 教授(一般社団法人 防災教育普及協会 会長)

平田 直

特定非営利活動法人グローバルプロジェクト推進機構理事

納谷 淑恵

UR都市機構 理事・西日本支社長

新居田 滝人

文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課 課長

三好 圭

兵庫県立舞子高等学校 環境防災科 科長

梶田 順子

令和元年度(2019年度)

1. 17 防災未来賞「ぼうさい甲子園」記録誌

令和2年3月発行

| | | |
|---|---|--|
| 発 | 行 | ： 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター
〒651-0073
神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2 |
| 編 | 集 | ： 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター
特定非営利活動法人さくらネット
毎日新聞社
兵庫県 |